

東京西南部における市街地変遷のメカニズム

土井, 康太 / DOI, Kouta

(発行年 / Year)

2008-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2008-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P37175
M35-2
2007-2

2007年度 修士論文

指導教授 大江新教授

東京西南部における市街地変遷のメカニズム

法政大学大学院 工学研究科
建設工学専攻 修士課程

主査 大江新
副査 陣内秀信
副査 高村雅彦

学籍番号 05R5233
土井康太

【目次】

英文梗概	4
はじめに—研究目的、研究方法について	6
第1章 東京西南部の地形	8
1. 品川区域の地形における位置	
2. 台地と谷による地形	
第2章 東京西南部の歴史	
1. 品川区のあゆみ	10
(1)遺跡から見る古代の品川	
(2)品川区域に存在した古代の駅家郷	
(3)品川氏が支配した中世	
(4)品川湊・繁栄の要因	
(5)北条氏の武蔵国平定	
(6)宿駅の繁栄と農村部の下屋敷	
(7)東京の黎明期・困難を経て品川県の誕生	
(8)近代化の波・工場地帯	
(9)関東大震災・人口の流入	
(10)太平洋戦争突入・品川の被害	
(11)戦後復興・今に至るまで	
2. 国の政策と人口の変化	15
(1)江戸時代の代官支配地がシフトした府藩県時代	
(2)中央集権化による廃藩置県(大区小区制)	
(3)自治が許された郡区町村編成法	
(4)町村の数を削減した市制町村制	
(5)町村の発展	
(6)戦争特需の人口増加	
(7)驚異的な人口の増加	
(8)市郡併合と区政施行	
(9)現在の品川区へ	

3. 移動範囲の拡大、東京西南部の鉄道の脈動	29
(1) 東海道線 - 日本初の鉄道の誕生 -	
(2) 山手線 - 最初は環状線ではなかった -	
(3) 東急目蒲線 - ディベロッパーの戦略 -	
(4) 東急池上線 - 自分本位の社長が造った路線 -	
(5) 東急大井町線 - 田園都市株式会社の一段落 -	
 第3章 マクロ視点から読み取る東京西南部の市街地変遷のメカニズム	
1. 明治時代 - 縁に点在する農村集落 -	33
(1) 1883年明治16年	
(2) 1909年明治42年	
2. 大正時代 - 近代化の波、工場・鉄道の出現 -	39
(1) 1916年大正5年	
(2) 1921年大正10年	
3. 昭和時代 - 関東大震災後、人が自然に抗う時 -	44
(1) 1929年昭和4年	
(2) 1937年昭和12年	
(3) 1945年昭和20年	
(4) 1955年昭和30年	
4. 第3章のまとめ	55
 第4章 ミクロ視点から読み取る東京西南部の変遷のメカニズム	
1. 鉄道が影響を与えた『場』	56
(1) 妙華園・謎に満ちた河瀬春太郎	
(2) 大規模工場 大井工場の設立	
(3) 有名校の移転の背景	
2. 時代背景が影響を与えた『場』	66
(1) 品川用水の目的と変遷	
(2) 庶民の娯楽 目黒競馬場	
(3) 星製薬工場の隣に大学が設立	
(4) 人の住み付かない桐ヶ谷斎場周辺の謎	
(5) 財閥解体・個人の邸宅から公園へ	
3. 生活に影響を与える『場』	79
(1) 東洋一のアーケード 武蔵小山商店街	
(2) 銀座から名前をもらった戸越銀座商店街	

4. 人の移動を促す『場』	84
(1) 品川区域の主要道—中原街道—	
(2) 参拝・娯楽の道—目黒道—	
(3) オリンピックの道—二子道—	
5. 第4章のまとめ	88
第5章 結論・東京西南部の市街地変遷の中間指標	89
参考文献	91

英文梗概

The mechanism of change in urban districts in the southwest part of Tokyo

First--about the purpose of this study and the way

[The purpose]

Through history, Tokyo city has inherited the feature of space in Edo era, and it has been studied and made clear.

However, in the suburb of Tokyo on which most of Japanese people's life can't help depending, there has seemed to be no discussions about its feature or birth in terms of history by now. Of course, in history of the suburb of Tokyo, old roads and shrines has made existence of medium historical sign certain. But it is said that because the birth by the development in that area was greatly affected by urban sprawl today, generally speaking, the history has at earliest begun after modern time and has no sign of Edo era. From modern time to today, though it was short period of the history, people has adapted themselves to their commotion, making their city and been here. But there is no answer about the birth.

However, Tokyo city has been greatly evolved from modern time to today in spite of the poor background and there is the fact that it has attraction.

Of urban districts, the southwest part of Tokyo in which many houses, shops and trains are, I thought, shows the progress of formation clearly. So, in this report, I focused the objection on the southwest of

Tokyo (mainly Shinagawa ward) and made the mechanism of change in urban districts in Tokyo clear with considering roads of Edo era, those of older, development of railways and division order before and after the Great Kanto Earthquake which are thought to be great elements of the progress of the change as the axis

[The way]

First of all, I brought the features of the landform of southwest part of Tokyo which is the objection of this report as the way. I confirmed whether it can be said that the city has been built by the landform as well as urban districts by human activities, settling it as new basis. Next, I researched these areas in view of history —from pre-modern to today. Pre-modern period had more or less affected the birth. Also, I aimed at governmental policies and systems, lifestyles and history of trains in the period from modern time to today. To next phase, I made the landform and the history the basis of next phase.

The theory has two ways. One is that I observed the objection on a topography every fifth year for seventy years from 1883 (during Meiji era) to 1955 (during Showa era), and plotted the states of sprawls, city divisions and formations of roads, and

examined the mechanism of change in urban districts with combining features of landforms with its history in macro view

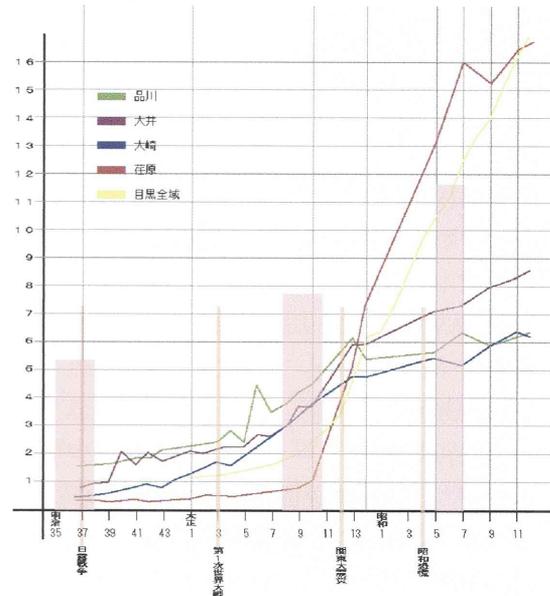
Second one is to focus on a characteristic building, and to examine how it has experienced the change in micro view. I focused on factories, parks and schools which suddenly appeared on the topography, investigated the causes of that, typed these, and observed its effects on the change. Also, I observed examined how the “fields” have changed as a result by researching the formation of cities and roads and small landforms every some years.

With these points hereinbefore, I argued the principal of the change of the urban districts in the southwest part.

[The Summary]

In this report, I made it clear that the medium indicator of the change in urban districts occurred in early period of Meiji, before the Kanto great earthquake, and the fifth to seventh year of Showa with comparing seventy years situation of

modern to today’s urban districts in the southwest part of Tokyo and focusing on the buildings in that area which had great influence on the around. Graph 4 shows the change of population in Shinagawa ward from the latter period of Meiji to the early period of Showa and main incidents and the medium indication. With this, we can see the medium indication exist before the incidents. It seemed that the change came after the incidents, but the sign of change lay before those.



はじめに

研究目的、研究方法について

【研究目的】

東京の街並は、江戸（近世）の空間的特徴を歴史によって受け継いでおり、様々な地域において研究・調査されて明らかにされている。

しかし現在の主な人民の生活の中心であり、魅力的な街が数多く点在する東京郊外においては、今までその特徴や街の成立について歴史的に論じられることはほとんどされていない。確かに東京郊外の歴史は、古道や寺院から中世の歴史性の存在は確認されているものの、現代の住宅地のスプロール化に伴い発展したことが大きいと、一般的に早くも近代以降であり、江戸時代の歴史が抜け落ちていると言われている。しかし、歴史性に乏しい背景に持ちつつも近代から現代にかけての街の発展は目覚ましいものがあり、今ある魅力的な街が創られたことは事実である。

近代から現代の発展にかけて、時代としては短いながら日本にとって激動の時代であり様々な出来事に人々は対応して街を形成し現在に至っている。どのような経緯で現在の街が形成されたのか疑問は拭えない。

東京郊外の中で、住宅・商店街や鉄道が網目のように張り巡らされている東京南西部は、形成における経緯が顕著に表れているのではないかと考えられる。

そこで論文では、研究調査対象地域を東京郊外の南西部(主に品川区)の市街地に着目して、近代から現代にかけて市街地の発生・発展・衰退の大きな要素と考えられる江戸時代の街道、それ以前の道、鉄道網の発達、関東大震

災前後、区画整理を主軸として東京郊外の街が形成されたメカニズムを解明していくことが目的である。

【研究方法】

研究方法として、まずは研究調査対象地域である東京南西部の地形の特徴を挙げていく。東京の街において地形により街並、市街地形成されたように郊外においても人間の行動という点において同様のことが言えるかを確認、新たな発見の礎とする。次にこの地域における歴史の観点から見ていく。歴史は近代から現在のみならず近代以前も調査する。中世の歴史性など近代に関係することを埋もれたままにすることはできない。近代から現在においては、政府の政策・制度、生活、鉄道の歴史に着目して調査していく。地形と歴史の2点を本論文の進行にあたり必要のある知識として次の方法論の土台とする。

方法論であるが、マクロの視点から調査するために明治16年(1883)から大正を経て昭和30年(1955)までの約70年間を5~10年おきに地形図の上で調査対象地域を観察し、市街地の広がり、街区、道の構成をプロットし、地形の特徴、歴史を組み合わせることで市街地変遷のメカニズムを考察していく。

一方ミクロの視点からは、特徴のある建物に着目してどのような変化を辿っているかを考察していく。これはマクロの視点で活用した地形図から突然表れた工場、公園、学校な

どに焦点を充てて、何によって起こりえたエピソードなのか探り、類型化していく。その影響が市街地変遷にどのようなことを及ぼしたのかを見ていく。

同様に東京西南部の街路形成、微地形に着目して年代を縦に追って観察していくことで、

結果的に『場』がどのように変化したかを考察していく。

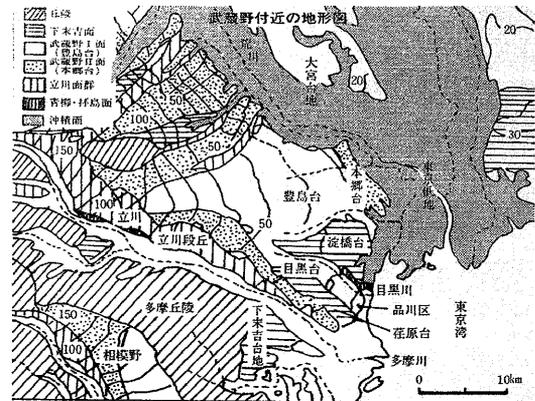
以上の点を調査・分析することで東京西南部における市街地変遷の原理を論じていきたいと考えている。

第1章 東京西南部の地形

第1章 東京西南部の地形

1. 品川区域の地形における位置

本論文の研究対象地域の東京西南部・主に品川区は、現在住宅が密集している地域となっている。今の区分けがされる以前は、武蔵国(現在の埼玉県と東京都)の一部であり、関東地方の中では海に近いことから街道、宿駅が発達した地域であった。東京都は関東平野に属するといっても、台地と低地が存在しており、川が流れ、川が流れる谷地もある。台地は、主に武蔵野台地と呼ばれており長さ50km、幅25kmの日本最大級の洪積台地の1つである。その台地を作ったのは多摩川であるが武蔵野台地に比べると多摩川はけっして長大な川ではない。にもかかわらず広大な扇状地である武蔵野台地を形成したのは、関東平野が構造台地(盆地上に沈み込む運動によって形成された平野)であったからである。低地は武蔵野台地の東側、現在の東京駅辺りから広がる東京低地であり、平坦な地形となっている。このように東京都は2つの地形に跨って存在している。今回の研究対象地域である品川は武蔵野台地がまさに東京湾に没しようとするところにある。地形の形成の観点から言うと、沖積の時代に海からの浸食によって台地が削られて後退し、その先端部分に品川は位置する。武蔵野という地名から想像すると、吉祥寺や三鷹など広々とした平坦な地域を思い浮かべる人がほとんどだと思うが、品川区域の武蔵野台地は、それらの地域に比べると、谷に刻まれることが多く起伏に富んでいるといえよう。



武蔵野附近の地形分布

「品川区の歴史」より

そのことは、品川区域を中心とした地形図からも伺うことができると思う。品川区域が中央線沿いにくらべ起伏に富んでいるかということ、先に述べたように品川区域が東京湾に近い位置にあるために、海食崖やそこから延びた谷が発達しているためと考えることができる。

2. 台地と谷による地形

では武蔵野台地の中で品川区域がどのように起伏に富んでいるか地形をしているか細かく見ていく事にしよう。

品川区域は3つの台地と2つの川で形成されていると言える。

1つは目黒川を挟む高輪台と目黒台である。現在の山手線の五反田駅、大崎駅付近がちょうど高輪台と目黒台に挟まれている地域であり、北側が高輪台となっている。有名なところを上げるならば、御殿山が属する。5m間隔で等高線の色を変えた地形図を見ると、高輪台のほうが等高線の間隔は狭く急な崖を連ねていることが分かるだろう。逆に南側に位

置する目黒台は緩やかな裾野が目黒川に延びていることが分かる。

2つ目は立会川を挟む目黒台と荏原台である。現在の東急目黒線の西小山、東急大井町線の旗の台付近に台地に挟まれた谷地が見て取ることが出来る。1つ目に比べ、等高線の間隔は緩やかではあるが、立会川の東側と西側では若干西側のほうが高くなっていることが分かる。現在東急目黒線に乗ってこの辺りを通っても鉄道が地下化されてしまい気づかないかもしれないが、昔は東から西へ目黒から大岡山方面へ走ると西小山駅を過ぎて立会川の浅い谷を渡った後に鉄道は切通しを通ることになっていた。西側が高いことから線路を切通しにしたことが分かるだろう。

次は谷について見ていこう。

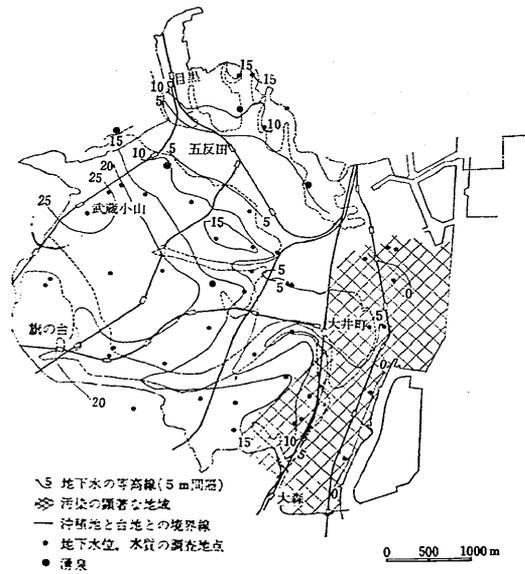
品川区域の川は先ほど上げたように目黒川と立会川である。目黒川は上高井戸、烏山付近に水源を持ち、品川宿付近に河口がある全長約17kmの小河川である。現在は水害対策で直線的な流路をもっており、コンクリートで囲まれた人工河川であるが、明治期の地形図では蛇行していることが見て取れる。第3章で地形図について考察するのでそこで確認していただきたい。

目黒川の南側の地形を見てみると支谷が多いことが分かる。目黒台は地下水を溜めやすい砂礫層であるためにこの付近にある目黒不動・桐ヶ谷の氷川神社には湧き水が出ており目黒台に属した昔の集落はこの湧き水を生活用水、灌漑用水としていた。

立会川は、目黒区の弁天池(現在の碑文谷公園の池)など湧き水を主としたため池に発せられ、目黒台と荏原台の間を浅く細く刻んで品川区まで延びている全長7.4kmの短い河川である。現在は大部分が暗渠化されてし

まい一部でしか見ることが出来ない。

河川以外に昔の品川区域には、台地の崖の中途、台地を刻む谷の谷頭部、台地の崖下の沖積地などに多数の湧き水が存在したと考えられる。台地上では、地下水面が地表より3m以浅にある浅い井戸では、多くの場合水深は1~2m以下であり、これらの井戸はいずれも関東ローム層の中に掘られたものであり、井戸の底は砂礫層にまで達していない。浅い井戸の地下水は、荏原台、高輪台では東京層、目黒台では武蔵野砂礫層の中の難透水性の地層の上部の関東ローム層にたまったものである。浅いものではなく主地下水は、東京層の中の砂層および武蔵野砂礫層のなかにあるとボーリング調査から確認されている。湧き水については図から確認できるので見ていただきたい。現在は市街地化が進み、池は埋め立てられ、崖もコンクリートなどで覆われた部分が増えたので確認できる湧き水の数も少なくなってきた。



品川区域の湧水

「品川区史 通史編 上巻」より

第2章 東京西南部の歴史

第2章 東京西南部の歴史

1. 品川区域のあゆみ

(1) 遺跡から見る古代の品川

明治10年(1877)、現在の品川区と大田区の区境付近を走る汽車の窓から線路際に散乱する貝殻に目を留めたのは、当時来日中のアメリカ人の動物学者エドワード・S・モース博士であった。この場から縄文式土器をはじめ、石器・骨角器などを発見し、日本における最初の原始遺跡の学術調査が行なわれたのであった。この遺跡はご存知の通り「大森貝塚」と命名されて、現在の品川区と大田区の両方に記念碑が立てられている。



このように古代の品川は、遺跡、貝塚などが台地の縁から確認されている。しかしながら、諸遺跡は品川の開発が進んだことによって残念なことにほとんど消滅してしまい明確な状態を捉えることはできなかった。

縄文時代の遺跡がいくつか見られたことに対して、弥生時代以降になると品川区域で遺跡があまり見られなくなってしまふ。これは生活形態の変化による居住空間の選択の結果と考えられる。弥生時代に入ると狩猟から稲作を主とすることから、次第に沖積地へ水路を開き、田を営む形に進んでいく。品川区にも目黒川、立会川があり谷地が存在するが水田耕作を行なうには狭く適さなかったと考えられる。現在の多摩川沿いは低湿地帯であり稲作を行なうのに適しておりその当時の人口が集中したと言えよう。



古代の遺跡区

「品川区史 地図資料集」より

(2) 品川区域に存在した古代の駅家郷

7世紀に入り大化の改新(645)後に、関東には武蔵国が設置された。武蔵国内には21の郡があるが、品川区域は荏原郡に含まれている。この荏原郡は9つの郷によって細かく分割されており、蒲田・田本・満田・荏原・覚志・

御田・木田・桜田・駅家などの名前を持っていた。名前に田が付くものが多い事は弥生時代からの稲作が関係しているのかもしれない。品川区は荏原郡を主体として駅家郷に所属していたと考えられている。

この頃、中央である関西と地方の間には江戸の宿場町・街道のように公式の路線が定められており、一定の距離ごとに駅馬を常備する駅家が設けられていた。武蔵国内における駅家は、店屋・小高・大井・豊島と呼ばれた4駅であった。

大井の駅は大井町周辺にあったと考えられているので、駅家郷と名付けられた郷は、大井町から立会川周辺地域にあったと推測される。やはり駅は、交通の便が良い川の近くに置かれたのであろう。

現在の南品川5丁目に奈良時代から平安時代のものと思われる横穴墓が1基発見された事は、駅家郷と関連付けることが出来る。

このようにみると大井町は昔から駅としての地霊を持ち合わせていたと考えることができる。その背景には立会川が存在が大きいだろう。

(3)品川氏が支配した中世

律令政治が崩れ、混乱の世の中から生まれた武士たちが台頭し始めたこの頃、品川区域では、ある一族が土着するようになった。その始祖は実直と名乗り、中央(奈良)の位の高くない貴族が大井郷に居つき、苗字を大井にした。これが大井氏であり品川区域を支配していった。その子供たちも支配することになるのだが、次男の実春が大井氏を相続したのに対して、三男の清実は大井郷の一部を領して品川氏と名乗るようになった。ちなみに品川という地名が名付けられたのは諸説あるが、品川区域の地形が品の良いため高輪に対して「品ヶ輪」後に品川と呼ばれたこと、江戸湾に流れる目黒川の古名が品川と呼ばれたという説などがある。

大井氏・品川氏ともに鎌倉時代には幕府の御家人として活躍をしたことから、品川氏は、品川郷を相続した。この頃既に、品川郷は南・北品川に分かれていたようで、正式に幕府から地頭職を認められた地域は、南品川郷桐井村(現在の西五反田一带、のちの桐ヶ谷村)であった。現在の南品川と比較すると南品川に該当する範囲はかなり広がったことが分かる。鎌倉幕府はその後北条氏の執権制に移行していくが、品川氏は正嘉2年(1258)を最後に品川区域から見えなくなってしまう。他地域では大井・品川氏の系統が断片的に見られたが、14~15世紀になり完全に姿を消してしまうのである。

時代は室町時代に入り完全に関東は鎌倉府の元で新体制が出来つつあったのである。

(4)品川湊・繁栄の要因

目黒川河口の海岸は武蔵野平野への物資の集散地として湊の機能を持ち、鎌倉~室町時代にかけて発展した。鎌倉・六浦から品川を経て千葉県房総方面を行き来する帆船は、当時の物流の担い手であった。



天妙国寺境内古図

「品川区の歴史」より

湊としての役割を持つと、多くの商人がその地域に住み着き人家が軒を連ねる集落・町としての様相を表し始めたのである。人が多く集まることによって集落の周りに寺院が立ち始めた。品川区域に現存する寺院はこの頃に創建されたと伝わる例が多いことも関係し

ている。それを裏付けることとして、海徳寺境内から昭和 19 年(1944)に品川湊の繁栄を表すかのように、「永楽通宝」、「洪武通宝」などが約 30 貫(112.5 匁)ほど出土したのである。中世の品川湊の経済活動はそれまでに無いほど目覚ましかつたのである。

(5)北条氏の武蔵国平定

室町時代後期、応仁の乱以降関東では、後北条氏の祖である室町幕府の御家人だった北条早雲が何度か武蔵への進出を図ったが永正 16 年(1519)にその生涯を閉じてしまった。子の北条氏綱は今の小田原を居城として鎌倉を支配し、江戸城に兵を動かし勝利を収めた。その後、北条氏康の時に周辺の平定に力を注いだ結果、武蔵野大半は北条氏の支配下に入ることとなった。こうして品川地域の支配は北条氏によって固められていったが、品川の町人・農民は、年貢の減免を要求して町や村から離れていくことが多かったという。これを「逃散」というが、逃散に対して、元の居住地に戻るように命じた国帰しがたびたび行なわれていたことが知られている。

天正 18 年(1590)に豊臣秀吉の関東攻略が始まり、北条氏はあっけなく敗退し、代わり関東を任された徳川家康による支配が始まっていくのである。

(6)宿駅の繁栄と農村部の下屋敷

目黒川河口を中心にして湊や宿として発展した品川郷は、江戸時代に入ると慶長 6 年(1601)に東海道の宿駅として指定され、以来交通上重要な拠点としてこれまで以上に繁栄を極めた。江戸を発った人々は、先ず東海道五十三次の第 1 の宿駅である品川を通る。日本橋からわずか約 8 km もっとも近い宿駅で、江戸の玄関口としての機能を持っていたこともあり、飯盛女が特別に許可されていた。そのため宿駅というよりは社交の場、江戸の

人々にとっても手近な遊興の場として賑わったところである。品川宿は、芝高輪町から大井村までの間、約 2 km に渡り海岸線に沿っている細長い宿場町となっている。当時の宿内には商店が 1600 軒立ち並び、住んでいた人は約 700 人と品川郷の中心地として非常に活気があった地である。

街道沿いに対して品川区域の農村部には武家屋敷が混入していた。その頃の品川の約 3 分の 1 が農村部であったが、その広大な地の中、戸越村を中心にして幾多の大名の下屋敷が散在していた。農村部に大名の下屋敷が多く存在したのは、明暦 3 年(1657)の江戸大火以後、分散のために、上・中・下の数軒の屋敷地を拝領する習わしになったが、その結果として江戸周辺で火災の心配が少ない農村部の中に大名の下屋敷が作られるようになり、品川地域もその候補地の 1 つであった。

江戸時代は宿駅の発展が顕著に見えるが農村部に異分子である下屋敷が混入され、明治時代に向けて緩やかな変化を見せるのであった。その農村の緩やかな変化に反して、ペリー来航、日米修好通商条約、日本は激動の時代を経て慶応 3 年(1867)に大政奉還を行い、江戸 300 年の歴史にピリオドをうつのである。

(7)東京の黎明期・困難を経て品川県の誕生

大政奉還(慶応 3 年(1867)10 月 15 日)により明治天皇東幸が行なわれることになった。明治元年(1868)9 月 20 日京都を出発した明治天皇は、同年 10 月 12 日品川宿に到着した。



武州六郷船渡

「大田区立郷土博物館」より

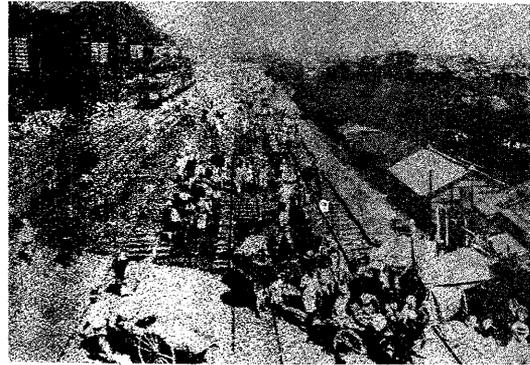
1 泊されるといふことで品川宿はもちろん周

辺村々は文字通り上を下への大騒ぎであったとされている。名主や宿場の人々の心労は並々ならぬものであった。その上、大政奉還により治安が乱れ、一部の薩藩浪人が関東各地に騒動を起こそうと画策していたために旧幕府は、慶応3年(1867)12月25日に薩摩藩邸と支藩の佐土原藩邸を強襲した、この薩摩屋敷焼打ちの余波によって南品川宿と門前町がほとんど消失してしまい、南品川馬場町などはたった2軒しか残らなかったといわれるほどの大被害をこうむったと言われている。痛手がまだ回復していなかったために天皇が1泊する場所の確保には困難が極めた。やむなく南品川の貴船神社境内に鳳輦置場を設け、近くの北品川日本陣の仮行在所を明治天皇の宿泊所とした。その宿泊所が現在の聖蹟公園である。

天皇東幸後まもなくの明治2年(1869)に江戸時代の代官支配地をそのまま区域として品川県が置かれた。明治4年に残っていた藩を撤廃するために廃藩置県が起こり、その後も郡区町村編成法、町村制などの政策が行なわれ、品川区域も色々な町村が交じり合いながら大正時代を迎えるのである。

(8)近代化の波・工場地帯

明治37年(1904)の日露戦争、大正3年(1914)の第1次世界大戦前後において、純農村に近かった大井村も工場の進出が目立つようになってきた。これは、大井村を横切る立会川を工業用水として利用すること、大正3年(1914)の東海道線大井町駅の開設なども影響したと考えられる。同様に品川区内を横切る目黒川沿岸にも工場の進出が著しく、大正7年(1918)の調査で大崎町所在の工場の6割が大正5年(1916)以降の創業であったことが分かっている。工場の進出による生活状況の変化、政界・労働界などの動きも、やがて大正14年(1925)の普通選挙法の公布、無産政党の結成によって大きく変わっていく。



関東大震災による移住

「品川区史 通史編 下巻」より

また大正12年(1923)9月に起きた関東大震災後の品川地域の急速な人口増加が都市として更なる発展・問題を助長させるのであった。

(9)関東大震災・人口の流入

昭和初期、関東大震災後に復興は急激に進んだが、この災害は品川区域の環境に大きな変化をもたらした。それは人口の移動であり、東京市内にいたかなりの人々が郊外へ移住することになったのである。特に地形的に台地に位置する荏原町は、地理的に東京市から交通の便が悪かったが、震災後の住宅欠乏は一挙にこの地域を住宅地化させたのであった。このような人口の流入により、それまでの品川町・大崎町・大井町は品川区へ、荏原町は人口の激増により単独で荏原区へ変更されたのである。この時昭和7年(1932)10月1日、東京市は従来の15区に新たに誕生した20区を加えて35区となり、新発足することになったのである。

(10)太平洋戦争突入・品川の被害

昭和12年(1937)に始まった中国との戦争は泥沼化して、昭和16年(1941)に日本は、更にアメリカ・イギリスなどを敵に回す太平洋戦争に突入することになった。そんな中『集団疎開要綱』が発表され、品川区内の児童数約8500人、荏原区内の約6700人がそれぞれ

三多摩方面、静岡県に疎開することとなった。それからまもなくの昭和19年(1944)11月24日品川・荏原区ともにアメリカの本格的な空襲を受けることとなった。このときの被害は第3章の戦災復興地図で詳しく伝えるが、北多摩郡の飛行機工場を爆撃した余波が東京各地に爆弾を投下したのでかなりの被害が出た。

(11)戦後からの復活、そして今に至るまで

昭和20年(1945)8月15日を境に日本に平和が戻ったが、食糧難だったため品川区域では、大崎駅貨車操車場に到着した貨車が積んでいたサツマイモなどはその場で配給したり、各地にヤミ市が生み出されたりした。例えばヤミ市によって大井町・五反田駅前などは繁栄した。天井知らずのインフレは区民を悩ませ、生きるために近郊農村への買出しが盛んに行なわれた。

そんな中、行政面で荏原区と品川区が合併し、荏原区域を含む品川区が誕生したのであ

る。昭和21年(1946)に公布された『新憲法』には地方自治が示されており、その方針に従って『地方自治会』が施行される事になった。

昭和22年(1947)に荏原区議会は品川区との統合を可決し、新品川区が発足したのである。

戦前から京浜工業地帯の一翼を担ってきた品川区は、その工業経済構造を基礎としているために工場の持つ比率が大きい。戦後の復興期において技術の必要性は以前に増して強くなったため、多くの工場・倉庫群の出現の引き金となった。また商業においても人口増加により発展は目覚ましいものとなり、特に現在のJRと私鉄の接点である目黒・五反田・大井町が繁栄するようになった。また鉄道により品川の台地部にあたる小山・戸越には日本で誇れる商店街が誕生した。更に人口増加はこの地域に多くの教育施設を設立することになる。建物・鉄道の密度が高く、それにより商店街同士が繋がり日本では類を見ない商店街の網目を作り出しているのもこの地域の特徴になっている。

2. 国の政策と人口の変化

第3、4章では地図上から気づく点を考察していくが、その前に地図から見て取ることの出来ない知識をまとめていこう。第2章の1. においては簡単にだが品川の歴史について触れた。ここからは政策と人口の増加、品川の地域特有の網目状に走る鉄道について考察していこう。

(1) 江戸時代の代官支配地をシフトした 府藩県時代(明治元年(1868～))

東京府の設置に伴う品川県の誕生

江戸から東京府に移り変わったことから主に今の山の手線内の土地、言うなれば町奉行支配の土地が当初の東京府の置かれた地域となった。対して江戸周辺の土地は3人の代官が江戸時代では分担して治めていた。維新後、明治時代になってからは3人がそれぞれ大宮県、品川県、小菅県の3つに分けた。文献が残っていないため推測になるが、代官の支配地は昔から支配していた地域であったと考えられる。推測の要因は、品川県の設置を明治元年(1868)11月5日より支配する土地に行なうように命じられていたが、支配地域にさしたる変動が無かったためか、すぐに県を設置することがなく遅れて明治2年(1869)2月9日に設置されたことである。

設置後は品川県内に江戸時代の村組合を尊重し、いくつかの村々が組合を組織した。組合は1～24番に分かれていた。今の品川・大田・世田谷・目黒・渋谷・新宿・中野・練馬・杉並の各区と都下の北多摩・西多摩などにかけてほか、埼玉県の一部を含んでいる。品川県は近世の延長のような形での支配であったにしても、その当時の都市的な品川宿や新宿から、

純農村である所沢など様々な村も含まれていることから、新しい県政で何かを行なおうとしても、地域差による抵抗が起こっても致し方ない現状があった。

このような広域の地域に渡った初期の品川県の県庁所在地は明確に言うことが出来ない。それは品川県が明治2年に始まり、明治4年7月14日に廃藩置県が漸行されたことにより、明治4年10月新たに府県制3府の外302県になってしまい、急速にこれを統合することになり品川県は解体解消、他府県への分離統合が行なわれるようになったことが考えられる。

明確ではないが品川県が出発する際、旧日本橋馬喰町に代官屋敷があった関係からか、あるいはその近くの東海寺に県庁を置こうという考えがあつてのことか、とにかく日本橋浜町河岸近くの小笠原弥八朗邸が維新の変転によって空き家になったからなのか、浜町に品川県事務所を設け臨時にそこが県庁の役割を果たしていた。

品川区史の書かれている古老の話によると、「はじめに東海寺を県庁にすることとし、本堂を壊し修復して県庁らしく改築しようとしたが、完成を見ないうちに明治4年の廃藩置県によって品川県が廃止になってしまった」のだという。

(2) 中央集権化による廃藩置県 (大区小区制)(明治4年(1871～))

廃藩置県(大区小区制)

府藩県時代から全国を府県制にしたことで3府の外302県と細分化されてしまったことにより、政府はこれを急速に統合することに

なった。この結果品川県は解体解消されて、他府県への分離統合されることになったのである。それは、もともと代官支配地であった品川県では大きすぎることもあったが、東京が事実上の首都となったことから東京は大政奉還の混乱から急速に回復し、人口の増加の傾向もあったために東京府、その周辺を強化する必要があった点も否定できないのである。これによって府藩県時代の品川県のうち、明治4年(1871)12月5日東京府に編入されたのは、荏原郡のうち85カ村、豊島郡のうち26カ村、多摩郡のうち55カ村であった。

廃藩置県後、東京府周りから村を編入させ、大区小区制によって市中(主に山の手線内)を6大区に分け、その6大区の次に東京南部を7大区、南西部を8大区、北西部を9大区、北部を10大区、東部を11大区として7~11大区の5大区をさらに33小区に分けたのである。

この結果、7大区2小区には北品川宿・品川歩行新宿・品川台町・南品川宿・南品川獵師町・利田新地・二日五日市村、7大区3小区には大井村・上蛇窪村・下蛇窪村、7大区5小区には上大崎村・下大崎村・居木橋村・桐ヶ谷村・戸越村・小山村・谷山村・中延村が含まれていた。上記の村々は2008年現在の品川区を構成している主な村や町である。

しかし今に比べると小区による区画が大きいことが分かる。また明治政府の意図から生まれたこの大区小区制は地域住民の便宜を図ったものではなかったため、旧来の町村の制度・習慣を無視し、実情に適さないことが多かったために町村の負担は従来と変わらず、負担は増えていくというのが現状であった。しかし、この区画は明治11年(1878)の郡区町村編成法による荏原郡の誕生まで、こうした形で行政区画が続くのであった。

(3)自治が許された郡区町村編成法

(明治11年(1878~))

郡区町村編成法

大区小区制は旧来の町村の制度・習慣を無視した結果、町村の負担が増加したため国内の不平不満が充満し、各地に争乱一揆がしきりに起こってしまったのである。そこで当時の内務卿大久保利通は地方制度全般の改革を明治11年(1878)に着手していったのである。それによって生まれた三新法(郡区町村編成法・府県会規則・地方税規則)の特徴は、今まですべての権限を中央政府が握っていたことを反省し、大久保利通が古来の郡制を復活させて、これを行政区としたことである。つまり郡を政府官僚機構の最末端として、町村には一定の自治を認めるということであった。かくして、町村は自治団体として認められて、その代表である戸長(村長や町長のような立場)は町村民から選出された。

このように郡区町村編成法によって市中を麴町・神田・日本橋・京橋・芝・麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川・本郷・下谷・浅草・本所・深川の15区と、荏原・南豊島・北豊島・南足立・南葛飾・東多摩の6郡が設けられ、それぞれに区長、郡長が置かれた。現在の品川区が含まれている荏原郡は、大区小区制の第7大区の村々90宿町村をすべてその管轄下に治めて、郡役所を品川に置いたのである。自治団体になったことや新三法により組合町村の規模がかなり大きくなった。一方町村の代表となる戸長については、1つの村や町1つ1つに置く事はしなかった。それは町村の規模が小さいもの、戸数が少ないものがあったためである。そのため数ヶ町村連合して戸長をおくところが多かった。では、明治11年(1878)の荏原郡ではどのような戸長を形成していたのかを見ていこう。まず以前第2小区に属していた品川では、南北に分かれ、1つずつ戸長役場をおいた。明治11年(1878)に東京府が調査した『東京府村誌』により品川の戸数・人口を示すと以下の通りになる。

宿村名	戸数	男人口	女人口	計人口
南品川宿	1511	3002	2603	5605
南品川獺師町	168	403	394	797
南品川利田新地	70	153	158	313
二日五日市村	59	114	96	210
計	1808	3672	3251	6925
北品川宿	1004	1895	2008	3903
品川歩行新宿	395	831	961	1792
計	1399	2726	2969	5695

図表から分かる事は、南品川宿・北品川宿など東海道に面して宿場町となっていたところの人口は、ほかの町村より明らかに多いことが分かる。またこの頃から東京府市中からの人の流入が徐々に進みつつあることを示唆している。

次に第5小区に属していた上大崎・下大崎・谷山・桐ヶ谷・居木場の5ヶ村が合して

連合戸長役場を設けて出来た戸長の戸数・人口を見ていこう。ちなみにこの後明治22年(1889)の町村制施行のところでも語るが、この連合村は町村制施行に伴う大合併により大崎村に発展していくのである。

村名	戸数	男人口	女人口	計人口
上大崎村	155	302	278	580
下大崎村	96	190	168	358
谷山村	25	93	73	166
桐ヶ谷村	75	172	158	330
居木場村	52	158	138	296
計	403	915	815	1730

第3小区に属していた大井村は、旧幕時代から一貫して大井村を称え、明治11年(1878)の郡区町村編成法においても独立して戸長を

選出している。当時の大井村の戸数・人口は以下の通りである。

村名	戸数	男人口	女人口	計人口
大井村	968	2241	2116	4357

大井村が独立して戸長を置けた事は大井村の人口・戸数がほかの村(南品川宿、北品川宿を除く)に比べて数倍あることから分かる。なぜ大井村にこれだけの人口・戸数があったかということだが、大井村も東海道に面していたことが大きな要因といえよう。この時代まだ交通網が馬車や明治3年(1870)に開通した東海道線しかなかったこと、各地からの海か

らの来航が多かったことも要因として挙げられるだろう。

明治22年(1889)の町村制施行により平塚村、その後の荏原町と発展した海岸線よりも内陸に位置した地域は、第3小区に属した上蛇窪・下蛇窪両村に第5小区の戸越村とが合し、連合の戸長役場を置くことになった。

同様に第5小区に属していた中延・小山の両

村も共同して戸長役場を設置した。第5小区の戸越村と中延・小山の両村が合して戸長を設けなかったのは、旧幕時代に上蛇窪・下蛇・戸越は品川領に属し、中延・小山は馬込領に属していたという旧来からの村治行政と密接

な関係によるものと考えられる。このような戸長の設け方に時代背景を感じることが出来る。

ではこの2つの戸長の人口・戸数はどのようになっていたかを見ていこう。

村名	戸数	男人口	女人口	計人口
戸越村	170	426	422	848
上蛇窪村	31	情報なし	情報なし	193
下蛇窪村	55	情報なし	情報なし	305
計	256	情報なし	情報なし	1346
中延村	147	390	428	818
小山村	69	227	221	448
計	216	617	649	1266

(注)上・下蛇窪村については『東京府村誌』中に記録を欠くため、『住原区史』の数字を採っている。同書の戸越・中延・小山の戸数・人口が村誌の数字に近似していることから記載している。

海岸線、東海道に面している地域に比べて、明治11年(1878)の人口・戸数の記録があまり正確に残っていないのは、やはり場所性が関係していると考えられるだろう。この頃の内陸部は農村が主であるため、記録をとるという作業に慣れていなかったのではないであろうか。

戸数の計を見ると、南品川宿が属する戸長と比べても戸越村が属する戸長は0.14倍、中延・小山村の戸長は0.11倍となっている。戸数の少なさは明らかである。

次に計人口/戸数の計算(1戸当たり平均して何人が住んでいるか)をしてみると面白いことが分かる。南品川宿が属する戸長は1戸当たり3.8人、北品川宿が属する戸長は1戸当たり4.0人となることに対して、戸越村が属する戸長は1戸当たり5.3人、中延・小山村の戸長は1戸当たり5.9人となる。このことから推測できる事は、農村部は1つの住居に多くの人が住んでいる。これは家族構成が2世帯になっている、もしくは子供の数が多いうことになる。恐らく移り変わりの少ない農村

部においては前者であると考えられる。

以上のように明治11年(1878)の郡区町村編成法による旧幕時代の郡・町村の復活(名前だけ)は当然のことながら旧幕時代の町村のくくりの復活ではなく、大区小区制の影響下における郡・町村の分割、戸長役場の設置であった。

これが明治22年(1889)の町村制による大合併の原型となっている事は注目されるべきことである。

戸長を比べてみても、宿場町として発展してきた品川を管轄している戸長、農村部の大崎・戸越・中延などのように全国平均の戸数を持った戸長とばらつきがあるが、これらは旧幕時代のつながりなど特別な事情もあるが一般的には役場の経費の削減、民費の負担を出来る限り少なくしようとした結果であった。

(4)町村の数を削減した市制町村制
(明治22年(1889～))

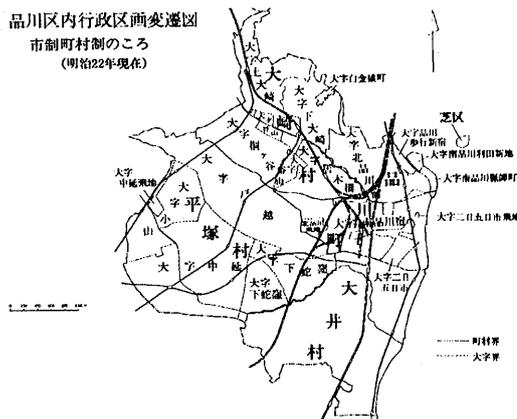
市制町村制

明治11年(1878)からの郡区町村編成法により宿や村の自然な合併が行なわれたことにより明治21年(1888)末までに全国で71314ヶ所の町村が出来てしまった。因みに当時市制を施行していた都市は全国で40にも満たなかった(東京府では東京市のみ)。このように大部分を町村に依存してしまう形であったため、目下の問題点は町村費の増大であった。そこで町村の事務量の増大、経費の増加を解決しようとして取られたのが町村の更なる合併による資力の増大であった。

かくして、全国規模の町村合併が漸行された。これが明治22年(1889)の町村制である。結果、全国71324ヶ所の町村は15820ヶ所の町村と5分の1に激減した。この時成立した町村がほぼ現在の町村の原型となり旧来の町村は大字となったのである。

では現在の品川区域では、どのような町村合併が行なわれ、町村制が実施されたかを見ていこう。

品川区内行政区画変遷図
市制町村制のころ
(明治22年現在)



明治22年ごろ市制町村制の区分け

「品川区史 地図統計集」より

東京府は町村の合併、郡区境界線の変更について「町村区域戸口資力調査」を行い、各町村の戸口・民有地・租税・物産・徴発物件などの詳細な調査に基づき府庁で原案を作成した。しかし、郡部側からしてみると、東京

市などの市を優先する(担税能力を持つ地域を市部に編入する)東京府の考え方は納得できなかったのである。この考えが実施されると郡部の人民は従来の1.5倍の負担を負わなければならないからである。

結局府当局の市部優先の都市中心型の合併は貫徹されることになった。

次に郡部内の町村合併については、各郡長の意見を戸長に落とし、その意見を取捨して各町村会にはかるという順序を取った。この中にも東京府から郡部への上からの押付けの構図が見えてくる。従って品川区域に限られたことではないが、町村民の意向とは異なる東京府の都合が強制的に行なわれることになったのである。

各戸長はどう変遷していったのであろうか。

町村民と東京府の案でもっとも問題になったのは、品川町であった。当初府から下ろされた案は、北品川宿のうち日黒川以西を除く地域と品川歩行新宿をもって北品川町と改称、南品川猿師町と南品川利田新地をもって品川猿師町と改称し、両町を東京府の芝区に編入し残りを品川町とするという案であった。

対して、郡区町村編成法によって南品川宿・南品川猿師町・南品川利田新地・二日五目市村を中心とした戸長と北品川宿・品川歩行新宿を中心とした戸長はそのままの形で合併して、南品川町と品川町にすると主張し各町村会で決定した。

町村会が2つに分けた理由としては、南品川宿を中心とする地域は水産業・農業で生計を営んでいたのに対して、北品川宿を中心とする地域は商業・貸座敷を主としていたため、風俗習慣を同じとしなかったことからだった。

しかし、住民の懇願は府が受け入れることは無く、全域を品川町としたのである。

旧町村名	戸数	人口	反別	地価
北品川宿	1 2 7 7	6 0 5 9	86反 6020	48円 953
品川歩行新宿	3 8 9	2 3 6 4	4反 6318	24円 207
南品川宿	1 6 0 3	6 6 5 2	98反 2702	51円 080
南品川獵師町	2 0 2	8 8 8	1反 8225	1円 182
南品川利田新地	6 2	3 2 6	0反 9115	0円 617
二日五日市村	6 8	2 4 1	19反 6105	5円 942
計	3 6 0 1	1 6 5 3 0	211反 8625	131円 983

このように6ヵ町村が集まり品川町となった。獵師町・利田新地などは東海道に面しておらず、海岸沿いに土地があったためにほかの宿に比べると人口と反別において少なくなっている。

大崎村を中心とした戸長でも同様に東京府からの案に賛成したわけではなかった。東京府が、従来の連合戸長役場を構成した上大崎・下大崎・谷山・居木場・桐ヶ谷5ヵ村をもって新村をつくらうとしたのに対して、大崎村を中心とした戸長は、5ヵ村に加えて

白金村・三田村・芝区白金猿町を加えて新村をつくりたいと考えたのである。戸長がそのように考えたことには、白金村などは同じ郡に属しており、人情風俗が異なることは無く、白金猿町は近隣の村を得意とする商家が多いことなどがあったからである。そしてなによりも3つの町村を加えたいと考えたのは、5ヵ村とも地価が低く到底財政的に独立することが出来ないということであった。

しかしここでも戸長らの意見を府は受け入れず、結局白金猿町の合併だけで終わってしまったのである。

旧町村名	戸数	人口	反別	地価
上大崎村	1 8 2	7 2 2	53反 0706	11円 903
下大崎村	1 0 4	5 6 0	61反 6316	16円 890
谷山村	2 5	1 6 3	17反 5300	4円 812
居木場村	4 7	2 9 8	40反 3227	16円 340
桐ヶ谷村	7 6	4 4 8	65反 7525	18円 475
白金村増上寺下屋敷	7	3 5	16反 2321	1円 935
白金猿町	1 2 6	4 7 7	2反 3100	1円 022
計	5 6 7	2 7 0 3	256反 8705	71円 377

表から見てもいかに大崎村の財政が悪かったのかを上記の品川町の表と比較しても知ることが出来るであろう。大崎村と品川町の大きさは、反別を見ても分かるようにほぼ同じに係わらず人口は0.16倍、地価は0.54倍である。明治22年(1889)当時はまだ山手線は開通していないため、大崎周辺は内陸部に属し、農村となっていた。明治34年(1901)に日本鉄道(現在のJR)が開通し、山手線が通る明治42

年(1909)以降に工場、町としての発展をしていくのである。

平塚村については、東京府と戸長の意見が合致したために従来の戸越・上蛇窪・下蛇窪の3ヵ村戸長と中延・小山の2ヵ村戸長の区域が合併された。しかし合併に際し新村の名前を何にするのかが問題に上がったのである。

戸越村ほか2ヵ村は、この地方の物産であ

った孟宗竹を移植した山路勝孝翁の功績を村名に留める事から、竹旭(たけひ)村としたいと要望したが、中延側は、両戸長の境界線近くに平塚と呼ばれる約20坪ほどの塚があり、大きな松2本が植えられて、お稲荷さんが頂上に祭られていることから平塚を村名にしたいとしたのである。

両者の意見は長い間平行線で、途中で各村の1字を取って「戸小中蛇村」と称するべしなどという意見が出たほどである。結局は平塚村で落ち着いたわけだが、両者のやり取りは昭和2年に平塚村が荏原町に変更されるまで尾を引いた模様である。

旧町村名	戸数	人口	反別	地価
戸越村	172	965	148反4028	29円342
上蛇窪村	35	244	34反6819	9円431
下蛇窪村	60	331	44反7005	11円828
中延村	145	836	166反8114	32円463
小山村	68	398	65反9307	11円649
谷山村の飛地	0	0	1反4827	0円264
計	480	2774	462反0310	94円979

品川地域に属する村の中で1番の広さを持つ。広い土地のほとんどが田畑となっている農村部となっている。人口と反別において戸越村と中延村がほかの村に比べて多いことは、表から明らかだが、後に記載されている『明治16年(1883)地形図』からは、戸越村近辺に中原街道が通っていること、東京府への主な道が近く農作物を運ぶ上で重要な役割を果た

していたことが人口の多さに繋がっていると考えられる。中延村においても同様のことが言える。中延村においては中原街道を南北に跨ぐ様に集落が形成されている。

大井村については東京府の「町村区域戸口資力調査」により戸数・人口・土地ともに新町村の基準に達するとされて、大井村だけで新制度に移行する運びになった。

旧町村名	戸数	人口	反別	地価
大井村	951	4776	279反7710	83円602

大井村は戸数・人口・反別ともにほかの村に比べて大きいが無き無く集落が広がっていたわけではなく、広い分場所性は様々存在した。東海道に沿っている場所においては宿が存在していたのに対して、少々内陸部、立会川に沿っていくと田畑が広がっている。大井村は平塚村に接しているため農村としての顔も持ち合わせている。東海道があることで大井村は新町村の基準に達することが出来たが、もし東海道や海岸線に接していなかったと仮定したら大井村は平塚村と同様の純農村と化していただろう。

(5) 町村の発展

(明治22年(1889)～明治末期(1912))

大区小区制、郡区町村編成法、市制町村制を経て行政村としての土台を作り上げた品川区域の町村は東京市の近郊に位置することから、急速な発展をしていくのである。

以下の品川区域の各村の人口表を見ると明治21年(1888)から明治45年(大正元年)(1912)までの約20年間のうちに品川では1.37倍、大崎では4.72倍、大井では4.35倍、そして平塚では1.56倍に増加していることが分かる。

	品川町		大崎村		大井村		平塚村	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
明治 11 年	3208	12426	403	1730	968	4357	462	2612
21 年	3601	16530	567	2703	951	4776	480	2774
26 年	3549	16028			1700	5250		
29 年	3546	17326	610		1147		482	
30 年	3578	17687	610	4247	1180	6303	482	3275
31 年	3593	18299	621	2812	1137	6059	492	3297
32 年	2701	15549	647	3918	1287	6137	495	3338
33 年	3613	15447	662	3919	1368	6065	498	3386
34 年	3619	14121	685	3871	1466	6442	481	3490
35 年	3622	15522	727	4050	1556	8644	615	3491
36 年	3625	15306	763	4270	1556	7977	632	3494
37 年	3648	15383	989	4344	1596	8304	641	3564
38 年	3715	15619	1041	5152	1683	9382	602	3653
39 年	3976	16207	1174	5752	2581	9778	503	2949
40 年	4106	16774	1540	7293	3730	20450	570	3056
41 年	4488	18056	1735	8524	3960	16010	618	3752
42 年	4583	18585	1758	9204	4116	20232	668	3315
43 年	5064	21221	2051	8483	4293	17038	580	3587
44 年	5085	21742	2226	10844	4353	18696	760	4027
大正元年	5127	22597	2913	12759	4372	20801	823	4327

表を見ることによって、この時期の品川区域の発展が推測できる。品川町のように宿場町として江戸時代からかなり市街化形成されていた早熟した地域、平塚村のように内陸部にある純農村地域は比較的緩やかな人口増加を見せている。

それに対して大井村・大崎村の増え方については驚くべきものがある。

急激な増加をしている大井村・大崎村の人口の経緯を表からみると赤字のところでは顕著な増加を見て取ることが出来る。これは、明治 37～38 年(1904～1905)に日露戦争が起きた前後が赤字となっている。このことから日露戦争の影響によって人口が増加していることが分かるだろう。特に日露戦争後の明治 40 年(1907)に大井村の 9778 人から 20450 人、大崎村の 5752 人から 7293 人への増加は今だ

かつて無いものである。日露戦争による科学の発展により、資本主義の発展も助長されたことが要因となったのである。

大崎村の場合、目黒川流域の工場新設がこの時期に目立ってくる。明治 38 年(1905)までには 8 工場しかなかった。また工場といってもそれほど大きいものではなく、明電舎を除くと 50 人以下の小規模工場ばかりであった。ところが、日露戦争後の明治 39～43 年(1906～1910)の 5 年間に 9 工場、明治 44 年～大正 4 年(1911～1915)の 5 年間に 19 工場が創設されて計 36 工場となっている。この中には 400 人以上の工場を 1 つ含んでおり比較的大きな工場も建てられていった。

同様に大井村においても立会川の豊富な水を工場に利用するため、また地盤が固い大地という自然環境を使い工場が新設されていっ

た。またこの2つの地域の共通の特徴は川だけでなく、輸送手段となる鉄道が通っていたことが大きな発展の要素となっている。大井村には東海道線が南北に走っており、大崎村には明治34年(1901)に山手線の原型となる路線が開通している。大崎村の明治41~42年(1908~1909)の人口を見ると明治42年に開通した山手線に触発されるように人口の増加が見られる。

工場が建てられたことによって人口が増えると、伴って周辺に住宅・商店街が形成されていくことになる。この表には書かれていないが、大正3年(1914)に大井村に大井町駅が開業してその影響により、軽工業・紡績・重工業・精密機械工業の工場が新設されること

になるのである。

このように急激な人口の増加に伴い、明治41年(1908)8月1日から大井村・大崎村はともに町制を施行されて、名前を大井町・大崎町となったのである。

(6)戦争特需の人口増加

(大正初期(1912)~)

日清・日露戦争を経て日本の日本主義は急速に成長した。この傾向は大正3~7年(1914~1918)の第1次世界大戦中の空前の経済的繁栄の中で一層強まった。人口は下の表を見てもらえると分かるが、品川区域全体で明治42年(1909)からの10年間で2倍強の増加が示されている。

地区別	戸数			人口		
	明治42年	大正2年	大正7年	明治42年	大正2年	大正7年
品川町	4488 (100%)	5358 (119)	8301 (185)	18262 (100)	22910 (125)	35051 (192)
大崎町	1735 (100%)	4179 (240)	5958 (343)	9544 (100)	14626 (153)	25599 (268)
大井町	3960 (100%)	4274 (107%)	6120 (155)	14471 (100)	20188 (136)	25905 (179)
平塚村	618 (100)	954 (154)	1345 (218)	3381 (100)	5326 (157)	6717 (199)
計	10801 (100)	14765 (136)	21724 (201)	45658 (100)	63050 (138)	93272 (204)

この人口増加の主な要因としては、言うまでもないが品川区域の工業発展にあった。工場発展は近隣に住宅地・商業地を形成した。

こうしたなかで特に顕著な変化を見せたのは、前述で上げたが大井町と大崎町である。日露戦争前は純農村の近かった大井町は戦後になり工場進出が目立ち、こと第1次世界大戦に入ると、大正5年(1916)には日本理化学工業、翌年(1917)には日本光学大井工場、大正8年(1919)には精密機器・測定具製造の朝日衡器、翌年(1920)には三菱航空大井工場が創

設されるなど、重工業・精密機械工業を主に建てられていった。大正4年(1915)には新橋(今の汐留)から鉄道の大井工場も移転してきた。従業員が1000人を超える大規模なものであった。この知識を得た状態で改めて表を見ていただくと数字に実感が出てくるであろう。

(7)驚異的な人口の増加

(大正9年(1920～))

明治時代では、東京に隣接しながら、交通の便が悪く全くの田舎であり、明治7年(1875)の品川区域の人口は、約1.9万人であった。また23年後の明治30年(1898)になっても約1万人増の約3万人にしか過ぎなかった。この結果だけ見ると人口増加微々たるものであった。

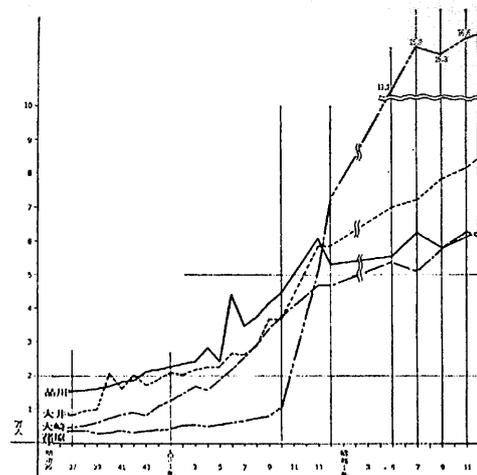
大正初期から中期にかけては先ほど上げたように、工業発展により人口増加が目覚しかった。この増加により品川区域の人口は約9万人に上り明治30年(1898)から大正中期への約20年間で約3倍に跳ね上がった。

では大正中中期から昭和初期にかけてはどうかであったのだろうか。工業発展の人口増加は下火になり、自然増加に戻ったのだろうか。

明治後期から昭和初期にかけてのグラフをここで見てみることにしよう。

このグラフを見ると驚くべきことが分かる。大正中中期から末期にかけて今までにない伸びを見せているのである。これは大正12年(1923)に関東大震災に起きたことにより東京市からの人口の流入が原因である。大正7年

(1918)の人口が前に書かれた表から93272人と読み取れるのに対して、大正14年(1925)には232447人と約2.5倍になった。品川区域全体ではこのような結果となったが、4つの町村(品川町・大井町・大崎町・平塚村)で



明治末期から昭和初期にかけての人口推移

「品川区史 通史編 下巻」より

は大正9年(1920)と昭和5年(1930)の人口を比較して、どのような増加になったかを見ていこう。

町村別	品川町人口	大井町人口	大崎町人口	平塚村人口
大正9年	41059	36959	34837	8522
昭和5年	55639	53780	70080	132107

このようにしてみると、平塚村の人口増加が顕著であり10年間で15.5倍になっていることが分かる。ほかの町は1.36~2.01倍と増えているがどうしても平塚村と比較すると劣って見えてしまう。この増加は、関東大震災による人口の流入が主である。またこの時期に鉄道が開通したことで交通の便が良くなり品川区域で東京・目黒川流域・品川宿から最も離れていた平塚村に人口が集中したと考えられる。

東京市近郊5郡の町村の中で最も急激な人口増加を遂げた平塚村は、当時の日本一の人

口稠密な村となったのである。かくして村当局も町制に移行することにし、大正14年(1925)に町制施行を決定し、名称を平塚町とすることにした。

実際には大正15年(1926)4月1日から平塚町になったのだが、ここで弊害が出てしまった。それは、平塚町という地名が東京府下北豊島のほか神奈川県・千葉県・群馬の各県にすでに存在しており、郵便・交通・行政面において色々な不都合が生じたことであった。こと郵便においては、神奈川県・千葉県・群馬を一巡する危険性もあったので町民にとっては不安

の種になったようである。

そこで昭和2年(1927)に平塚町は改称の決議を行い、古くからゆかりのある荏原を町名にすることにしたのである。

(8)市郡併合と区政施行

(昭和7年(1932))

明治11年(1878)の『郡区町村編成法』により従来の大区小区制は廃止され、東京の中心部には15区が置かれ、周辺部には6つの郡が設置された。今の品川区域は、荏原郡に含まれていた。以来、昭和に入るまで荏原郡内での変化はあったものの、関東大震災を引き金に人口の流入・流出が起こり、周辺郡部の状況を一変させることになった。

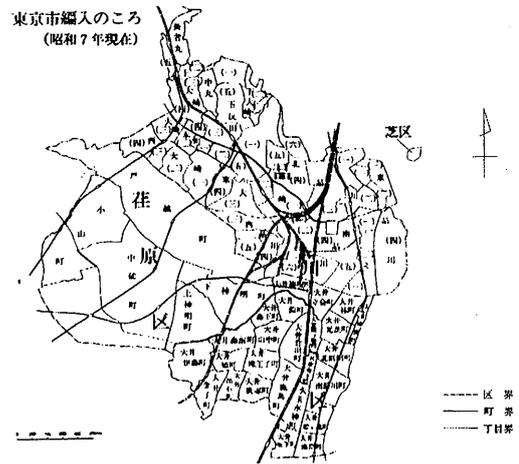
こうした周辺郡部に中心部同様に区を設置させようとする計画は従来から検討されていたが、ようやく『新区設定基準』が定められた。この『基準』は、従来からの町村界を踏襲し、人口が14~20万人に達した町村をひとまとめにして区を設置することだった。

東京市当局による品川周辺に新区を設定する原案は、品川町・大崎町・大井町をまとめて1区として、荏原町・馬込町(現在は大田区に属している)を1区としようとした。東京市の原案に対して、それぞれの町の考えは、自

分の町からの視点で主張していたためまとまらなかったのである。

結局、品川町・大崎町・大井町は原案通り品川区になり、荏原町は、馬込町からの主張である、「当時急激な人口増加による財政窮迫に悩んでいた荏原町との合併を望まない」ことが通ったため、荏原町は単独で荏原区となり、馬込町は大森区側に編入されることとなった。

東京市編入のころ
(昭和7年現在)



昭和7年市郡併合による東京市編入

『品川区史 地誌統計集』より

昭和7年(1932)10月1日、東京市は従来の15区から新たに誕生した20区を加えて35区となり、新発足する運びとなったのである。その時の品川区と荏原区の人口・面積・密度をまとめたものが以下の表である。

品川区	人口	面積(坪)	密度(1万坪当たり)
大崎町	53777	961043	559
品川町	55639	904778	615
大井町	70080	1228185	580
計	179496	3094006	584

荏原区	人口	面積(坪)	密度(1万坪当たり)
荏原町	132108	1753895	753

こうしてみると荏原区は14万人の規定に沿わずに区へ編入されたことが分かる。市当局側は今後の人口増加に期待をしたのかもしれない。

(9)現在の品川区へ

太平洋戦争に突入する前まで、発展し続けてきた品川・荏原区にとって、戦災は壊滅的な影響を与えた。そのため1つの区では財政的に立ち直れない状況であったために、復興

の最中の昭和 23 年(1948)に品川区と荏原区が合併し現在の品川区が誕生した。財政的ということは、人口の減少も一端を担っており以下の表が戦後間もない両区の人口を表したものである。

区名	昭和 10 年(1935)	昭和 15 年(1940)	昭和 20 年(1945)
品川区	204262	231303	89782
荏原区	161863	188100	53708
計	366125	419403	143490

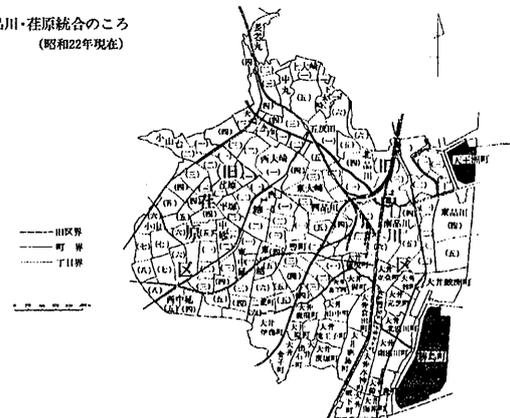
戦前の昭和 15 年(1940)では約 42 万人いた人口も、戦後には疎開や被害にあった関係で約 14 万人と 3 分の 1 倍に減少してしまったことが良く分かるであろう。また戦災によって両区共に多くの地域が焦土と化した状況も忘れてはならない。

この状況は、東京の 35 区においても大差はなかった。戦災と疎開の結果、人口が 4 万人を切る区も 10 区以上生まれたのである。このような小さな区の出現は、統合を促す大きな要因となった。品川区域も昭和 22 年(1947)に品川・荏原両区が合併し現在の品川区となったのである。

しかしこの合併が後の品川区の発展の1つの基礎となったのである。品川区政も自治体としての内容を整えていった。例えば区長を区民が直接選挙で選ぶようになり、区財政の基礎も、戦前は国税や都税の付加税でしかなかったものを独立税としたのも、その表れであった。それから 10 年余り昭和 30 年代になると、戦争の傷跡は消えたわけではないが、日本は高度経済成長期にと入っていった。そのことがはっきりと認められるのは、日本経

済の飛躍的な発展である。

品川・荏原統合のころ
(昭和22年現在)



昭和 22 年品川・荏原区合併

「品川区史 地図統計集」より

敗戦の翌年の昭和 21 年(1946)には、戦前の 3 割に落ちた日本の工業生産は、昭和 34 年(1959)には戦前の約 4 倍に膨れ上がったのである。

高度経済成長下における品川区の発展は、ひとえに人口の増加であるということが出来る。転入ももちろんだが、引揚げ・復員等による影響も大きく漸次増加し、昭和 30 年以降は以下の表のように人口は推移している。

年次	世帯数	人口	人口の対前年増加
昭和 30 年	96419	374184	11774
31 年	97799	374498	314
32 年	100959	381209	6711
33 年	102388	384445	3236

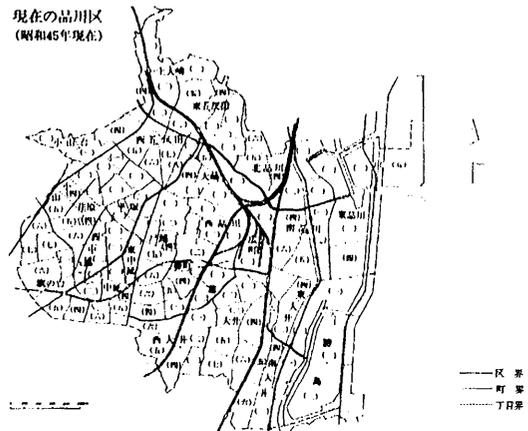
34年	108112	393546	9101
35年	113258	402583	9037
36年	120455	409003	6420
37年	130559	414520	5517
38年	135824	412012	△2508
39年	144535	415728	3716

昭和30年には、戦後の昭和20年と比較すると、約2.6倍となっている。人口は昭和38年(1963)以外増加傾向にあるが、増加している人数は徐々に減少している。

このことを考察するために、区人口における社会増減数(自然増減は出生と死亡、社会増減は転入と転出)の推移を見ると意外なことが分かる。

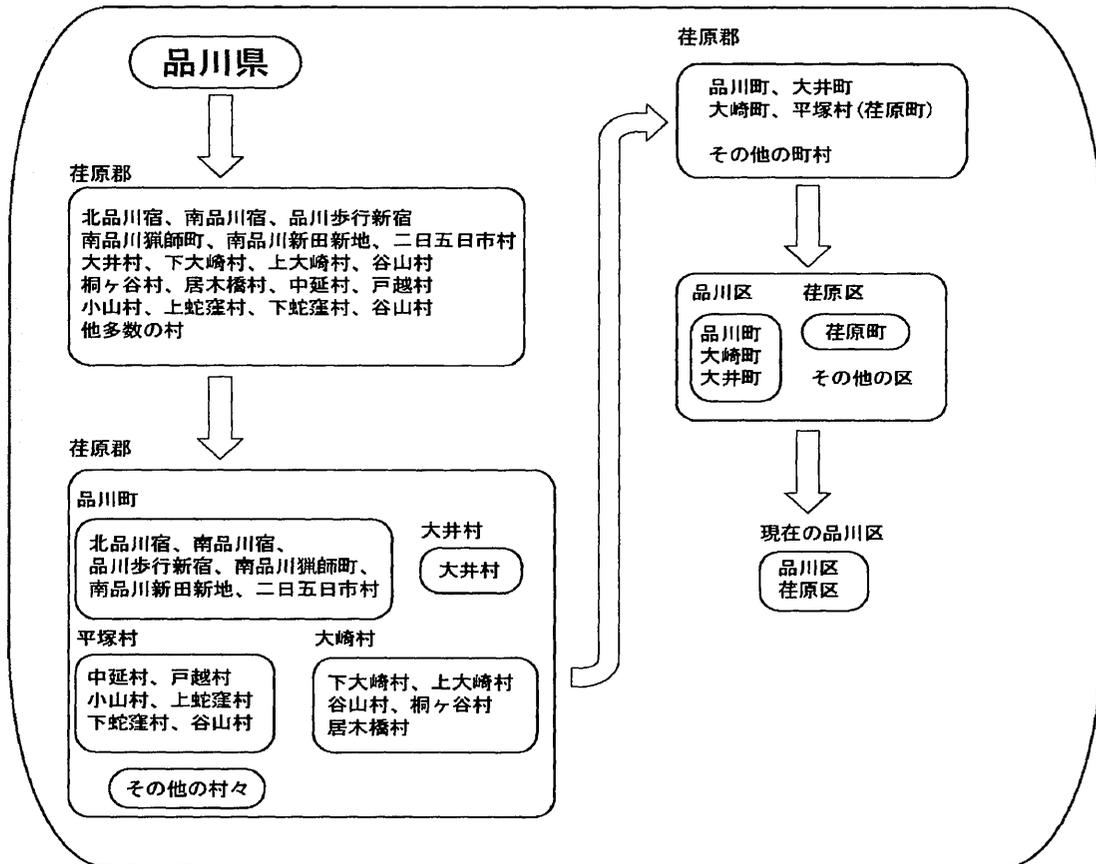
年次	増減(△)	転入	転出
昭和33年	5808	55230	49422
34年	4376	55004	50628
35年	2661	54618	51957
36年	1154	53327	52173
37年	△2545	53264	55809
38年	△4699	51810	56509
39年	△10222	49350	59572

昭和30年代に区人口増加のうち転入者が転出者を上回るのは昭和36年までであり、それ以降は社会減となってしまう。この事実は、高度経済成長によって品川区の人口増加はもたらされたが、昭和37年以降は高度経済成長により、昔の東京市から伴原部への流入があったように、品川区から神奈川県などの外の県に流入、つまりスプロール化が行なわれていることを物語っている。



昭和45年の品川区
「品川区史 地図統計集」より

これまでの政策によって品川区域がどのように変遷してきたかをチャートとして表してみた。
これを見ていただくとより変遷が分かりやすいだろう。



3. 移動範囲の拡大

東京西南部の鉄道の脈動

(1) 東海道線 —日本初の鉄道の誕生—

明治に入り、開港場横浜を中心とする外国商人から交通手段の少なさを指摘され、さらにイギリス公使パークスから中央集権・国内市場の統一を図るために鉄道建設は不可欠であることを勧告され、明治政府は明治2年(1869)に方針を決定した。

明治2年(1869)に東京を起点として京都・大阪を経て神戸に至る鉄道の建設を決定し、翌3年(1870)に東京汐留町(現在の新橋駅)と横浜野毛町(現在の桜木町駅)間の工事を着工した。この間の工事が竣工したのは明治5年(1872)であり、現在の東海道線の前身である。同年5月7日から品川・横浜間の単線鉄道が仮営業を開始した。7月には1週間に15000人の旅客輸送人員に達したといわれていることから当時の盛況ぶりを偲ぶ事が出来るだろう。その後明治11年に品川・大森間の複線化が完成し、明治14年(1881)には新橋・横浜間の複線が完成された。

明治14年(1881)は鉄道にとって大きな出来事があった。それまでは鉄道の運営を借款で賄っていたが、広く華族に呼びかけて全国に鉄道を敷くべく、『日本鉄道会社』を設立したのである。この背景には、華族の所有している金録公債を資金として、鉄道会社を設立すれば華族授産ないし救済の効果があること、また明治に入って生活の変化に対応できなかった失業者や貧民を雇うこともできること、さらに全国に鉄道を敷くなかに関東—青森間の鉄道建設(北門の要衝である北海道との連絡を緊密に出来る)が含まれていることがあった。かくして官有地無償貸与・国税免除・

利子補給などの手厚い国家保護の下で発足されたのである。

このようにして現在の下地が出来上がっていったのである。

(2) 山手線 —最初は環状線ではなかった—

山手線が開通に至ったのは、東京を始めとする大都市への人口の集中が日露戦争(明治37年(1904)後)に著しくなっていくことから東京市内の路面電車以上に大きな輸送単位と高速運転が可能な新しい交通機関を必要としたからである。

その山手線が当初は、環状であったわけではないことをご存知だろうか。品川・赤羽間の工事が明治18年(1885)に完成したときに山手線は最初、品川線と呼ばれていた。当時は、貨物線として、荷物を運ぶ鉄道に過ぎなかった。明治42年(1909)にそれまでの蒸気を動力にしていた鉄道は電化が行なわれ、同年に烏森(現在の新橋)・渋谷・新宿・池袋・田端・上野間(遠回り)に旅客鉄道の運転が開始されたのである。



大正9年の東京周辺の国鉄路線図
「品川区史 通史編 下巻」より

遠回りというのは、品川と上野を結びたかったのだが、その区間には住宅密集地があったため断念した。対応策として東京西部の武蔵野台地は当時まだ発展していなかったため、文字で言うならばCの形で造られ結ばれたということである。

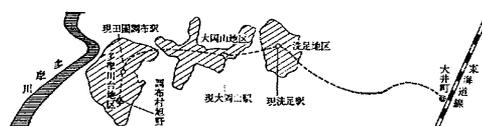
大正8年(1919)には、吉祥寺・新宿・東京・品川・上野間の運転が開始された。これには同年に中野―吉祥寺間が延長、東京―万世橋(現在の秋葉原付近)間が開通されたためである。ここで吉祥寺―新宿―東京間は現在の中央線にあたるため納得ができると思う。また東京―品川―上野間についても現在の山手線であるのだからわかるだろう。このように昔は中央線・山手線が直通運転をしていわゆる「の」の字型の運転系統を確立していたのである。これは鉄道史上面白い点であることは間違いないであろう。その「の」の字型運転も中央線の順次西への延長が行なわれ、他方で神田―上野間が高架化されたことにより住宅密集地を回避したことで大正14年(1925)に廃止になってしまったのである。それ以降は、現在のような環状線になったのである。

(3) 東急目蒲線 ―ディベロッパーの策略―

東急目蒲線(現在は東急目黒線・東急多摩川線に分離)を語る上で重要な会社がある。それは現在の東急の「生みの親」とも言うべき田園都市株式会社である。この会社が設立したのは、大正7年(1918)、まさに第1次世界大戦の終了直前期であった。「田園都市」については、現在においては周知のことであると思うが、簡単に言うならば、「自然を多く取り入れた街」、「農村と都会を程よく折衷した豊かな街」をコンセプトとしている都市のことを指す。E・ハウードの田園都市論における職住一体の理想を実現したものではないことは知っていただきたい。この「田園都市」の実現の背景には、明治末期以降日清・日露戦争、第1次世界大戦による日本資本主義の独占化

の進展によって、人口の増加と集中、そして人口稠密の一途を辿っている東京の郊外において、このままスプロール化する前に、高燥肥沃・風光明媚な場所を選んで近代的な施設を施し、都会のしがらみから都会に住んでいる人を救おうとすることを目的があった。この計画に1番力を入れていた人物は日本財界の巨頭とも言うべき渋沢栄一であった。

会社が設立され、すぐに事業の第1着手として土地買収が始められたが、ちょうどこの時期に買収しようと考えていた洗足(大田区)方面の地価が高騰してきたため、洗足方面には手を出さず、大岡山(目黒区)・田園調布・玉川方面に重点を置いたのである。



田園都市株式会社の土地買収地

「東京急行電鉄 50年史」より

次に着手したことが、交通手段としての目黒蒲田電鉄株式会社を別に設立して、電燈ガスの供給も直営事業としようとしたことである。

こうして大正12年(1923)に目黒―多摩川園前間に目蒲電鉄が開業した。同年に武蔵野電気鉄道から譲り受けた蒲田支線(多摩川園―蒲田間)も開通させて目蒲鉄道目黒―蒲田間全線が開業に至ったのである。武蔵電気鉄道が目黒蒲田電鉄に蒲田支線を譲渡したことは、世界恐慌の反動を受けてしまい苦境に立たされたためと考えられる。

(4) 東急池上線

―自分本位の社長が造った路線―

鉄道が開通に至った年は、大正10年(1921)に蒲田―池上間が最初であった。最終的に五反田まで伸びる路線も最初は蒲田から作られていった。大正12年(1923)に池上・雪ヶ谷、昭和2年(1927)に雪ヶ谷・大崎広小路間が開通し、昭和3年(1928)には大崎広小路・五反田間が完成し全通した。私は目蒲線と池上線

は同じ東急なのだから、目蒲線が開業し目黒―蒲田に至り、そこから戻るように蒲田―五反田へと開通させようとしたと考えていた。しかし事実は違った。

ほかの路線に比べ池上線は、工事が少しずつ行なわれた経緯があるように、背景には色々な歴史が内在していた。

当初、池上線を開通した池上電気鉄道株式会社は田園都市株式会社とは全く関係が無く、発起人は信用力や財力に乏しかった。そこで当時の貴族院の高柳淳之介が資金の繰り出しを引き受け、一般の資産家から資金を集め、資金繰りに行き詰まった企業を支援し再生させる事業（現在のファンド）を行なった。そのため池上電気鉄道株式会社は高柳の傘下に入った。

最初、池上線は大森―目黒間を開通させようとしていたが発起人の財力が乏しく、資金を集めるうちに時間ばかりが過ぎていった。また大森の敷地調達が難航を極めたため、大森ではなく、蒲田―池上間となった。目黒に至らなかった理由は、田園都市株式会社が大正 11 年(1922)に目黒―蒲田間を開通させてしまったことが上げられる。資金繰りに困って工事が難航していたことが原因となってしまうのである。また、高柳が資金を集めていたが、池上電鉄の資材調達を自らの会社を経由して行い、投資家から集めた資金の多くを私物化していたのである。高柳が直談判で調達した廃車寸前の中古電車も新品に近い価格で売却されていた。これでは資金が不足するのは当然のことで、通常であれば都心に近い目黒から建設するのが自然であるが、建設費のかかる目黒側を避けて五反田に建設せざるを得なかったという理由もある。

その後どうにか池上線に利益をもたらそうと考え、東京山の手線内に進出を図ろうとしたが、小川平吉鉄道大臣の鉄道敷設免許のばら撤きにより京浜電鉄との関係が悪化（免許ばら撤きによる京浜電鉄の池上の地盤への進出）し、その対応を行なうために中止を余儀

なくされた。

そしてこの会社は昭和 9 年(1934)に田園都市株式会社に吸収・合併され現在に至っている。吸収される前には、品川区内に五反田・大崎広小路・桐ヶ谷・戸越銀座・旗ヶ岡の 5 駅が設置されていたが、吸収合併により、旗ヶ岡駅は南方の大井町線との交差点まで移動され、大井町線の東洗足駅と合併して旗の台駅になった。また桐ヶ谷駅は昭和 20 年(1945)に戦災を受けて廃止になった。

目蒲と対立した経緯からか、戦後も池上線は東急社内でも冷遇されたような傾向があった。乗客数もさほど伸びなかったことから、冷房車や新車の投入などの近代化投資には消極的だったといつてよい。都心近くを走りながら、今日に至ってもどこかローカル線のようなんびりとした雰囲気を保っているのも、これが一因といえよう。

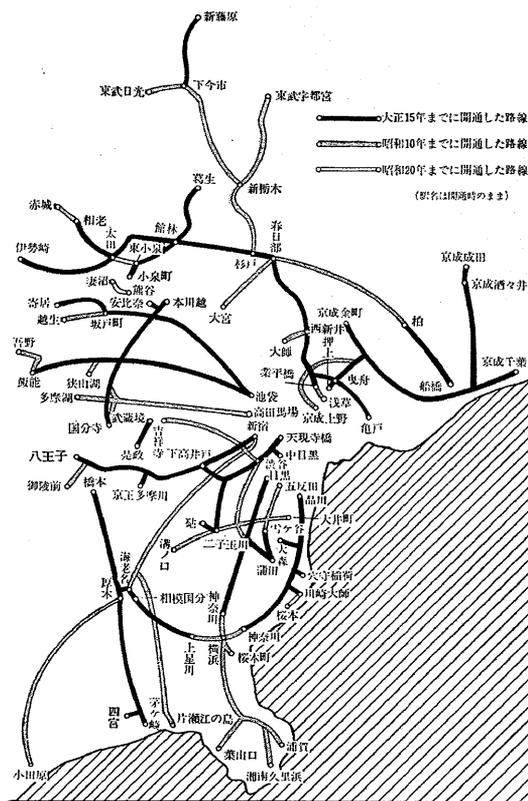
余談ではあるが東急の社史にまで、池上電気鉄道時代は沿線の宅地開発事業を行わず、事業といえば洗足池にボートを浮かべる程度であった、という趣旨のことを書かれているありさまである。この記述については、高柳淳之助による池上の私物化に対する批判と、都市開発で成功した東急の矜持を見て取ることもできよう。

(5) 東急大井町線

―田園都市株式会社の一段落―

目蒲線の開業に続き、大正 9 年(1920)に当時の荏原郡大井町から調布村に到る地方鉄道敷設を出願し免許を用いて、大井町線の開設を計画し昭和 2 年(1927)に大井町―大岡山間をめたく開通させたのである。また大正 13 年(1924)に敷設を出願した大岡山―二子玉川間については、昭和 2 年に免許を得た。この免許は素直に受けたものではなく、明治 40 年(1907)から渋谷―玉川間を開業した玉川電気鉄道(前・玉川砂利電気鉄道、多摩川の砂利を都心へ運ぶことを主としていた)がこの区

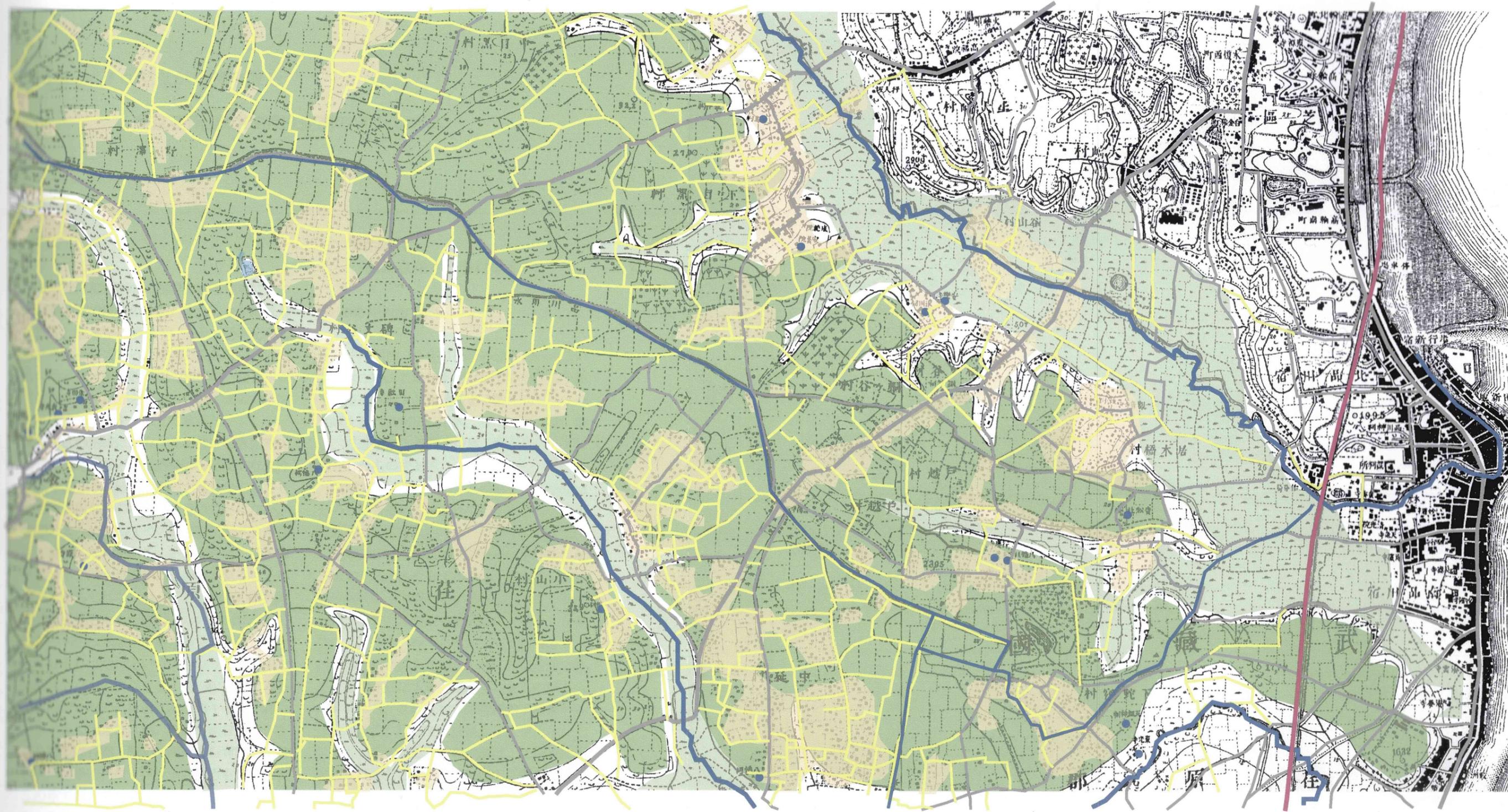
間の事業中止をしたことに対するの断行であったのである。そのような背景の中で、昭和4年(1929)に大岡山—二子玉川間を開通させて現在の大井町線全線がこの年開通した。大井町線は戦後今の田園都市線(昔の玉川線)の二子玉川—溝の口間を路線として吸収・延長して、そこからさらに長津田・すずかけ台・つくし野方面へ延長して昭和38年(1963)にその名を田園都市線に改称している。ここで1度大井町線という名は消えるのである。大井町線の名が戻るのは16年ぶりの昭和54年(1979)のことであった。



東京周辺の私鉄開業変遷図

「品川区史 通史編 下巻」より

明治16年(1883)地形図



水田地帯



武蔵野台地の台地部分



集落分布



寺院分布



品川の古道(品川区史 地図統計集より)



1883年明治16年の道

第3章 マクロ視点から読み取る

東京西南部の市街地変遷のメカニズム

はじめに

第1章では都市形成の根幹にある地形について、第2章ではその地形の上で人々が形成した歴史、日本を統治していく上で効率化を図るために必要であった政策による町村編成方法の時系列、東京西南部の発展の一役を担っている鉄道の起源と発展について知識をインプットすることを主にして述べた。

人々がこの地域に住み、生き続けてきた歴史の集積は地形などの自然条件と歴史的な条件が入り混じった結果であり、理由なくしてその場所に何らかのものができることはない。数学のように1つ1つの場所に「公式」が存在し論理的なのである。その論理は、第1章や第2章では文章の中に一部垣間見ることが出来たかもしれないが、それは知識の羅列の中から発見したものに過ぎない。有名なもの、周知のものは知識の中から発見できるだろう。しかしそれは時代という大きなうねりの中では断片的なものに過ぎず、「地域」として見ることはできない。身近にある道1つ、それらが集まって出来た区画、そして街自体が存在する論理は自然・歴史の両面から考察して総合した結果にアウトプットされるものである。この章では、前章の知識をベースにして本論文の研究対象地域である東京西南部・品川地域においてどのように都市が形成されたのかを自分の中で「公式」化して論理的に解明していきたいと考えている。「地域」全体を捉えるために、この章では明治16年(1883)から昭和30年(1955)までの計8枚の地形図を照らし合わせながら読み進めていきたい。

1. 明治時代

—縁に点在する農村集落—

(1)1883年明治16年

まずは明治16年(1883)の地形図を見ていただきたい。この地形図は研究対象地域である東京西南部・品川地域を下絵として、この地域を流れる河川、用水、水田、道(古道、里道、村道など)、寺院の位置、集落分布をプロットしたものである。

前章で述べたように、この地域の地形は3つの台地とそれに挟まれている2つの河川から形成されている。

地形図上で北東にあり等高線の幅が狭くなっており急斜面を有する台地が高輪台である。この場所に下大崎村と上大崎村があり、集落が線上もしくは整形に配置されていることが分かるだろう。線上に配置されているところは台地の尾根にあたる所と縁にあたる所である。また尾根に大きな屋敷らしきものがあるのが分かる。これは仙台伊達藩の下屋敷の島津邸であり、現在では清泉女子大学になっているところである。この地域は、江戸時代だと郊外にあたるため台地には下屋敷が多く見られる。島津邸もその1つであろう。知っている方もいると思われるが、江戸は起伏に富んだ地形を持っていたが、重要な社寺、あるいは大名屋敷が主として見晴らしの良い台地に敷地を与えられたのに対して、山の手の町人町、あるいは下層武士の住居の多くは谷間に形成されていたのである。家に対する価値観が都市の用途地域にそのまま繁栄されてい

ることがよく分かる。その影響が下大崎村の島津邸にも見ることが出来る。郊外においても台地にある程度位の高い人が住むのであろうか。

高輪台の下に東の海から北西に延びる河川、これが目黒川である。明治16年(1883)の当時では河川周辺が水田地帯になっていることが分かるであろう。なかには谷山村のように水田地帯の真ん中に集落を構えている村(谷山村)もある。また当時はまだ河川工事の技術も発達していないので、自然の形のまま蛇行している姿が地形図上から見て取ることが出来る。今後は目黒川の形にも注目して地形図を見ていきたいところである。

2つの河川に挟まれている地形図の中心にある台地、目黒台を見ていく事にしよう。

ここでオレンジ色の集落分布に注目していただきたい。集落分布を見ると一見無差別に分布されているように見えるだろう。しかし台地と谷地の境を明確にしたこちらの図を見てもらうとあることに気づくのではないだろうか。



集落分布と地形

「明治16年地形図」より

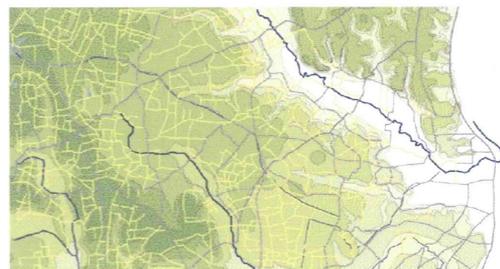
集落は決して無差別に配されているのではなく、台地の縁に近い場所に形成されていることがわかる。これは明治時代初期、まだ生活用水が上水道として完備されていなかったために生きていくうえで必要な水の確保が重要であることに関係していたと考えられる。では水がある場所とは何処であろうか。1つはもちろん河川であろう。もう1つは湧き水である。前章で上げたことであるが、湧き水や井戸水は、武蔵野台地の層の1つである武蔵

野砂礫層の中の難透水性の地層の上部の関東ローム層にたまったものである。台地の尾根部から約数m地下に位置し、たまった雨水が水脈になり崖線、地形の縁に湧き出てくるのである。

縁に位置する集落分布に外れている集落もある。昔からある古道に沿ってできた集落である。品川区域を通る主な古道は、東海道、現在の五反田駅前を横切る中原街道と目黒駅前を横切る二子道(現在の目黒通り)である。中原街道は地形図の真ん中を北東から南西方向に延びており、目黒川沿岸から台地の中心に連なっている品川用水までの間を集落が細長く分布している。東海道の宿駅だった品川宿のような機能を有していたのかもしれない。

立会川と川より西側にある荏原台はどうであろうか。東京に近い集落に比べて、1つ1つの集落の大きさが小さくなっていることに気づく。この頃の農村は、一部の農作物を東京(江戸)に運び売り捌き、生計を立てていたとされている。この頃の移動手段はもちろん歩きが主体である。移動距離が短いほうが農民にとっても良かったに違いないだろう。また目黒川流域に比べて、立会川は全長が短く、川によってつくられる谷地の水田地帯が小さいため農民の絶対数が少なからざるを得なかったのかもしれない。

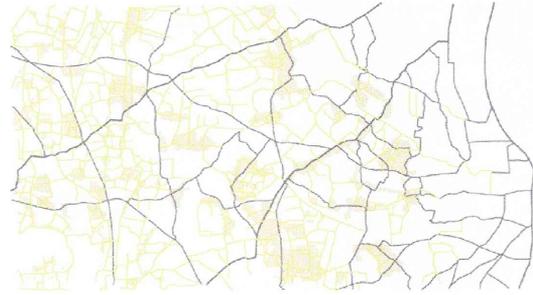
次に地形図全体の道を見ていこう。灰色に塗られたもの(太いものが主要な街道)が品川の古道をトレースしたものであり、黄色は明治16年(1883)に既に存在している道をトレースしたものである。



道と地形の関係

「明治16年地形図」より

道と地形を重ね合わせた図を見ていただきたい。道はよく尾根道・谷道と分けられて用いられるが、品川区域の古道のほとんどが尾根道になっていることに気づく。これは、人が今よりも少なく集落を形成していた時は、谷地全般は湿地帯であり、人があまり寄り付かない場所であったのだろう。そのため江戸のように谷地には町人地が形成され、通る谷道がつくられることがなかったのだろう。明治16年(1883)までに形成された道は、集落が拡大し集落内に区画を網目状につくるためであったり、集落から古道に出る距離を短くしたりするためにつくられたと考えることが出来る。

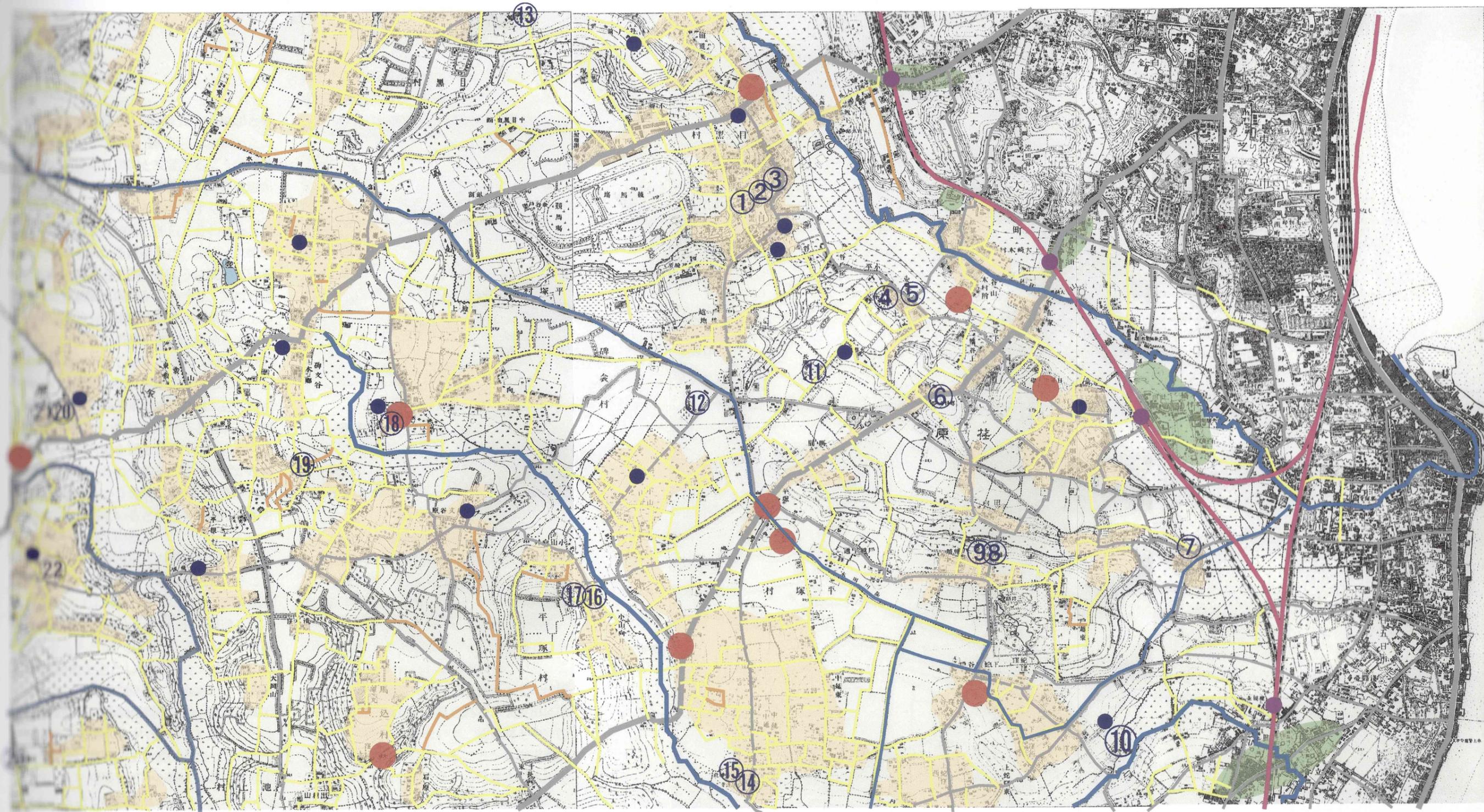


集落分布と道の関係

「明治16年地形図」より

集落分布と道を同時に見ると面白い発見がある。おおよそであるが、1つの集落がどのように広がったか考察することが可能である。集落内に古道が横切っているところから集落が構成されていたと考えることが出来る。道の近くに住居を構えるのが人間の常であるからである。碑文谷村周辺の集落には古道が横切っていないものがあるが、比較的新しい集落なのかもしれない。

明治42年(1909)地形図



- 明治16年からの変化
- 集落分布
- 学校分布
- ① 寺院分布
- 品川の古道(品川区史 地図統計集より)
- 1883年明治16年の道
- 1909年明治42年の道

- ①不動堂(目黒不動) 大同3年(808)
- ②羅漢寺 明治41年(1908)
- ③海福寺 明治43年(1910?)
- ④氷川神社 元禄年間(1688-1704)
- ⑤安楽寺 弘治2年(1556)
- ⑥専修寺

- ⑦妙光寺 明治28年(1895)
- ⑧戸越八幡神社 文禄元年(1592)
- ⑨行慶寺
- ⑩東光寺 天文13年(1544)
- ⑪長應寺
- ⑫朗愷(ろうせい)寺 文禄2年(1593)

- ⑬祐天寺 享保3年(1718)
- ⑭法蓮寺 文永年間(1260年代)
- ⑮旗岡八幡神社 長元3年(1030)
- ⑯摩耶(まや)寺 寛文年間(1661-1673)
- ⑰小山八幡神社 長元3年(1030)
- ⑱円融寺 仁寿3年(853年)

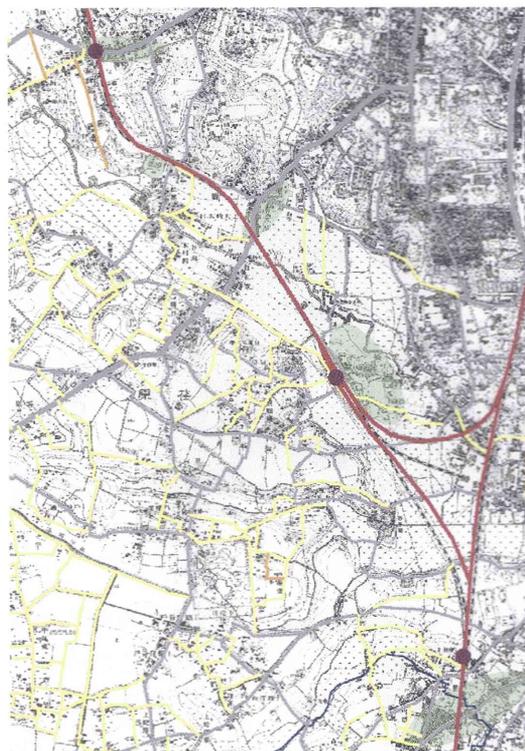
- ⑲碑文谷八幡神社
- ⑳常圓寺 天正18年(1590)
- ㉑東光寺 貞治4年(1365)
- ㉒立源寺 寛永元年(1624)
- ㉓八幡神社(現・奥沢神社)

(2)1909年明治42年

この地形図を見ると、明治16年(1883)との大きな違いとして明治16年にはなかった山手線の鉄道線が目黒川と交差するように低地を走っていることが分かる。低地を走る理由は、敷設工事費をできる限りやすく押さえたかったのだろう。地形と照らし合わせると現在の山手線にあたる鉄道線は、品川—大崎駅間にかけて高輪台を避けるように続いている。大崎—目黒駅間も同様かという、実は目黒駅手前で高輪台の比較的緩やかな斜面を上っているのである。当然工事費は低地を走らせるより高くついてしまう。これには訳がある。当初は目黒川沿いに目黒駅を設置しようとしたのだが、蒸気機関車の煙や振動が近くの水田、農作物に悪い影響を与えると近隣農民が心配し、反対行動を起こしたことにより今の位置に落ち着いたのである。このわずかな移動は、目黒駅という名前に係わらず現在は、品川区に所属しているという不可解な現象を起こしてしまっている。

明治16年(1883)からの鉄道の延長により周辺にいくつか発展している地区を見ることが出来る。これは明治42年(1909)に国鉄山手線(短距離移動を主とした鉄道)が開通したということもあるが、山手線開通以前に旅客線(長距離移動を主とした鉄道)として明治18年(1885)に目黒駅の開業、貨物線として明治35年(1902)に大崎駅の開業、明治34年(1901)に国鉄東海道線の大井連絡所(大井町駅の前身)の開業が、発展の主な要因となっているのだろう。また発展している地区、駅の設置場所は主に古道との結節点ということがわかる。このことにより目黒駅・大崎駅・大井町駅は古道が通っている、つまり人通りの多い場所にこの時期の鉄道駅は設置されたことを意味する。この時期は山手線開通間もないので、貨物線の駅であった大崎駅の周辺は、工場が建っていることが分かる。目黒駅は、旅客線の駅として明治18年(1885)から開業してい

たことと二子道が通っていたこともあり、工場が駅近辺に建っている印は地形図上にない。



道と鉄道の結節点

「明治42年地形図」より

大井連絡所については、古道と鉄道の結節点に、今後発展の兆しを目論んだ後藤惣作が明治25年(1892)に駒込から大井町に移転した『後藤毛織』が引き金になったようである。移転の時期と大井連絡所ができた時期では移転のほうが早かったことが物語っている。このように周辺建物と駅が相互関係しその性質によって周辺の変化が見られる。五反田にはまだ駅が開業していないが、鉄道線と中原街道が交差している点であることから街道沿いに明治16年(1883)になかった建物が水田を埋め立てて建ち並んでいることが分かる。

目黒村に明治16年(1883)になかった目黒競馬場ができた。恐らく庶民の娯楽の場として東京市内には土地がなかったことから、郊外のこの場所を選定し設置したのであろう。創設は明治40年(1907)であるため、明治18年(1885)の品川線(現在の山手線)の旅客線からの客を二子道に沿って上手く取り込んでい

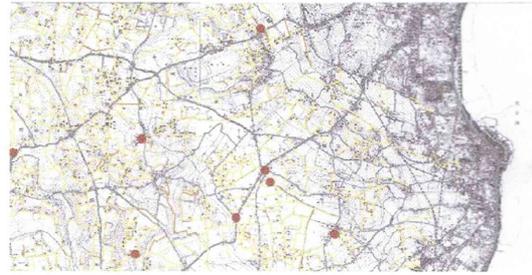
ったのであろう。地形との関係としては水田がある低地から 20~30mの高台の上の平坦な地形に位置している。

目黒競馬場の南に林業試験場と書かれた施設があることに気づくだろうか。これは明治 33 年(1900)に山林局(後の農林水産省)が設けた施設である。林業試験場の始まりは、明治 11 年(1878)、東京府北豊島郡滝野川村西ヶ原におかれた樹木試験所である。4 万 5000 坪余りの土地に、研究施設が建てられ、西ヶ原で育てられていた樹木が移植された。移植の時には、地元目黒の火消しの組頭たちもひと肌脱いだという。その後、明治 38 年(1905)に山林局林業試験所、同 43 年(1910)に山林局林業試験場と改められ、昭和 53 年の移転までの 78 年間目黒の地にあった。明治から大正にかけて、目黒には多くの研究所が設立された。畑や野原が大部分を占めていた目黒は、土地を求めやすく、さらに東京の市街地から近からず遠からず、というのが研究所の立地条件にかなっていたのであろう。また目黒競馬場同様に鉄道の駅が近かったことも条件の 1 つになっていたのだろう。

鉄道の影響はそれだけではない。この時期になると東京市内にあった私立学校の校地が手狭になった内部的要因、品川・大崎・大井への工場進出による人口増加が著しくなり、就学児童の数も明治 33 年(1900)の『小学校令』の義務教育制度の整備確立が相まって急増するようになる外部的要因により市内からの交通が比較的便利で、広い土地を安く購入できる品川地域へ転入してくるようになったのである。その先駆けとしての存在として明治 37 年(1904)に大崎谷山ヶ丘に設立した立正大学の前身である、日蓮宗大学林だった。何故この場所を選んだかというと当時の谷山ヶ丘は北に目黒川の向こうに山の手の台地(高輪台)をのぞみ、東には品川の沖合に東京湾を一望できる絶好の土地であり、そのような場で勉学を励む事は教学の府としてふさわしい環境であると言われている。後に大正 13 年

(1924)に『大学令』により大学になり、名称も現在の立正大学と変わっていくのである。

明治 16 年(1883)の地形図で集落と見分けがつかなく、見つけることが難しかった学校について、明治 42 年(1909)の地形図からは見つけ出すことが出来る。赤の円でプロットしたものがそれである。

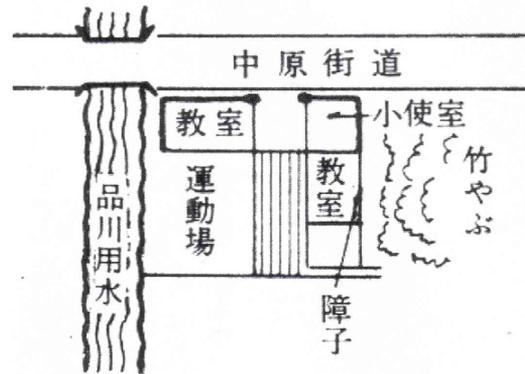


学校分布

「明治 42 年地形図」より

それぞれの学校の場所性を考察していこう。ちなみにこの頃の郊外にある学校のほとんどが小学校(尋常小学校と呼ばれ修学期間は 6 年(明治 41 年~)、尋常高等小学校は修学期間 2 年)であった。東京市内における大学の場所性は、台地に位置することが多い。これは大名屋敷跡をそのまま受け継いで大学にすることが多いことが起因している。郊外、また小学校にもそれは当てはまるのだろうか。普通に考えるとそれはないであろう。決定的に違う点は郊外には受け継ぐべき下地が用意されていない。ではどのように小学校の場所は決められたのだろうか。地形図を見ると水田と同じ低地、台地の尾根部、谷地、台地の縁にあるなど場所に一貫性が感じられない。ではどのようにその場所に決めていったのであろうか。鉄道が走り始め近代化の傾向が少しずつ見え始めたといっても郊外の農村部の人口が増えるのはこれからであるため、1 つの村に 1 つの学校を置くわけではない。2, 3 村が相談し、その有志によって公立学校設立が企てられるのが専らである。例を挙げるならば、中原街道と品川用水が交差する場所に下大崎・桐ヶ谷・居木橋・戸越村が連合して桐溪学校を設けている。このように連合して

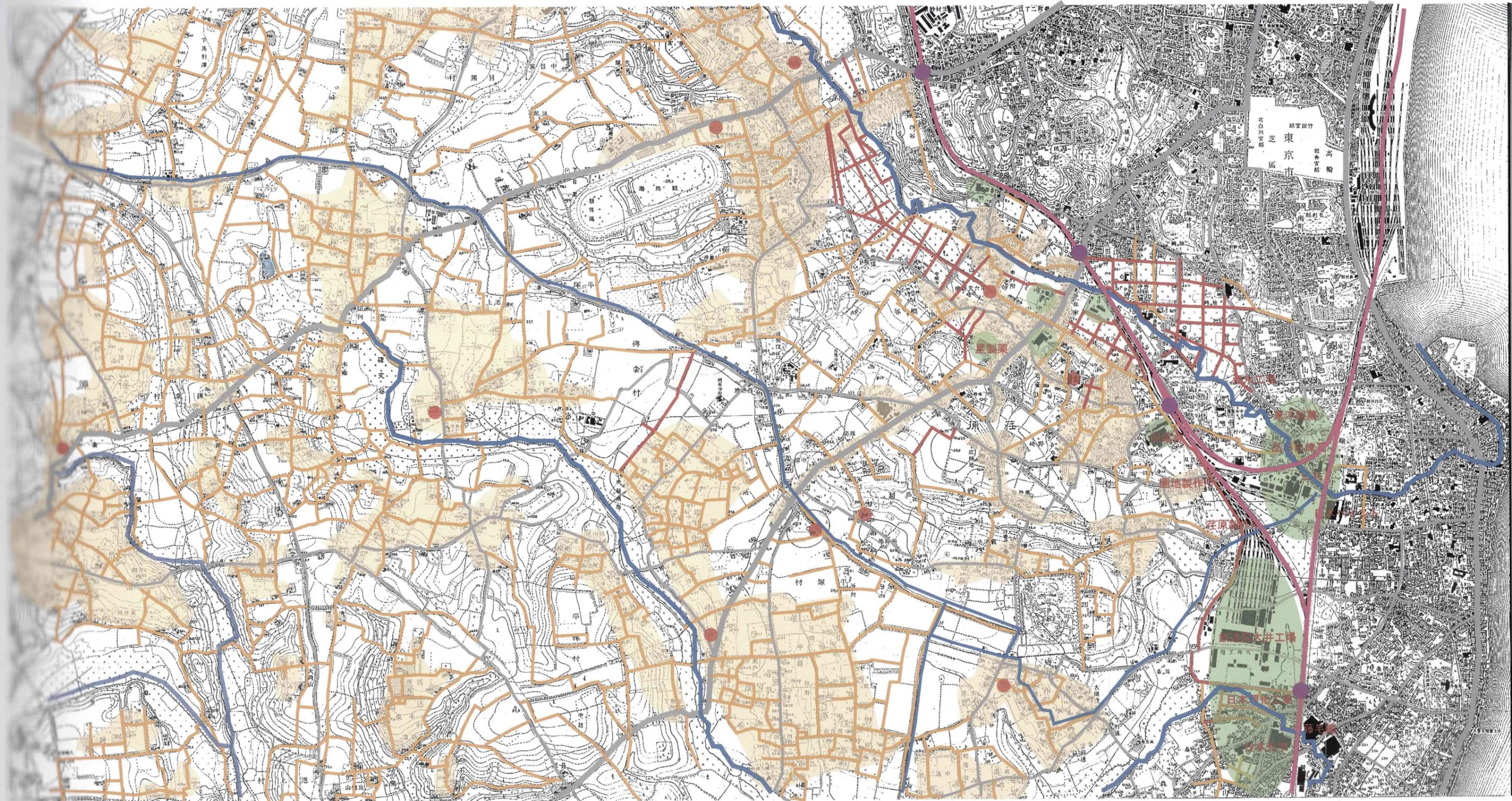
学校を設けるとなるとそれぞれの村からの距離が重要になってくるのではないだろうか。地形図の赤の円を見ていただくと学校の間隔がある程度一定になっていることに気づく。おそらく郊外の学校においての場所は、連合した村との距離・間隔で決めていったのであろう。



桐溪学校の場所

「品川区史 通史編 下巻」より

大正5年(1916)地形図



工場の発展



集落分布



学校分布



品川の古道(品川区史 地図統計集より)



1909年明治42年までに造られた道



1916年大正5年の道

2. 大正時代

—近代化の波、工場・私鉄の出現—

(1)1916年大正5年

大正5年(1916)になると集落が徐々に拡大してきていることが集落分布(オレンジ)でわかるだろう。



集落分布の拡大

「大正5年地形図」より

特に東京に近い集落、目黒村・居木橋村・桐ヶ谷村が拡大・村と村の隙間がなくなっていることに気づくだろう。これは、鉄道と目黒競馬場・試験場などの施設の影響であると考えられる。鉄道において、前の地形図にはなかった五反田駅が中原街道と鉄道線の交差点に開業されていることに気づく。開業年は明治44年(1911)であり当初から旅客駅として開放されている。五反田駅も古道と鉄道の交差点にあり、人口が増加したことで開業に至ったと考えられる。



五反田駅周辺

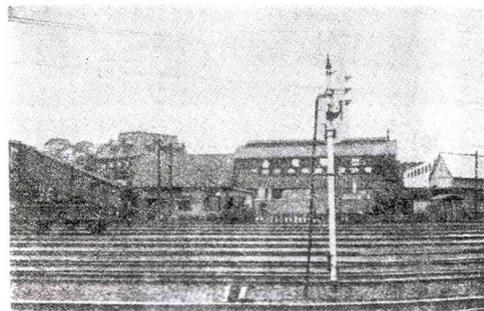
「大正5年地形図」より

居木橋村・桐ヶ谷村において、明治42年(1909)には水田の中の集落であったのに水田地帯を侵食し集落と集落が繋がっている。こ

れは閉じた社会、自己完結していた「集落」が、互いに関係しあい「村」として変化し始めている。そして残っている隙間部分に工場がいくつかできている。地形と照らし合わせてみると、元々水田地帯だったので低地に大規模な建築を建てることができ、近くに目黒川が流れており工場用水として活用できる点良かったのかもしれない。また村周辺の道についても大きな変化を見ることが出来る。目黒川流域の水田に規則正しい道が並んでいることに気づくだろう。まるで区画整理が行なわれているようである。この後この場所がどうなったかは次の大正10年(1921)で考察していこう。

ではなぜ工場が多くなってきたのであろうか。大きな理由として日清・日露戦争、第1次世界大戦だろう。戦争に関係ある産業(造船業・窯業・機械業・光学工業など)の需要が上がり、元々東京市内にあった工場では手狭・拡大のため、東京近郊で大規模の土地がある目黒川流域に移転してきたと考えられる。それを裏付ける例を紹介するとしよう。

このころ設立された中で大崎町にある有名な工場は、明電舎・園池製作所などである。



明電舎

「品川区史 通史編 下巻」より

明電舎は電気産業を担っていたが創業当初(明治30年代)の日本にとって電気の展開が十分ではなかったので経営は苦しい状況にあった。しかし明治39年(1906)に東京電燈株式会社が東京市内に交流昼間電力を一般人に送電すること、明治37年(1904)の日露戦争による軍需生産より得た利益によって工場拡大に

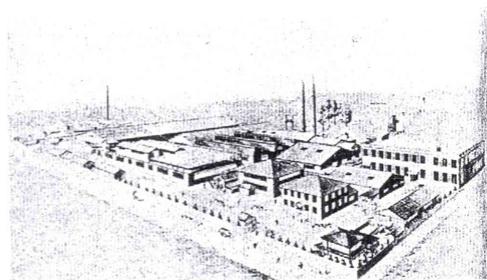
乗り出していくことになる。ここで目をつけたのが国鉄の大崎駅に近い 6000 坪の土地であった。この場所が選ばれたのは、明治 45 年(1910)の大崎駅付近は人煙稀な郊外の水田の続く風景であったが、目黒川との船運の便が良かったため、桐ヶ谷村から土砂を運んで地を均し 2000 坪を越す工場建設に着手していくことになるのである。明治 45 年/大正元年に工場建設が始まり翌年大正 2 年(1911)完成し、現在の明電舎本社の土台となるのである。

工具・工作機械メーカーである園池製作所は、元々東京本郷千駄木町に明治 45 年/大正元年(1912)設立した。設立したといっても製作所(この時点では池田工具製作所)は牛小屋を改造した約 20 坪ほどの粗末な建物だった。当時の日本における機械工業は、富国強兵策のための軍事的な造船・車両の製造に重点を置いていたが、ともに先進国からの輸入に大きく依存していたので、基礎的な工作機械部門はまだ十分な発展をしていなかったのである。池田工具製作所はそのような状態を打破しようと創設されたのである。しかし池田工具製作所の経営は安定しなかった。ところが幸運にも機械工学を学び航空機製造の夢を捨て切れなかった園田武彦を紹介され、共同経営にして両人の頭文字を合わせ園池製作所としたのである。当時園田・池田は多種多様の工具を陸海軍の工場に売り込んだ。第 1 次世界大戦直前だったため、呉海軍工場や大阪砲兵工場などから順次注文が来るようになったのである。このように園池製作所は経営が軌道にのり、設備が充実してゆくに従い、騒音や悪臭のため工場周辺の住民から苦情が持ち込まれた。元々本郷千駄木町周辺はかつての道灌池の埋立地であり、地盤軟弱で振動にも悩まされていたのである。そこで工場移転拡張が計画され、東京府の城南地区か京浜地方の候補地を検討した結果、電力事情に恵まれていた明電舎の南接地、大崎町居木橋に約 3000 坪の土地を買収したのである。第 1

次世界大戦後の大正 4 年(1915)のことであったが付近は水田や雑木林であった。大崎への移転を契機に工具メーカーから工作機械メーカーへの脱皮と軍工場との関連性の持つ意味に注目したい。大正 7 年末(1918)から日本資本主義全体に戦争終了の不況が襲来する。園池製作所も不況のあおりを受け、川崎造船所と十五銀行(のち三井銀行に合併)が経営に参加していくこととなる。

次に戦争需要によらない工場もあったことを紹介しよう。

星製薬所はアメリカ留学をして統計学を学んだ星一が、明治 39 年(1906)に小資本でかつ資金の回転の速い製菓業に着手することから創立された。最初は芝山内、次に三田小山町に移ったが、湿布薬「イヒチオール」を製造する過程にアンモニアを使用するために臭気が立ち込め、近所からの追い出しを喰う羽目になるのである。この頃故郷の福島の人々から代議士になることを要請され、当選に至る。代議士時代に知り合った人々が、星の製菓事業の展開上において有力な支援者となったため、明治 44 年(1911)に郊外の大崎に星製薬株式会社を設立することになるのである。薬を作るうえで周辺環境がある程度きれいでないで支障をきたすので大崎・五反田駅周辺ではなく少し離れた場所に工場を建てたのではないであろうか。大崎工場では製菓業の際に出る匂いなどを防ぐために、大正 8 年(1919)ころから現在のエア・コンディションにあたる工場内の「空気洗浄」を実施し、診療所や保育園も設置したのである。

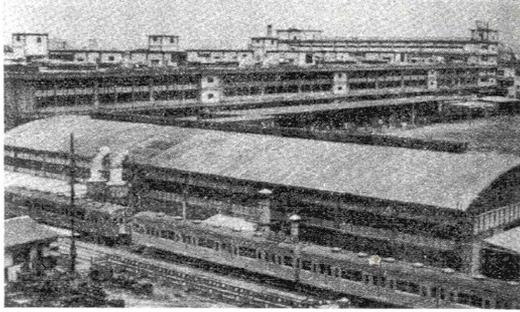


大正 8 年星製薬株式会社全体図

「星製薬株式会社創立三十周年記念写真帖」より

場所を変えて、大井町周辺を見てみよう。

一目で分かるほどの大きさの大井工場が設けられている。これだけ大きいので元々あった古道が2本ほど遮られてなくなってしまっている。代わりに鉄道と大井工場に沿うような迂回の道が新たにつくられていることがわかる。



国鉄大井工場

「品川区史 通史編 下巻」より

この大井工場は地形図上からも分かるが、鉄道が工場敷地内に延びていることから国鉄の車両工場であることが分かる。この場所に車両工場ができたのは、大正3年(1914)に東京駅開業により烏森駅を新橋駅に、元々新橋駅だったもの汐留駅に変更し、汐留駅を貨物列車・荷物列車専用の駅としたことにより汐留駅における貨物取扱量の増加に伴って「新橋工場」の増築が不可能になったために大井工

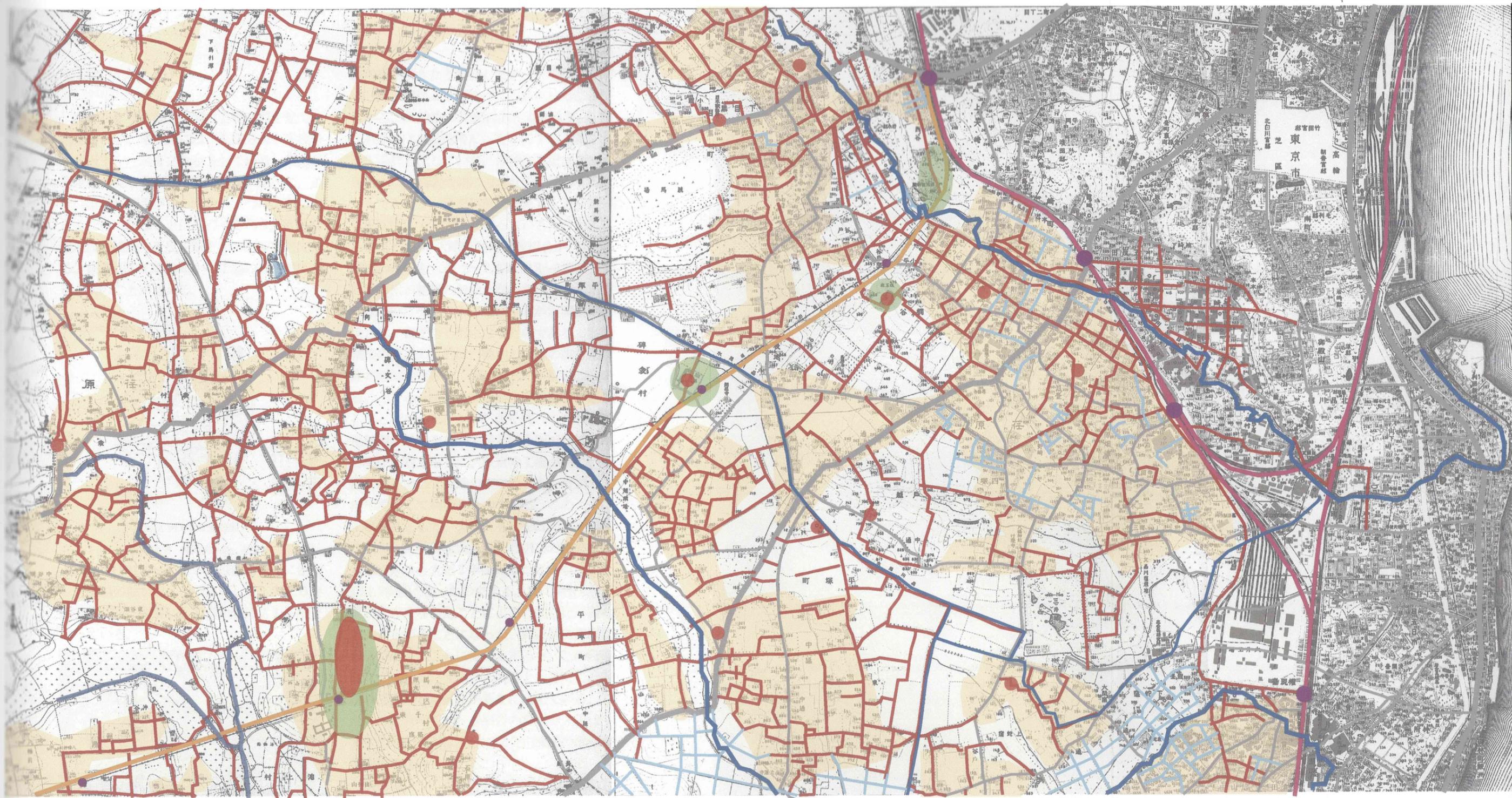
場に移ってきた。移ってきた同年に大井連絡所は大井町駅として旅客駅として開業されたのである。明治34年(1901)に国鉄東海道線の大井連絡所(大井町駅の前身)の開業、『後藤毛織』を初めとする工場地帯化が大井町を工場的場所性へと変えて大井工場をこの場所に移転させたのかもしれない。

品川地域でも目黒台・荏原台に大きな変化は見られるだろうか。

目黒川流域や山手線沿いに比べて大きな変化は見る事ができない。道においても新しい道ができている形跡はなく、農村部では文明開化の波はそれほど浸透していない。ただ明治後期から大正前期にかけて一部農村では電気が引かれ電燈が使えるようになった。桐ヶ谷村では明治21年(1888)ころに電気を引こうという話が住民の間で持ち上がったが、架設費が高額の為に取りやめになり結局電燈が使われるようになったのは昭和の初めだという。

このようにこの時期は農村部と目黒川流域では明確な違いが生まれているのである。元を糾せば地形が影響しているのかもしれない。

大正10年(1921)地形図



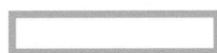
鉄道による発展



集落分布



学校分布



品川の古道(品川区史 地図統計集より)



1916年大正5年までに造られた道



1921年大正10年の道

(2)1921 年大正 10 年

大正 10 年(1921)における地形図を見ていただきたい。地形図には、集落分布・学校分布・道トレースをプロットしている。集落分布全体を見ると大正 5 年(1916)に比べて、より「集落」同士がくっつき、1つの分布が大きくなっていることに気づくだろう。顕著な地域は大崎駅・五反田駅と大井町駅周辺である。創業別の工場分布から工場の数を見てみると次のことが言える。

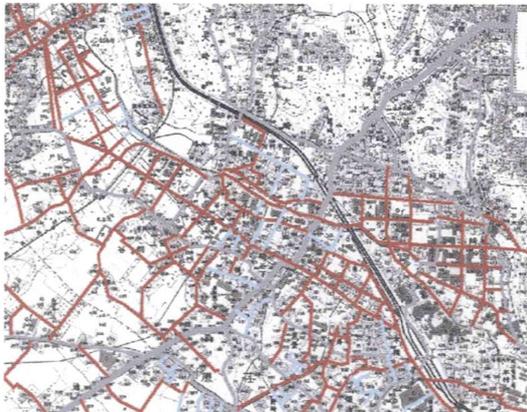
品川区の工業
大正10年の工場分布



大正 10 年の工場分布

「品川区史 地図統計集」より

大正元年(1912)～大正 5 年(1916)までに創業した工場の数が 5 7 ヶ所に対して、大正 6 年(1917)以降に創業した工場の数は 7 1 ヶ所となっている。



水田地帯の耕地整理後

「大正 10 年地形図」より

大正 5 年(1916)の地形図で新たに敷かれた道として、水田地帯に区画割がされたような直

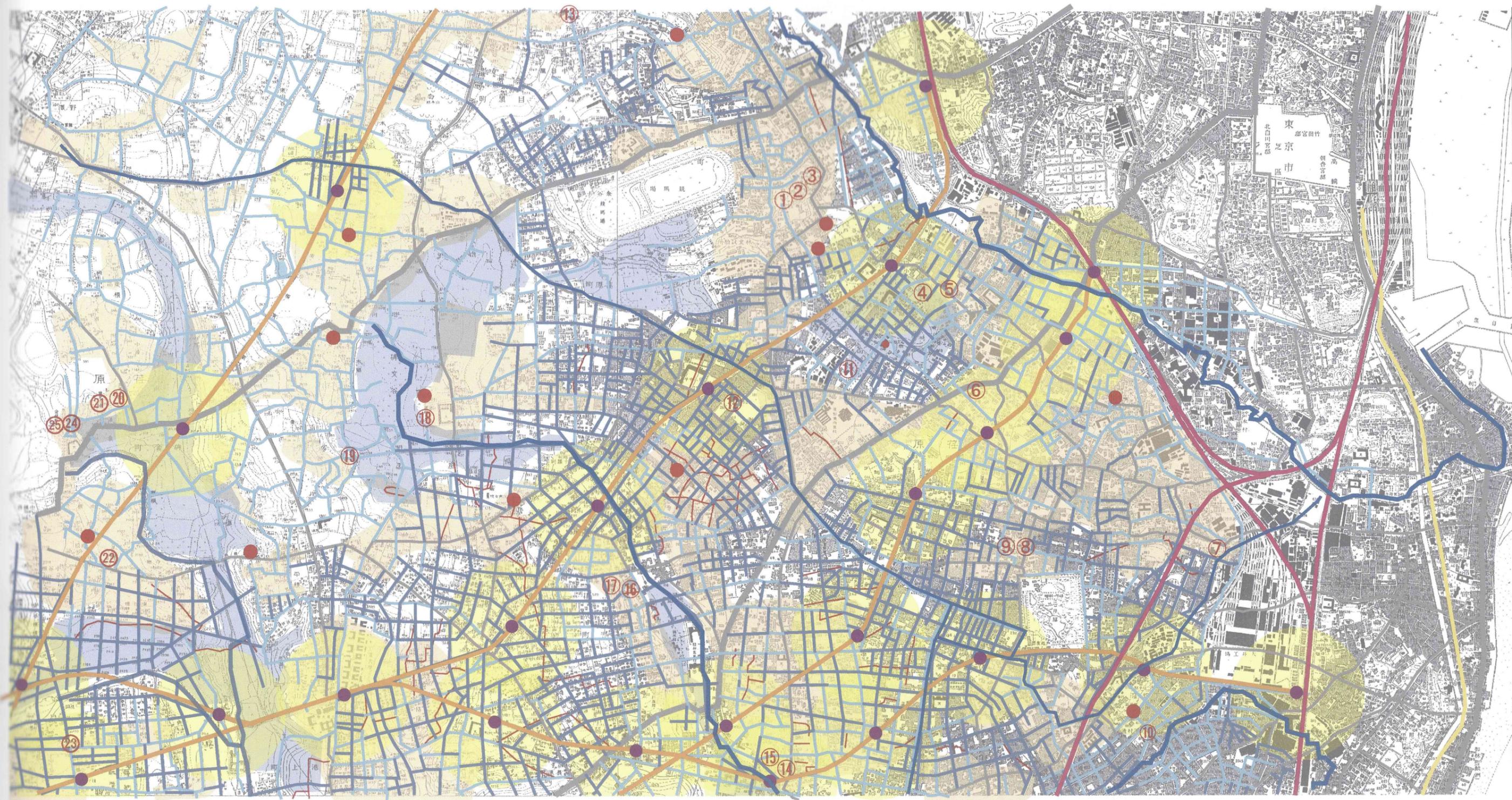
線の道ができたと紹介したが、その場所が激増した工場により埋め尽くされていることが分かる。大崎駅の東側にあたるが大正 5 年(1916)には水田地帯だったのにすべて無くなり工場群と化している。東側に工場地帯ができたのは大崎駅西側に大きな土地がもう無いためからであろう。目黒川流域を見ても五反田一目黒駅間に少し水田が残っているだけである。ちょうど品川・大崎町耕地整理組合が、目黒川流域の水田を大正 2～7 年(1913～18)に工事して水田が整理の対象となったため、大正 7 年(1918)ころには水田地域全域が短冊型に整地され、秩序ある形になったのである。耕地整理の本来の目的は、整地し田畑の細分化、経営耕地の分散化、灌漑用水の不備を改良することであり結果、農業の生産力を上昇させることであった。しかし蓋を開けてみれば耕地整理の効果を米の生産という面ではほとんど挙げる暇もなしに、東京の工場が新しい工場用地を求めて低地の水田地帯を、最適の工場用地として利用したのである。このように工場地帯として、大崎・五反田は発展を遂げた結果、大崎町は大正 2 年(1913)の時の人口 14626 人から大正 7 年(1918)には 25599 人と約 1.75 倍になったのである。人口が増え、集落が大きくなったことにより以前に比べ道の密度が上がることになった。周辺部に直線状の道が増えたことに気づくだろう。この時期は発展の傾向が著しい大崎町と大井町に直線状の道でできた区画が新たに増えている。ちなみに大井町も鈴ヶ森組合の設立で大正 2～4 年(1913～15)にかけて立会川流域の水田地帯を耕地整理している。

次に着目する点は、大正 12 年(1923)開業した東急目蒲線である。地形図が大正 10 年(1921)のものに対して、東急目蒲線の線路が敷かれている点は少々おかしな点ではあるが、恐らく開業前の敷設が決まった時点で地形図には記入してしまったのだろうと考えれば納得がいくだろう。同様に敷かれたばかりの鉄道の周辺に建物が全く建っていないのも理解

できる。しかし1つの駅の周りは前の大正5年(1916)の地形図に比べて集落分布が拡大していることがわかる。現在の大岡山の駅である。地形図を見ると東京高等工業学校(現在の東京工業大学)が建っており、そのせいか集落が以前に比べ大きくなっているのである。確かに大学が誘致されれば村は大きくなるだろ

う。しかし東京高等工業学校がこの場所に来るのは大正13年(1924)のことである。これも鉄道の線路同様不可解な点である。よってこの年の地形図で目蒲線沿線の発展について述べていくのは得策ではないので、次の地形図でこの部分は考察していこうと考えている。

昭和4年(1929)地形図



鉄道駅半径300m
 集落分布
 集落がない場所
 鉄道駅分布
 寺院分布
 品川の古道
 1929年昭和4年の道
 1921年大正10年までに造られた道
 なくなった道

- | | | | |
|-----------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------|
| ①不動堂(目黒不動) 大同3年(808) | ⑦妙光寺 明治28年(1895) | ⑬祐天寺 享保3年(1718) | ⑲碑文谷八幡神社 |
| ②羅漢寺 明治41年(1908) | ⑧戸越八幡神社 文禄元年(1592) | ⑭法蓮寺 文永年間(1260年代) | ⑳常圓寺 天正18年(1590) |
| ③海福寺 明治43年(1910?) | ⑨行慶寺 | ⑮旗岡八幡神社 長元3年(1030) | ㉑東光寺 貞治4年(1365) |
| ④氷川神社 元禄年間(1688-1704) | ⑩東光寺 天文13年(1544) | ⑯摩耶(まや)寺 寛文年間(1661-1673) | ㉒立源寺 寛永元年(1624) |
| ⑤安楽寺 弘治2年(1556) | ⑪長應寺 | ⑰小山八幡神社 長元3年(1030) | ㉓八幡神社(現・奥沢神社) |
| ⑥専修寺 | ⑫朗惺(ろうせい)寺 文禄2年(1593) | ⑱円融寺 仁寿3年(853年) | ㉔八雲氷川神社 |
| | | | ㉕金蔵寺 慶長時代(1600年頃) |

1922年大正11年荏原町区画図

1931年昭和6年荏原町区画図



耕地整理される前の道

● 鉄道駅

□ 鉄道線路

□ のちに耕地整理された道

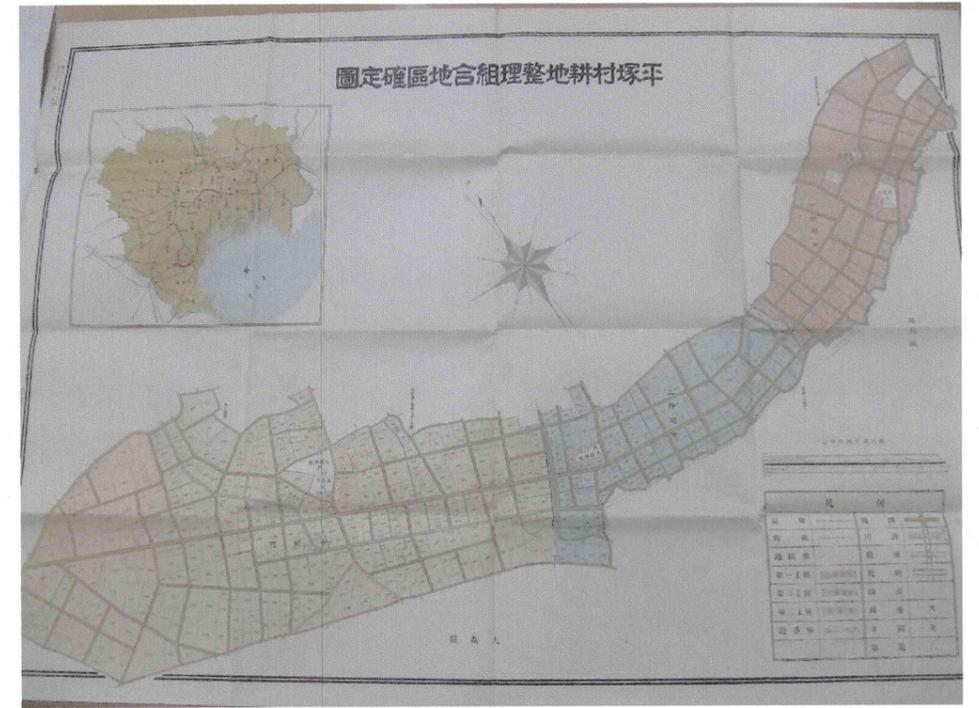
□ 最初に耕地整理を実施した道(東京府下平塚村全図より)

■ 平塚村耕地整理組合地区確定図より 昭和8年

■ 平塚村下蛇窪戸越整理組合地区確定図より 昭和9年

荏原町耕地整理前後重ね合せ図

平塚村耕地整理組合地区



平塚村下蛇窪戸越整理組合地区



- 鉄道駅
- ▭ 鉄道線路
- ▭ 1922年大正11年荏原町区画図の道
- ▭ 1931年昭和6年荏原町区画図の道(耕地整理後)
- 平塚村耕地整理組合地区確定図より 昭和8年
- 平塚村下蛇窪戸越整理組合地区確定図より 昭和9年

3. 昭和時代－関東大震災後、人が自然に抗う時－

(1)1929年昭和4年

昭和4年(1929)の地形図を見てもらうと今までの面影がほとんど残っていないくらい急激な発展をしていることが分かるだろう。大正10年(1921)と昭和4年(1929)では8年間しか経過していないことになるが、この間の大正12年(1923)に関東大震災が南関東全域を襲ったのである。地震が起こった時間帯が正午近く台所で火を使う家庭が多かったことから地震の被害だけでなく、火災による被害も大きかったという。東京にとっては未曾有の大事件であり東京全域にわたって被害を被ったが、幸いにも品川区域は比較的軽微な被害で済んだ。地域によって被害が異なったために品川地域における土地利用、住民生活等、あらゆる面で転機となった出来事であった。

しかし、関東大震災のみで地形図の変化が起こったわけではない。地形図を見ると大きく2つのことが内包されている。1つは大正10年(1921)の地形図には郊外をはしる鉄道が東急目黒線しかなかったが、関東大震災後の地形図では、東急池上線、東急大井町線、

東横線が走っていることに気づく。鉄道網の発達が著しいのである。2つ目に耕地整理が行なわれていることである。



各地域の耕地整理活発化

「昭和4年地形図」より

東京市内からの人口の流入が多く受け入れるために市街地を拡大していったのだが、その拡大にあわせて新しい直線状の道ができたことである。これらの前後関係を明らかにすると共に地形図から気づくことを述べていこう。大正10年(1921)からの変化があまりにも急なので、実際品川区域の何処から変化の兆しが見られたのか地形図だけでは気づかないことが多い。地形図以外に耕地整理と鉄道が開業した年、それぞれの町村の人口の変化を参考にしていきたい。

出来事	起こった年(期間)
平塚村耕地整理	大正7年～昭和8年(1918～1933)
東急目蒲線開業	大正12年3月11日(1923)
関東大震災	大正12年9月1日(1923)
平塚町第2耕地整理	大正12年～昭和4年(1923～1929)
三谷耕地整理	大正12年～昭和4年(1923～1929)
上蛇窪耕地整理	大正12年～昭和6年(1923～1931)
蛇窪戸越耕地整理	大正13年～昭和6年(1924～1931)
碑文谷耕地整理組合	大正12年(1923)12月18日
碑文谷第二耕地整理組合	大正12年(1923)12月18日
衾東部耕地整理組合	大正14年(1925)12月25日
衾西部耕地整理組合	大正15年(1926)1月7日
東急大井町線開業	昭和2年(1927)

東急東横線開業	昭和2年(1927)
東急池上線開業	昭和3年(1928)

耕地整理が行なわれた町村別の人口の変化は以下の通りになる。

町村別	大正9年(1920)の人口	昭和5年(1930)の人口
戸越	4706	41980
中延	1459	36060
小山	538	21951
上蛇窪	418	14601
下蛇窪	1401	17510

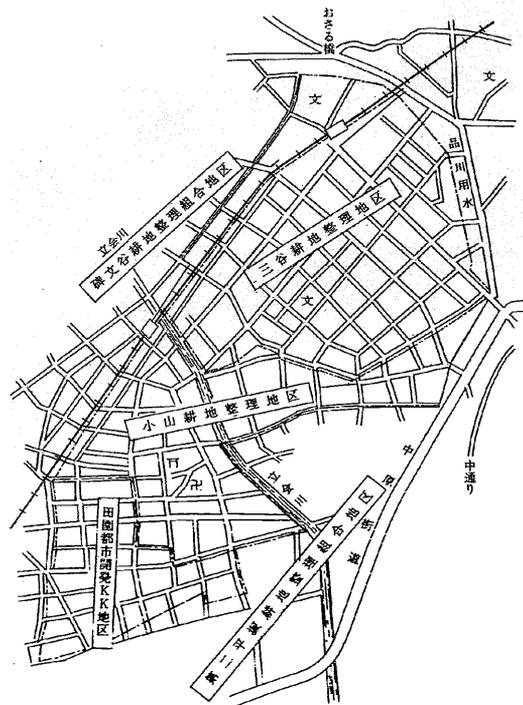
最初に昭和4年(1929)の地形図からどのような耕地整理が行なわれているのか、また地形との関係はどうかを見ていこう。上記の表から分かるようにこの時期の品川地域の耕地整理は色々な場所で行なわれている。特に大正12、13年(1923、24)に開始されているものが多いことが分かるだろう。これは関東大震災直後であり震災の影響であることがわかる。これら耕地整理事業を行なうためには、土地所有者の3分の2の同意が必要となることや同意者の面積が整理区域のなかに3分の2以上なければならぬことなど色々な条件があったために実施の期間には地域的にかんがりの開きがあり、最初の開始から約15年間にわたって各地で行なわれていることがわかる。

大体の耕地整理が大正12、13年(1923、24)に開始されているのに対し、平塚村の耕地整理は大正7年(1918)に開始されている。関東大震災の影響ではないのである。では何が影響して行なわれたのか。

大正6年(1917)のことである。この村にまたまある事件が起こる。この年の6月に平塚村の中延から上蛇窪・下蛇窪地内の立会川に沿って電力会社が高压線を架設する目的で、測量を行い、杭打ちが進められた。これを見た村民は高压線の危険性を恐れると共に、土地利用上の支障を心配したのである。急遽有力者同士の会議が行われ、会合の末に出した結論として、早急に耕地整理事業を実施し、事業の障害となる高压線の架設を排除するこ

とにしたのである。つまり高压線さわぎが耕地整理事業を促したことになる。平塚村耕地整理は高压線予定地周辺を施行地域として事業を進めたのである。

荏原町の耕地整理の時期は書かれているものの、具体的な区域、耕地整理期間中の何処で実際行ったのかは文献で残されていない。これは他の地域と違い、品川の耕地整理の文献は戦災で消失してしまい残っていないからである。



武蔵小山・西小山周辺の耕地整理場所

「ふるさと 小山の村から街へ」より

そこで本論文では平塚村内でどのような道から耕地整理されたかは、大正11年荏原町

区画図と昭和6年荏原町区画図を参考にして見ていきたい。昭和6年の区画図に色で分けられた道がある。これは東京府下平塚村全図(大正14年発行)から道を拾ったものである。おそらく全体に先駆けて整理した道を意味している。後述する武蔵小山・戸越銀座商店街がある直線状道路はやはり先駆けて整理されたものだと分かる。耕地整理の場所については図を参考にしていただきたい。

このように各地で耕地整理が行われたわけであるが、何を基準にして直線状の道路を敷いていったのだろうか。耕地整理が行われた地域は目黒台と荏原台の一部である。急な谷地などはなく緩やかな台地となっている。このことから微地形においては影響があっただろうが、大部分は地形の影響は受けていないように考えることができる。地形ではないとすると何に影響したのか。おそらく昔からある道に影響されたのではないであろうか。耕地整理が行われたことで昔の道がすべて消えてしまったかというところではない。古道はほとんど残っており、明治16年の道もかなり残っていることが地形図の道の色から確認できるだろう。これらの道に並行、もしくは直交するように道路がはしっていることに気づくだろう。

結果、この時期に造られた道は昔の道に影響され造られたということになる。しかし忘れてはいけないのは、昔の道は何に影響され造られたか、それが地形であることである。直接地形には関係していないかもしれないが、間接的に影響をしているということになる。

次に鉄道網の発達についてだが、どのような場所に駅が置かれており、どのように発展しているかを見ていこう。次の図は、駅と集落の関係である。



鉄道駅と大正10年集落分布の関係

「昭和4年地形図」より

まずは駅と集落の関係図は、大正10年(1921)の集落分布と鉄道駅・半径300mの円をプロットしたものである。集落分布を避けて駅ができていることに気づくだろうか。大正10年(1921)の地形図において東急目蒲線が集落の隙間をぬって、駅を設立していたことは発見できる。これと同様のことが昭和4年(1929)のほかの東急の路線でも見ることができよう。これはなぜなのか。2つの推測を立てることができる。2つある理由は、場所性が異なるからである。1つは東京のより近い場所(明確に分けることはできないが立会川の東側が目安になる)は、既にある程度の人々が住み着いていたこの地域には東急の前身である田園都市株式会社は土地の購入を行っていない。そのため鉄道を敷設するにあたり、地価が比較的安価な場所を選んだのでないであろうか。すでに発展している土地に駅を配置したとしても、元を取り戻すのに長期採算を見積もることになる。それよりは発展していない土地に駅を配置し、発展を促したほうが良いと考えられる。2つ目は東京から離れたところ(目安として立会川の西側)では田園都市株式会社が、鉄道を通す前に大量の土地を購入している。具体的に洗足地区(碑倉村・平塚村・馬込村)、大岡山地区(馬込村・碑倉村・池上村)、多摩川台地区(玉川村・調布村)がある。地形図でいうと西側の端に位置する。この地域では会社が持つ土地の近くに鉄道を通したほうが良いことになる。

この2つの推測を踏まえると、東急(東急目蒲線・東急池上線・東急大井町線)の駅は、基

本的に発展していない地域(自然発展の可能性のある場所と会社がこれから発展させようとする場所)を通り品川地域の発展を促していることが分かる。



鉄道駅と寺院との関係

「昭和4年地形図」より

駅と寺院との関係も考察していこう。次の駅と寺院をプロットした地形図を見ていただきたい。するといくつかの駅周辺の近くに寺院があることが分かる。顕著な例を挙げよう。東急目蒲線の目黒の次の駅に目黒不動前(現在は不動前駅)という駅がある。この駅の周辺には、目黒不動尊が昔からあることからそのような名前が付けられた。他にも目黒不動前駅の近くには、氷川神社があり、昔は湧き水が出ていたことで有名であった。周辺に幾つもの寺院があることから等距離の場所に駅を設置したと考えることができる。

同じく目蒲線の目黒不動前駅の次の駅である武蔵小山駅の近くにも朗暎寺がある。こちらは目黒不動前駅とは少し形式が異なるが、駅から直線の道で繋がっていることから意図して駅を設置したと考えることができよう。

東急池上線の五反田から2つ目の桐ヶ谷駅の近くには専修寺がある。こちらは、そこまで有名な寺院ではないためか、駅名には反映されていない。そのためか桐ヶ谷駅は、昭和28年(1953)に廃止になってしまっている。もともと戸越銀座駅と桐ヶ谷駅は4~500mほどしか離れておらず、使用される明確な目的が見出せなかったのが原因と考えられる。

東急大井町線の大井町から3つ目の荏原町の目の前には法蓮寺と旗岡八幡神社がある。

駅の改札口を出てすぐの場所にあるため、意図して駅を設置したと考えられる。今まで上げてきたなかでもっとも駅と寺院の距離に近い。

このように駅と寺院の関係性については一概には言えないが、鉄道が通る以前にある程度周辺に名が知れ渡っている寺院においては、駅名になるほどなので意図して通ったと言えよう。また敷設するうえで予定地の近くに寺院があるならば、元々寺院には人が集まるため利便性が良いと考え、配置したのであろう。

この地域の駅の数から見ると、寺院に関係する駅は少ないのは確かであることから鉄道は会社である以上利潤の追求を第1にした、または寺院は神聖なものであるが故、元々集落の中心から離れた端に存在することが多かった理由から街の中心をはしる鉄道とは相容れぬ関係なのかもしれない。

駅と道の関係図を見ていただくと面白いことが発見できる。駅ができている場所の近くに必ず古道、もしくは明治16年(1883)にあった道があるのである。これが何を意味しているのか。おそらく耕地整理が進行中のところ駅を設置するうえで、今まで村民が普段使っていた愛着のある道の近くを選んだのではないであろうか。駅を設置するにしても近接して人が良く通る道がないと駅が発展しないし、周辺に向かうことができない。その近接した道が耕地整理された道ではなく古道、明治16年(1883)の道ということがそれを物語っている。



中延駅周辺の線路と道の関係

「昭和4年地形図」より

直線状の道と鉄道の線路がはしっている関係を3つに分けることができる。

1つは、鉄道の線路と耕地整理された区画が全く関係なく交わっている地域があるということである。主に地形図の南側、大井町線の蛇窪・中延・荏原町駅、池上線の荏原中延・旗ヶ丘駅あたりである。これは、耕地整理進行中でありかつ住宅地化が初期の段階に鉄道の線路が敷かれたことを意味しているのではないであろうか。耕地整理で道が決定したが鉄道の線路は最初に決めた始点終点間を繋ぐものであるからこのようになったのではと考えられる。その中で駅は昔の道に近接して設置されたのであろう。



東急目蒲線沿いと道の関係

「昭和4年地形図」より

2つ目は、東急目蒲線のように耕地整理に先駆けて線路を敷いた地域である。これは耕地整理側が昔の道に並行・直交するように新たな道を作ると共に鉄道の線路に対しても並行・直交している点から判断できるだろう。実は地形図からは他にもそのような地域があることに気づける。池上線の戸越銀座・荏原中延駅間である。この地域は、表から昭和3

年(1928)の池上線開通、大正13年～昭和6年(1924～1931)の蛇窪戸越耕地整理があったことが分かるが池上線が先に開通したのではないかと考えられる。

3つ目は、大井町・目蒲線の大岡山駅周辺のように田園都市株式会社が土地を持っていた地域である。鉄道に並行・直交して道路が造られていることが分かる。この地域は鉄道が通ると同時に住宅地化が始まったのであろう。それも会社が鉄道と地域両方を受け持っていたので整然な街並みが形成されたのであろう。

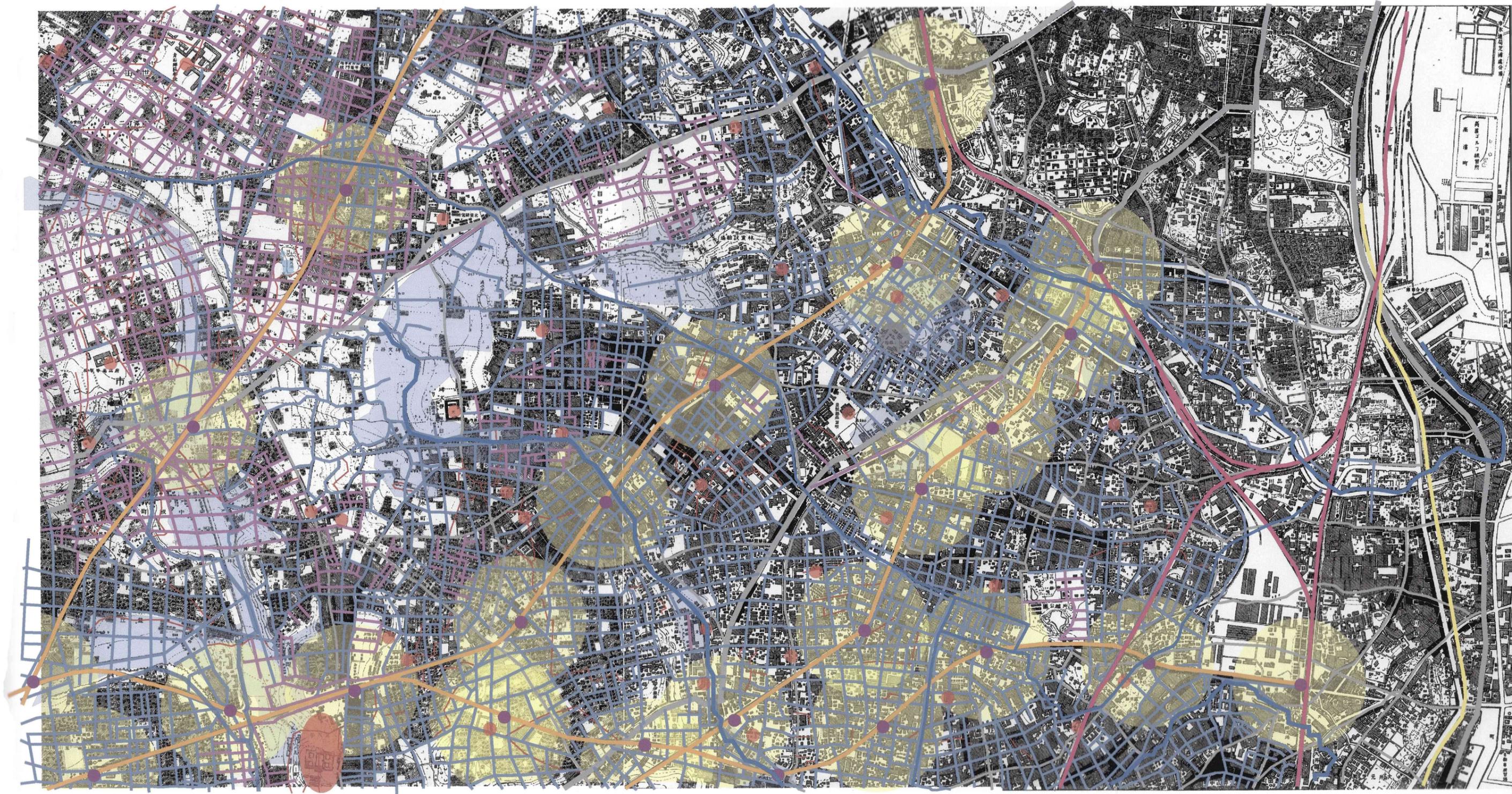
昭和4年(1929)の地形図からは、耕地整理・鉄道・道路を中心に品川地域を考察したが、これは関東大震災の影響によりどれだけ郊外に変化をもたらしたのかを、明確にするためである。



大岡山周辺の道と線路の関係

「昭和4年地形図」より

昭和12年(1937)地形図



鉄道駅半径300m

集落がない場所

学校分布

鉄道駅分布

品川の古道

1937年昭和12年の道

1929年昭和4年までに造られた道

無くなった道

(2)1937年昭和12年

昭和12年(1937)の地形図を見てみると、より郊外に住宅地化が進んでいることが確認できよう。これは東横線の影響が大きいと推測

できる。その背景を明確にするために、東急東横線の開業とこの地域の耕地整理の時期をまとめた表と耕地整理のされた場所の図版を見ていこう。

出来事	起こった時期(期間)
東急東横線開業	昭和2年(1927)
碑文谷第二耕地整理組合	昭和4年(1929)4月5日
衾第一耕地整理組合	昭和6年(1931)5月2日
衾第二耕地整理組合	昭和6年(1931)10月10日
衾第三耕地整理組合	昭和6年(1931)10月10日

表と図版と昭和12年(1937)の地形図を照らし合わせると、地形図の左側にあたる部分の耕地整理(碑文谷第二耕地整理・衾耕地整理)は東急東横線が開業してからされていることが分かる。

が並んでいることが分かる。また衾耕地整理は二子道に比較的直交している道が多いことに気づく。



目黒区耕地整理地区図

「目黒区ホームページ」より

前の昭和4年(1929)の地形図の東急線の碑文谷駅(のちに青山師範駅、現在は学芸大学駅)周辺を見ていただくと耕地整理されていることが確認できる。これが碑文谷第二耕地整理である。表を見ると起こった時期も一致している。



青山師範学校と碑文谷駅周辺

「昭和12年地形図」より

逆に碑文谷耕地整理は鉄道のほうに優先されて整理が行われている。碑文谷耕地整理は、昭和4年(1929)に駅前の整理が行われ、徐々に広がりを見せていることがわかる。駅中心から始まった整理ゆえに二子道に行きつたときに直交できなかったのであろう。

次に駅(青山師範・府立高等駅)について着目すると色々なことが見えてくる。

昭和12年(1937)の地形図に戻り、衾耕地整理による直線状の道を見てみよう。前述したように、鉄道が耕地整理よりも早く行われていることから鉄道の線路に並行・直交して道

まずは駅が何故この場所にできたのかを考えてみよう。品川からかなり離れたこの地域は、近くに寺院もなく発展が始まったのも地形図から見ると東急東横線が開業してからの

昭和4年(1929)からといえよう。鉄道が通るまで道と地形以外で性質を持たなかったこの地に駅が設置された理由は何か、それはおそらく駅の間隔と元からあった集落と古道と地形の4つが関係していると考えることができる。まずは駅の間隔であるが、東横線の渋谷―横浜間において乗換、歴史、場所性があるので差異はあるが、駅の間隔が約1~2kmになっている事はご存知であろうか。この地域の駅の間隔は、祐天寺―青山師範駅間1.0km、青山師範―府立高等駅間1.4km、府立高等―自由が丘駅間1.4kmとなっている。次に駅周辺の地形・道・集落は密接な関係にあるので一緒に見ていこう。昭和4年(1929)では碑文谷駅となっていたが、昭和12年(1937)では青山師範駅に名前が変更されている。変更された年は昭和11年(1936)4月1日なので地形図が造られたちょうど1年前となる。名前の変更は耕地整理により青山から青山師範学校(のちの学芸大学)が移転してきたからである。この駅は荏原台の台地のちょうど尾根部に位置している。駅周辺の耕地整理を行いやすくすることが目的であったのだろう。この辺は明治16年(1883)頃から集落を形成しており、集落の北側に品川用水、南側に二子道がある。生活用水、東京へ向かう道が揃っていたため、集落が形成されたのであろう。比較的平坦な台地でありその台地のちょうど縁に近い出っ張りにある。このような土台の上に青山師範駅はつくられたと考えることができる。



柿の木坂駅と府立高等学校周辺

「昭和12年地形図」より

では、府立高等駅も同様であったのだろう

か。昭和12年(1937)の地形図で府立高等駅を見てみると、駅のそばはさほど栄えていないことに気づけるだろう。これは何故なのか。地形から考察すると明らかになる。元々この場所は呑川(のみかわ)によって造られた谷地であることが分かる。呑川は、現在は暗渠化されてしまい、後には緑道が通っている。谷地にわざわざ駅を設置しているのである。当時の駅名は府立高等駅(府立高等学校が移転してきたからである)だったが、昭和4年(1929)の地形図では柿の木坂駅となっており駅周辺に坂があることが分かる。



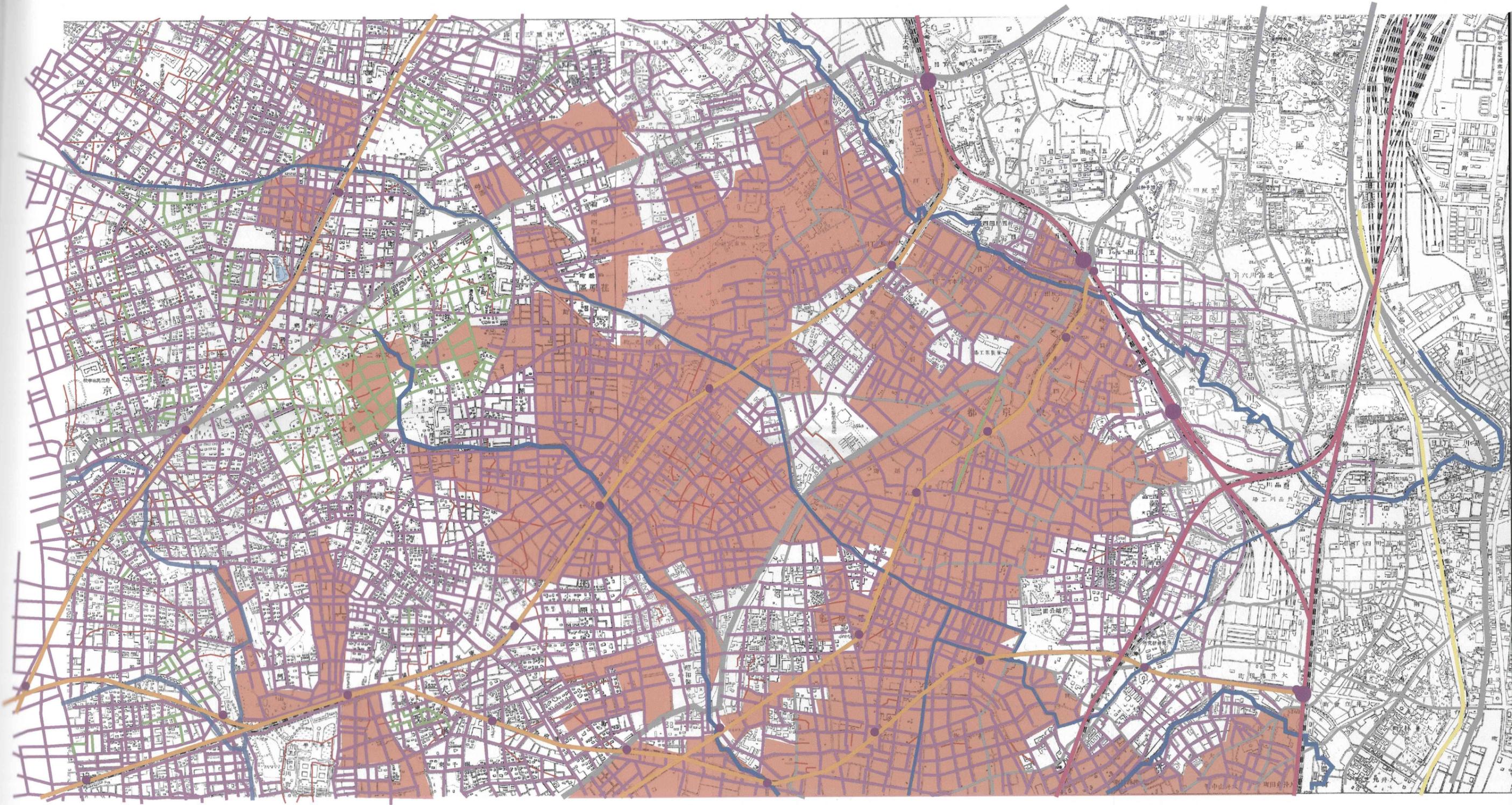
府立高等学校周辺

「目黒区史」より

この場所に駅を設置した理由は1つである。それは、二子道と交差する場所に駅を設置することを第1としたのであろう。昔からある人通りの多い街道・古道の近くに駅を設置することで、利用者増加を目論んだのであろう。現在の鉄道の駅周辺にも大きな道路を見つけることができるだろう。現在は駅を降りた後、バスを利用して家の近くまで行くことを1つの移動手段とする人々がいるが、それを可能とするのは大通りに近接しているからであろう。目黒蒲田電鉄がバス事業を始めたのは昭和4年(1929)であるからちょうど時期としては一致しているのでそのように考えるのが妥当であろう。

このように品川地域でも現在大田区・目黒区に属する地域は、関東大震災の影響や近代化の波を直接受けた部分が少なく、大きな影響としては東急東横線が開業したことにより、駅周辺の耕地整理が行われ、学校が移転し発展していったと考えるのが妥当であろう。

昭和20年(1945)戦災復興地図



戦災による被害



品川の古道



1945年昭和20年の道



1937年昭和12年までに造られた道



無くなった道

(3)1945年昭和20年

昭和20年(1945)と言えば、太平洋戦争終戦の年である。昭和12年(1937)から8年間しか経っていないが、日本にとっては大きな8年間である。昭和12年(1937)に始まった中国との日中戦争は次第に泥沼化していったが、昭和16年(1941)12月、日本はさらにアメリカ・イギリスを敵とする太平洋戦争に突入することになった。前述したが昭和7年(1932)に既に品川区域は、品川区、荏原区となり東京市に属する区となっていた。新しい区政に慣れてきた頃に戦争が始まり、区民生活は、言論・思想面においても厳しく統制されていくと共に、生活物資も急速に減速し、日に日に生活は貧しくなり、最終的には日常生活に必要な食料や衣服でさえ、配給制度が敷かれ消費を統制されるようになるのである。

太平洋戦争の開戦間もない昭和17年(1942)4月18日に日本本土は米軍機の侵入を受けることになった。日本にとって最初の空襲となる。品川も被害を受けたが太平洋沿岸の品川・大井町付近だけであり軽微なものであった。それから幾度か空襲を経た昭和20年(1945)4月15、16日に品川区・荏原区共は、初めて大きな被害を出した。

山田風太郎は「戦中派不戦日記」のなかで、この日の爆撃について次のように述べている。

『昨夜は主に東京西南部一品川より横浜にかけてやられ、この方面よりの電車まったく絶ゆ。祐天寺・目黒区役所附近・清水・鷹番町も焼失せり。武蔵小山はほとんど全滅せりとのことなり。池上線・目蒲線・東横線など全線絶えたり。・・・焼夷弾はさながら夕立のごとく降る。』

昭和20年(1945)5月20日の空襲は品川区・荏原区にとって最大の被害をもたらした。品川・荏原両区のほとんどの区域が火に包まれたことが確認されている。品川区の被災者34459人、荏原区の被災者は6万人にのぼった。他にも空襲を受けているが大きな空襲は

2~3回だった。終戦までの被害として品川区は当時の東京市35区のなかでは少ないほうであった。被災率は38.39%であった。逆に荏原区の被災率は95.78%で区のほとんど全部を焼き尽くされたことになる。なおこの率は35区内で最高であった。前述でこの頃の人口の変化を記載した表があったが、昭和15年(1940)では約42万人いた人口も、戦後には疎開や被害にあった関係で約14万人と3分の1倍に減少していることから悲慘さを物語っている。



戦災被害跡

「戦災復興地図」より

被害の形を図にしたものが、昭和20年(1945)の戦災復興地図である。戦災直後の被害ではないことは、昭和20年(1945)5月24日の空襲により全焼した国鉄大井工場に建物の後が見られることから判断できよう。赤く色が塗られている場所は空襲の被害を示すものである。このように見てみると確かに荏原区の被害が他の区に比べて大きかったことに気づくことができる。この地域は何度も空襲を受けているので、地図からどのような空襲を受けたかを考察することは難しい。また品川・荏原両区に工場が多かったことがこの地に空襲をもたらしたわけでもないようである。当時学童疎開から帰ってきた生徒の作文に『10月23日、1年2ヶ月ぶりで大崎駅についてみると、明電舎、そのほかの建物は変わらぬ姿で建っていた。中略 まわりがあまりにも焼け野原なので家が何処にあるのか見当が付きませんでした。』と書かれていることから判断することができるだろう。

この頃に行われた耕地整理はどのようなと

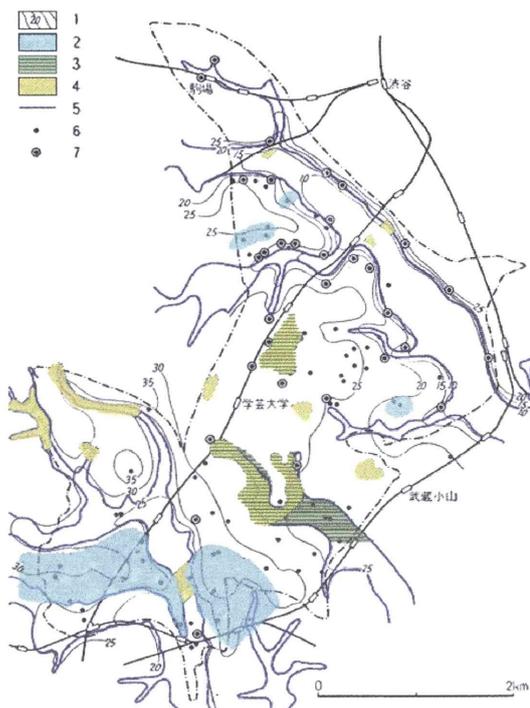
ころであったか戦災復興地図から見ていこう。



昭和20年までの耕地整理

「戦災復興地図」より

大きな耕地整理が行われている場所がある。碑文谷1～3丁目にかけてである。昭和12年(1937)の地形図では、この場所に明治16年(1883)からあった道が存在していた。50年間ほとんど変わらなかったということである。他の地域に比べて耕地整理が戦後近くまで行われなかった。碑文谷の耕地整理が行われたのは、昭和11年(1936)であったが、日中戦争・第2次世界大戦の中断があり、完成したのが昭和27年(1952)であった。



目黒区内地下水分布

「目黒区ホームページ」より

立地が悪かったのも原因だろう。碑文谷はその名の通り谷地であり、ちょうど1～3丁目

には立会川が流れているのを確認できるだろう。昔からこの地域は畑となっていた。

図を見てみるとこの辺一带は地下水が豊富にあることが分かるだろう。これは立会川の水源地である現在の碑文谷公園の碑文谷池(弁天池とも言う)と清水池公園の清水池の間に挟まれている地域だからである。



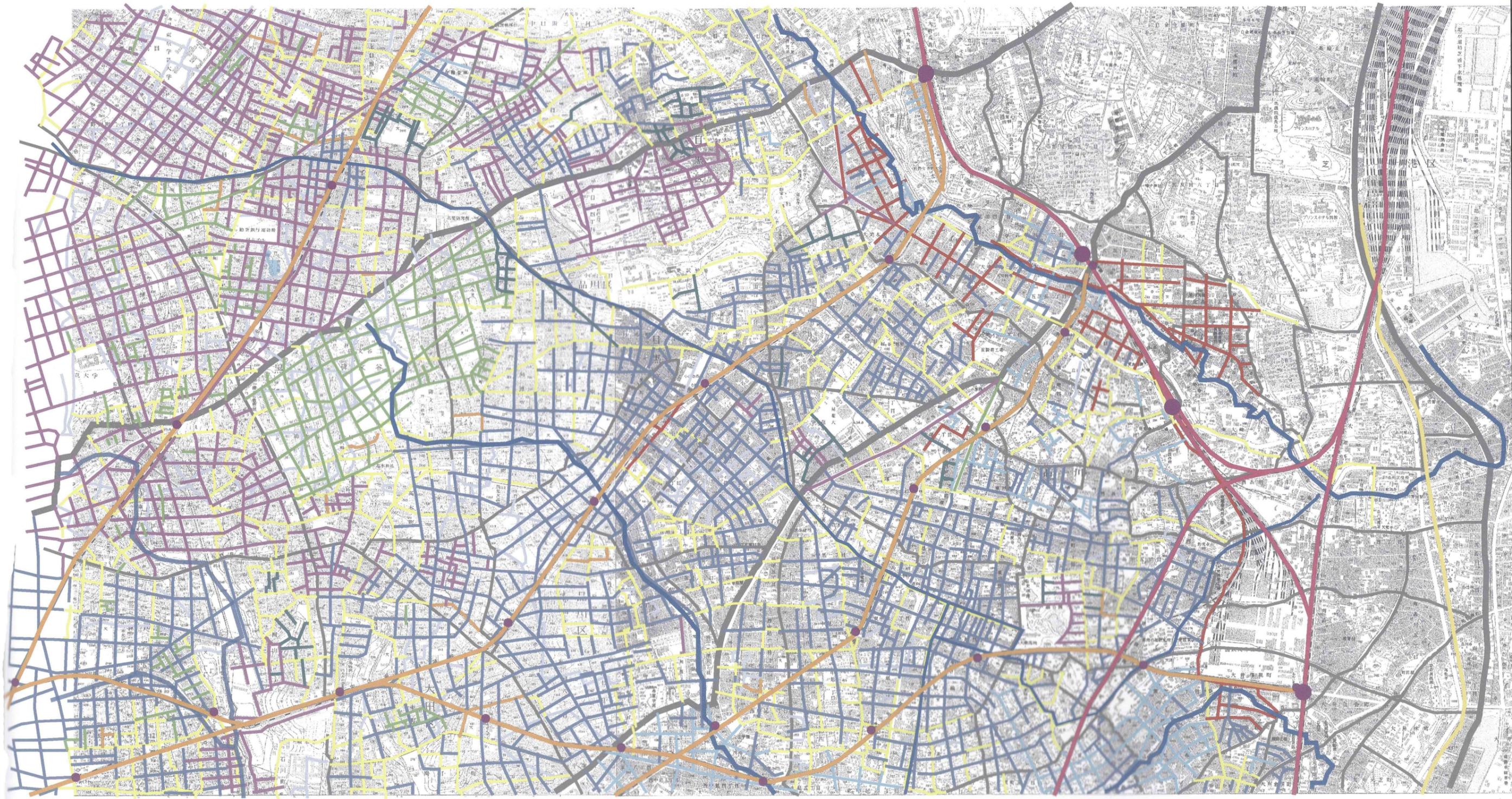
現在の碑文谷公園の池



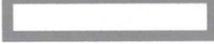
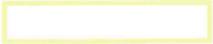
現在の清水池公園

しかし大雨が降りいったん水が出ると湖のようになり一面水浸しになったようである。橋が流され学校に行けなくなるほどであった。このように地形と水源の影響により論文対象地域の中では最後まで昔の道が残っている地域であったと推測できる。ほかにも小さな範囲での耕地整理がいくつか見られる。主に戦争で大きな建物が焼失して、その区画を整理したものや、地形で斜面であったがために今まで整理されてこなかったなどの理由が昭和12年(1937)と戦災復興地図を見比べると気づくことができるであろう。

昭和30年(1955)地形図



1955年昭和30年地形図に年代別の道をトレースしたものである。

	1955年昭和30年の道		1921年大正10年の道		品川の古道
	1945年昭和20年の道		1916年大正5年の道		無くなった道
	1937年昭和12年の道		1909年明治42年の道		
	1929年昭和4年の道		1883年明治16年の道		

(4)1955年昭和30年

昭和30年(1955)になると戦後10年経っているのに市街地は、昭和12年(1937)以上の発展を遂げている。この10年間で日本は、敗戦直後の飢餓状態と異常なインフレに見舞われた。しかし昭和25年(1950)に日本経済の復興にとって最大の契機である朝鮮戦争が起こったのである。思い出していただきたい、大正時代に品川区域の目黒川流域に工場群が建ち並んだが、この動乱ブームに乗っかり、区内の各工場は一斉に息を吹き返した。大井町や五反田の繁華街にネオンが目立つようになり、服装などもようやくこざっぱりしたものになってきたものになってきた。



昭和28年五反田駅を望む
「品川写真館ホームページ」より



昭和28年大井町駅を望む
「品川写真館ホームページ」より

昭和30年(1955)頃になると経済状態も『神武景気』により安定し戦前の水準に到達したのである。このようななか太平洋戦争前までに行われた耕地整理も影を潜め始め、耕地整理

と耕地整理の隙間を埋めるような小さな区画や戦争によって焼け野原になり残った大きな区画(地主などの家)を細かく割っていくような道ができていった。



各年代の耕地整理の隙間を埋める(緑の道)

「昭和30年地形図」より

この頃になると斜面にも人が住み、集落の切れ目が郊外においても分からなくなっている。それでも一部に人が住み着いていない場所も存在する。谷地でかつ川が流れている場所である。前述で碑文谷の耕地整理についてあげたが、その区画を見ていただくと川を重ねるとちょうどその周辺だけ市街地が形成されていないことがわかる。10年経っているのに川の東西からじわじわと市街地が川に向かって拡大しているが川に近接した市街地は見られない。同様に東京工業大学の西側の呑川周辺でも同様のことが言えよう。北に上っていくと途中から市街地が川に近接しているが、そこに至るまでは、川に沿って空白の場所が存在する。

この2つの川も昭和51年(1976)に呑川は全区間暗渠化され、立会川も昭和39年(1964)に暗渠化されて現在は両方とも緑道が川の上に造られている。

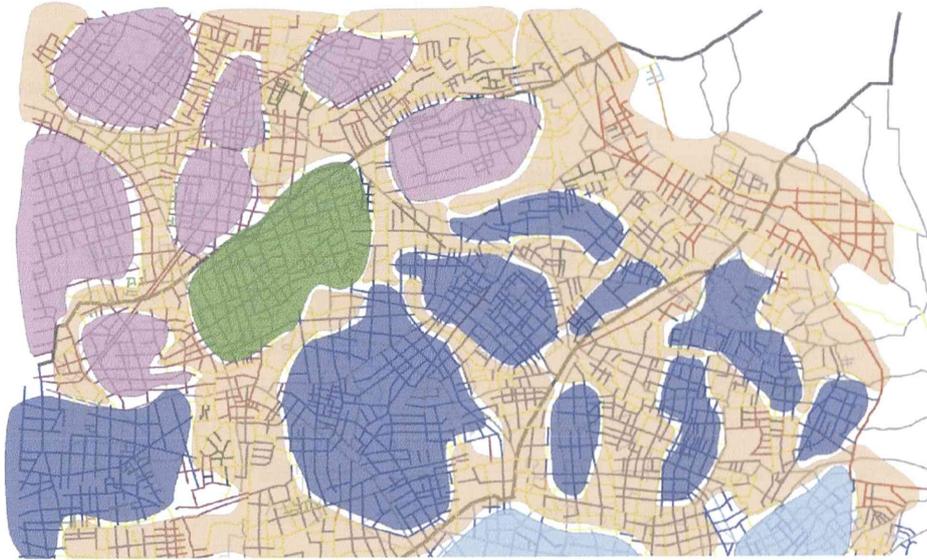
区画について今までのものをまとめて見ていこう。

耕地整理によってできた道を年代別に色を変えたデータを見てみると、市街地の広がりを見ることができる。全体を見渡すと古道と明治16年の道が大きな骨格を作り上げ、目黒川流域から徐々に西に広がりを見せている。その中でも地形に依存されており、西側にある昭和12年の道のほうが碑文谷の耕地整理でできた昭和20年の道よりも早く形成され

ている。市街地の広がり、東京から西側に向けて起こっているが、土台には地形に対応した明治 16 年以前の道があり、耕地整理といえども谷地や川周辺などを避けて行われていったのである。

以下の図は品川の古道・明治 16 年・明治

42 年・大正 5 年の道をオレンジ色、大正 10 年の道を薄い青、昭和 4 年を青、昭和 12 年を紫、昭和 20 年の道を緑として表記法を変えてみたものである。このようにしてみると、大正 5 年以前の道が以後の区画を包み込むように展開していることが分かる。



区画を包み込む昔の道

「昭和 30 年地形図」より

4. 第3章のまとめ

明治16年から昭和30年の計8枚の地形図を照らし合わせて読み取りを行った。約70年間の変遷において重要な役割を果たしたのは、鉄道網の発展・戦争による経済特需・関東大震災の3つであった。出来事が相互的に絡み合い品川地域の市街地形成を行なったといえる。しかし地域によって形成の早さに差異があった。地形と積み重ねた歴史である。地形は台地の発展が早く、谷地は耕地整理も遅く、人の流入も少ない。歴史は江戸時代の街道(目黒道・中原街道)沿いに人が集まる関係上、関東大震災後の発展に差が出ている。商店街で有名な武蔵小山・戸越銀座共に中原街道に面している。戦争による経済特需は、目黒川・立会川流域の工場群の発展に大きな影響を与えた。大正時代は、地形図で大規模工場の設立を見ることができた。工場周辺の耕地整理は他の地域より早く行われ、更なる発展を促した。

時系列で言うならば、明治後期から工場の進出は始まっていた。大正に入ると戦争特需

と自然増加により大井町・大崎駅周辺は工場地の場所性を帯びてくる。工場地周辺には、労働者の住宅が増え集落が拡大した。しかし農村部に影響は無く、自然増加による微小な広がりのみであった。大正末期はまず東急目蒲線ができ、駅周辺の人口が増加しようとしていた。その矢先に関東大震災が起こり、鉄道と震災の相互関係により品川地域への人口流入が爆発的に増えるのである。震災後の市街地の拡大は、鉄道(特に東京急行電鉄)の影響が大きいと言える。電鉄が郊外に大学の移転を誘致しているのである。最初に移転を行ったのは、大岡山にある東京工業大学である。その後も東横線沿いに慶應義塾大学、都立大学、学芸大学などを誘致している。結果周辺の商店街、住宅が増え、耕地整理が行われた経緯がある。このようにして約70年間の市街地変遷が起こったのである。

第4章 ミクロ視点から読み取る

東京西南部の変遷のメカニズム

第4章 ミクロの視点から読み取る

東京西南部の変遷のメカニズム

はじめに

第3章では全体から見た品川地域を考察してきた。地形・鉄道・耕地整理による道がどのように変遷したか、市街地の広がりがどのように起こったかを約80年間、8つの地形図で見てきた。第4章では、第3章で簡単にもしくは触れずにいたが周りの地域に大きな影響を及ぼした『場』について考察していきたいと考えている。市街地形成は、必ずしも大きなうねり(地形・鉄道・区画)だけで行われたわけではない。特徴がある『場』が大きなうねりと相互的に関係してつくりあげているのである。ではどのようなうねりと関係して市街地形成の一役を担ったのかを見ていこう。

1. 鉄道が影響を与えた『場』

(1) 妙華園・謎に満ちた河瀬春太郎

みなさんは、日本の桜がアメリカ・ワシントン D.C.に寄贈されたことをご存知であろう。しかし寄贈された時代やこれに携わった人々についてはほとんど知られていない。1度日本から送られた桜の苗木には実は、害虫や細菌類が発見されたために1本残らず焼却された。2度目の寄贈の際に1本1本厳選な苗木を贈るために選別したのが『妙華園』の当主の河瀬春太郎であった。

妙華園は明治28年(1895)に設立し、現在のJR東日本スポーツプラザとJR家族寮独自寮を含めたあたり(西品川1, 2丁目)で、明治42年(1909)の地形図で確認すると戸越公園



妙華園の設立前

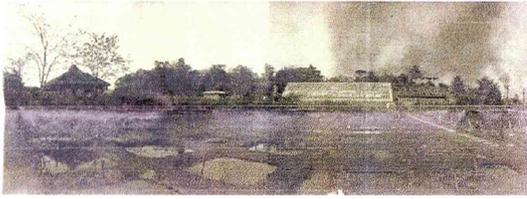
「明治16年地形図」より



妙華園

「明治42年地形図」より

(三井邸)の東の水田地帯の一角に位置する。広さは5000坪とも10000坪とも言われている園芸場であった。



妙華園

「品川の人物史」より

当時このあたりは、品川用水が流れており、植物を育てる場所として適しており、メロンが特産品として栽培されるほどであった。妙華園の名は、隣接していた妙光寺にちなんで名付けられたという。妙華園が広く知られるようになった理由は、ここが珍しい花々を栽培するだけでなく、ほかにも小動物園、孔雀や七面鳥の鳥小屋、温室による四季折々の花々を見せて入場料を取ってお客を集める、今で言う遊園地のような性格の場所だったからである。一時は、向島百花園を凌ぐ東京の名所となったのである。立地条件はあまり良いとはいえないが、明治42年(1909)の山手線開業などで旅客駅が誕生し利便性は良くなっていったのであろう。明治末から大正にかけて城南小学校をはじめとする学校の子供たちの遠足地としてもよく利用された。春祭りには近隣、郊外問わず数万人もの人手があったということである。

このように郊外の低地と台地の縁にあったにもかかわらず、斬新でスケールの大きい栽培所、私設公園を開設した人物である河瀬春太郎とは、どんな人物だったのか。実は有名な人物であるにも係わらずあまり知られていない。明治5年(1872)に生まれて、植物学を学ぶためにアメリカに明治10年(1877)留学した。そして明治18年(1885)に帰国しているのである。不快な点がある。明治10年といえば春太郎はまだ5歳なのである。5歳で海外留学し、13歳で園芸技術を習得して帰国したことになる。これは年代表記に誤りがある可能性が大いにある。さらに妙華園を設立するという大きな事業を行っていたながら春太郎に関しての詳しい資料が保存されていない事

は驚くべきことである。

妙華園そのものは、開設から30年足らずの大正10年(1921)に閉園され、現在は跡形も残っていない。



大井工場に隣接した妙華園

「大正5年地形図」より



閉園した妙華園

「大正10年地形図」より

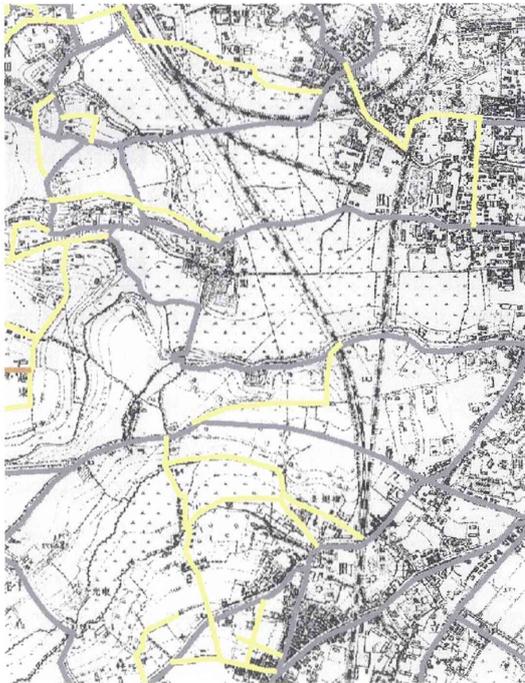
実際大正5年(1916)の地形図には大井工場の近くにあるが、大正10年(1921)の地形図には残っていない。ここでなぜ一時期は数万人の観光客で賑わった妙華園が閉園に至ったかを考えると面白いことが分かる。妙華園があった場所は鉄道の線路と品川用水がちょうど交差するあたりである。また、地形が富んでおり台地の凸部分にあたる。そのような場所は

大正期において工場地帯へと変遷していく事は、第3章で述べている。このように急速な工場地帯の発展により、周辺環境の悪化(主に工場煤煙)の影響で、植物が育たなくなってしまったからだと考えられる。特に大井工場ができてからは拍車がかかったように見える。結果、国鉄に当時15万円という大金で売却したのである。

その後は敷地内の高台である苗木原に昭和40年代まで苗木店として営業していた。しかしこの営業も新幹線の高架ができてしまい、日当たりが悪くなったのか次第に苗木畑の面積は減り、いつの間にか見られなくなっていった。

(2)大規模工場 大井工場の設立

第3章の大正5年(1916)の地形図において大井工場については少しであるが述べてきた。ここではどのような背景で工場は移転し、周辺に与えた影響について述べていこう。建設当時の周辺の地形は、品川宿に荏原郡戸越村や蛇窪、平塚村方面から遊びに行ったり、商売に出かけたりするには現在大井工場のある権現台の丘陵の草地を通行していたようである。確かに工場ができる前の明治42年(1909)の地形図では、のちの工場敷地内を古道が2本横切っていることが確認できる。



大井町周辺

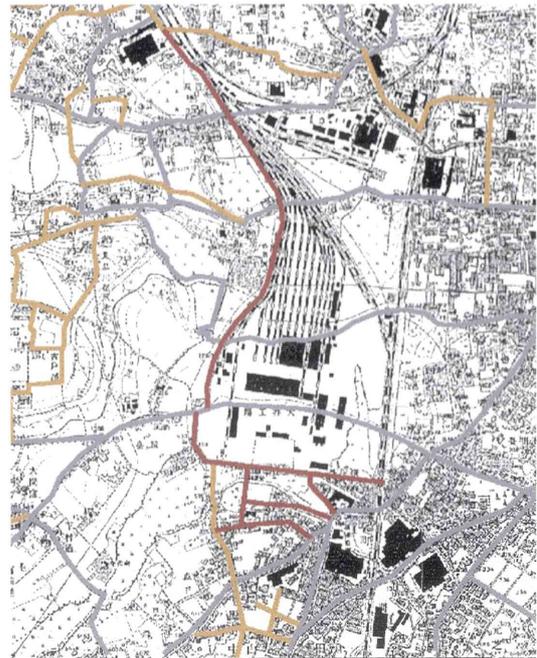
「明治42年地形図」より

2本のうち南側の古道は、権現台の尾根を通っていた道であることは、高低差を表した図を重ねることで分かる。この辺はちょうど目黒川と立会川の挟まれているため、明治42年の地形図でも確認できるが、妙華園附近は水田になっている。大井工場が建設された大正2年(1913)には、大井町に後藤毛織の工場と女工の寄宿舎があったため、比較的にぎやかな場所になっていた。

先ほど敷地内の古道の1本が権現台の尾根

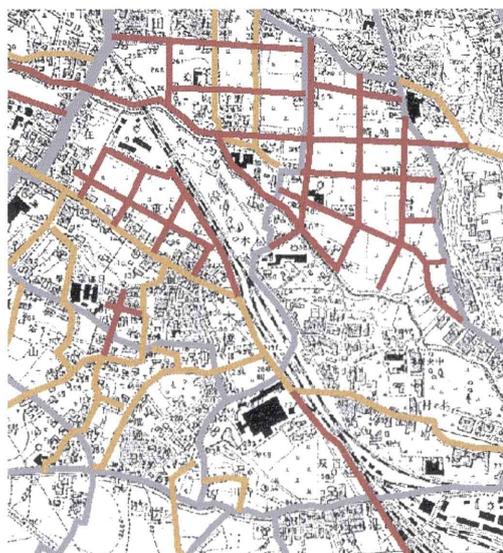
部を通っていると挙げているので気づいたかと思われるが、大井工場の建設の敷地南半分は、現在建っている工場軌条面から平均5~6mの丘陵であり、工場を建てるために平地にしなくてはならなかった。丘陵を開拓して出た土壌は、品川駅附近の湾岸を埋めるために使われた。明治43年(1884)には大井の地を買収していたが、土地の半分の丘陵の土壌を品川駅の湾岸に運び、工場の建設工事と埋め立て工事を並行して行なわなければならなかったため、工程が長期にわたることになった。

このように周りの地形に影響を与えた大井工場であるが、この地に建設するに至った理由は何が考えられるだろうか。新橋工場の拡大が困難である事より移転しなければならなかった事は第3章において述べている。この場所に移転した理由は恐らく広大な土地、鉄道線路の結節点、周辺地域の市街化の進行具合をまとめた結果導き出された答えであると考え。広大な土地に関しては、この時期に市街化が進んでいる街の形成を見ていただきたい。



大井工場設立後

「大正5年地形図」より

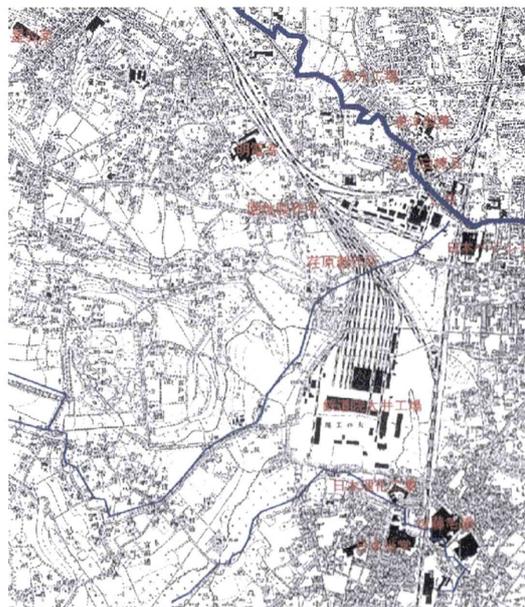


大崎駅周辺

「大正5年地形図」より

大正5年の大崎と大井町を比べてみると大崎周辺は中規模の工場が多く、五反田は小規模な工場、住宅地が多いことが分かる。建物と建物が近いためほとんど場所がない。逆に大井町はある程度発展しており、工場地帯が出来上がりつつある。線路の結節点については、大崎より大井町のほうが車両工場として、修繕・開発した車両を送り出す場所として優れていたのではないかと考えることができる。市街化の進行具合は大井町の工場の進出が早かったことが関係しているのではないだろうか。

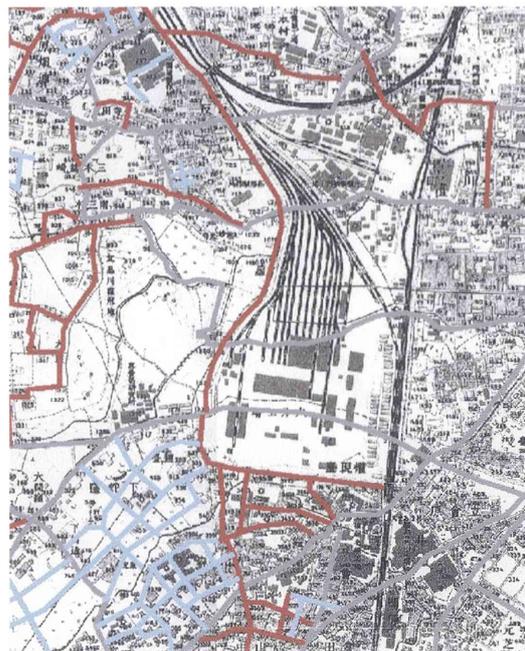
大正5年の地形図に主な工場名を記入したものの、見ていただくと大崎駅周辺・目黒川周辺・大井町駅周辺と3つに分けることができる。3つの周辺を見ると大井町の市街地化が進んでいることが一目瞭然である。これは明治後期に既に工場が建っていたことを示しているのであろう。実際に、大井町の後藤毛織は明治25年(1892)に芝白金台町から移転してきているのに対して、大崎の明電舎は明治45年(1912)に移転してきている。早くから工場化が進んできたことになる。



大正初期の目黒川流域の工場分布

「大正5年地形図」より

周辺に与えた影響として、大正5年から大正10年にかけて大井工場周辺の水田地帯が工場群に変わってきていることに気づくだろう。



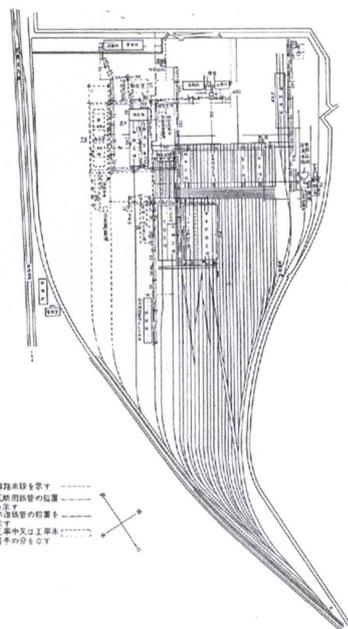
大井町周辺の発展

「大正10年地形図」より

大井工場の北には三共株式会社が、明治41年(1882)に日本橋南茅場町から品川硝子会社

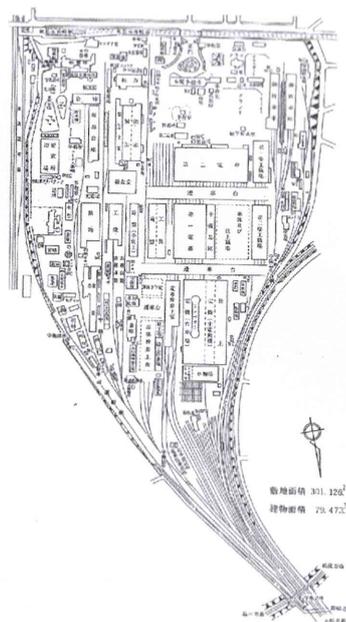
の後の売地を買収し、この地に移転してきた。北のあるのは三共第四工場である。南側は目黒川流域の次に耕地整理が行われている。このように立会川流域や品川用水の近くに工場群が進出して、『場』としての雰囲気を持ち合わせ、大井工場が建てられた。その後も周辺には工場が建てられた工場が工場を呼んだのである。更なる発展は、耕地整理を促し、大井町の土台を作り上げたのである。

その過程で大井工場も何度か、改築を行っている。大きな変化として、現在ある大井工場敷地内の団地の出現である。大井工場の配置図があるので確認していただきたい。

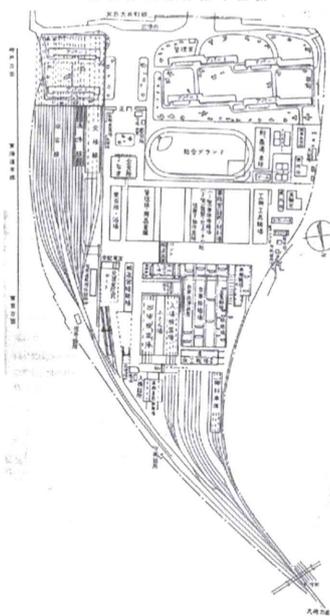


大正4年大井工場配置図
「大井工場90年史」より

当初工場内の設備は少なく、地方の鉄道の修繕も受け持っていたことから線路の本数が多いことに気づく。敷地内の建物の数も少なく敷地内に空白部分が多い。団地設立前は、設備も充実しており、工場以外の機能として浴場、グラウンド等が置かれている。現在の大井工場には JR 東日本の団地が数棟立並んでいる。昭和 56 年に建てられたものなので、現在までに 26 年経っている。技術の発展につれて工場部分がコンパクトになってきている。



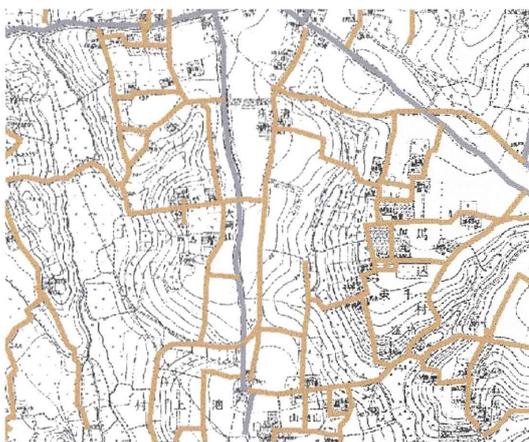
団地設立前大井工場配置図
「大井工場90年史」より
新大井工場計画平面図



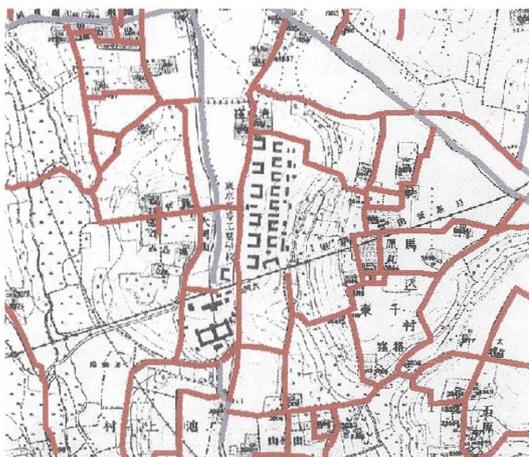
現在の大井工場配置図
「大井工場90年史」より

(3) 有名校の移転の背景

現在東急大井町線の大岡山駅の目の前にある東京工業大学だが、元々この場所にあったわけではない。東京工業大学の前身の東京職工学校が設立したのは明治14年(1881)のことであった。設立当時の場所は浅草区蔵前であった。ではなぜ郊外の大岡山に移転することになったのであろうか。まず地形図を見ていこう。



大岡山周辺
「大正5年地形図」より



東京工業大学移転後
「大正10年地形図」より

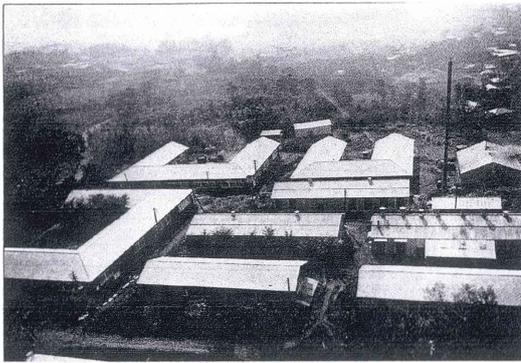
地形図を見ると大正10年(1921)から大岡山の地に存在していることが分かる。同時に地形図には東急目黒線が敷設されていることが分かる。大正10年前後と言えば、関東大震災が大正12年に起こった事は前述で上げた。

東京工業大学の大岡山移転については鉄道と関東大震災が密接に関係していると考えることができる。ではどのようなやり取りの末に移転に至ったのか。

関東大震災により、浅草区蔵前の校舎は本館をはじめとするすべてを失ってしまう。その後東京市内の学校の一部を借りて転々とした。移転先を探していた東京工業大学に目黒蒲田電鉄は、田園都市予定地のうち大岡山地区(田園都市株式会社社有地)30万㎡と浅草区蔵前の敷地4万㎡を日本勧業銀行の評価により交換し、大岡山への移転が決まったのである。ちなみに蔵前の土地を売った資金で東急線(当時は武蔵野電鉄)の権利買収をしたと言われている。同校の開校は大正13年4月21日であった。なお後述するが、小山駅前(現在の武蔵小山駅)に誘致した府立第八中学校(現在の小山台高校)も同時に開校している。このときの目黒蒲田電鉄上半期営業報告書には「4月より武蔵小山駅(大正13年6月に小山を改称)前には府立第八中学校、大岡山駅前には東京高等工業学校が開校し、陽春の遊覧客と共に一層乗客の激増を招致せり。即ち前期に比べし人員に於いて実に2倍余、旅客収入においては約8割、総収入に於いて2倍1分を増加したり」と良好の好影響が記されている。当時の目黒蒲田電鉄にとって大きな福音となった。鉄道側としては利益を目論みこの場所に誘致したのである。また大岡山地区であった理由として、社有地の中で1番大きな場所、東京に近い場所だったからと言えよう。いくら社有地の中で近いといえども、当時の大岡山は、集落があったが民家同士は離れており、台地にできた畑の中に民家があるといえる。学校関係者も学校付近にはほとんど人家はなくて、銭湯へは目黒まで電車でいったものと述べている。

土地の取得に伴って、大岡山駅の北側に校舎の建築が急ピッチで行われた。バラック建ての仮校舎であった。大正10年(1921)の地形図にはコの字型建物が並んでいるのを見て取

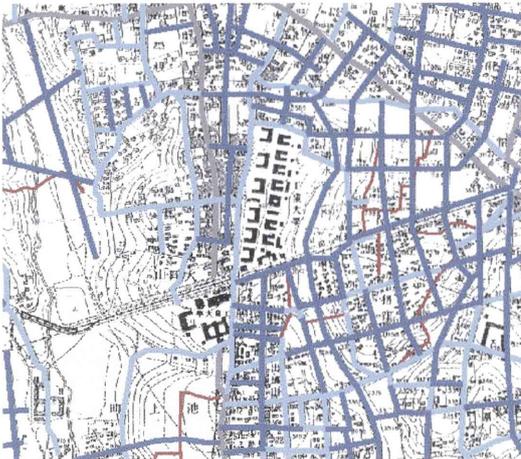
れる。



仮設コの字型校舎

「東京工業大学百年史」より

また線路を挟んで南北に展開していたため当時は構内の連絡等で不便であり、移転後の課題となっていた。そこで昭和3年(1928)に線路南側の本部所在地と更に南の出穂山敷地に介在している民有地18000坪を取得し、1度交換した大岡山地区の社有地のうち、呑川以西の玉川村、碑衾町石川端および清水窪等の32000坪を提供することを内容とする土地交換が行なわれることになった。民有地の買収は目黒蒲田鉄道が行い、更に東京電燈株式会社の送電線移転等も行うことで、大学の校舎建築の支障をきたすこと無い様に進めることとなった。しかし土地買収は困難を極めたため、完了するまで6年間かかった。この間、大学はずっとバラック校舎であった。

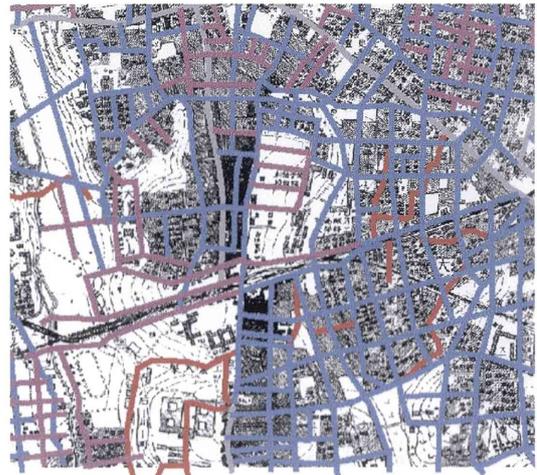


校舎南部の道沿いの農家が移動

「昭和4年地形図」より

大正10年(1921)の地形図を見ると大学本部

の南側に若干民家があるが、昭和4年(1929)になるとなくなっていることが分かるであろう。買収された後である。



線路南側にすべてを移転

「昭和12年地形図」より

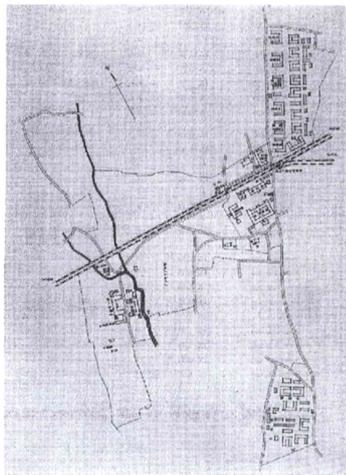
次に昭和12年(1937)では、北側の土地は耕地整理が行われており、南側の斜面に大学の大きな建物ができていることが分かる。周りの市街地も関東大震災の影響で耕地整理が行われ、住宅地化してきている様が見える。当時の大岡山商店街は、現在の商店の通りよりも一本裏側(大田区境に寄ったほう)にあった。当時は大学の近くということもあり、古書籍商だけで20件を超えたという。また東京工業大学には特別予科による中国人留学生の受け入れがあった。そのため、裏通りの商店街にも、中華食堂・衣服店が軒を並べ、のちに現在の上野の中国人商店街へ移っていったのである。満州事変のときは多くの留学生が帰国し、中国人商店が激減した。

関東大震災の影響で移転してきた人々は多くいるが、大岡山地区の市街地形成を担ったのは東京工業大学の影響もある。キャンパスの移転の6年間にキャンパスの整備を断念する声がかかるようになった。学校と共に移転してきた商店街の人々や、新たに学校の教職員や学生目当てに商売を計画していた人々にとっては由々しき問題となる。そこで地元商店街や地権者は運動を起こしたのである。

運動で配ったビラには「もしも工業大学が大岡山から姿を消し、三鷹或いは国立へ移るということにありましたら大岡山の繁栄、大岡山の隆昌は果たして如何になるう。」と書かれており、当時周辺住民がどれだけ大学に依存していたかが窺い知れるだろう。

このように東京工業大学をめぐって、関東大震災という自然災害により、利益を目論んだ目黒蒲田電鉄が土地交換により、郊外への大学誘致を行い、郊外が発展したことが明らかになった。耕地整理や人口増加により自然に郊外へ市街地が拡大したことももちろんだが、国際情勢と大学が周辺環境を変えたことは疑う余地の無い事実である。

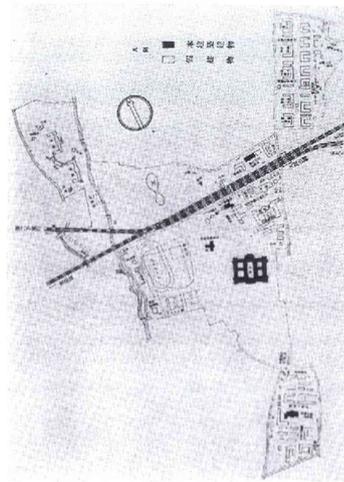
今までの東京工業大学の大岡山における移動の変化を表した配置図が以下のものである。地形図で分かりにくかったところがあれば、参考にしていただきたい。



昭和4年配置図

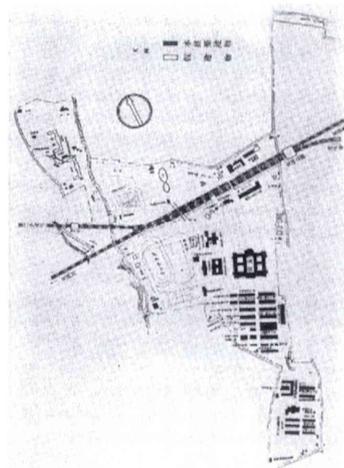
「東京工業大学百年史」より

昭和12年地形図では昭和14年配置図の南側校舎一部が削れて見られなくなってしまうので校舎自体がどのように変化したのかは配置図から確認してほしい。



昭和8年配置図

「東京工業大学百年史」より



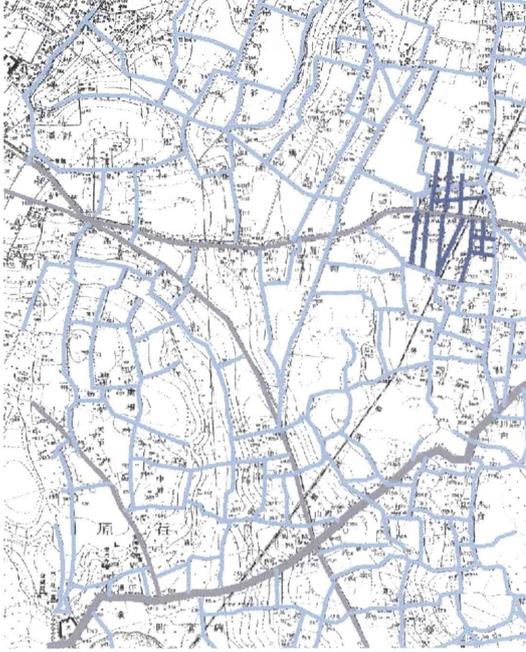
昭和14年配置図

「東京工業大学百年史」より

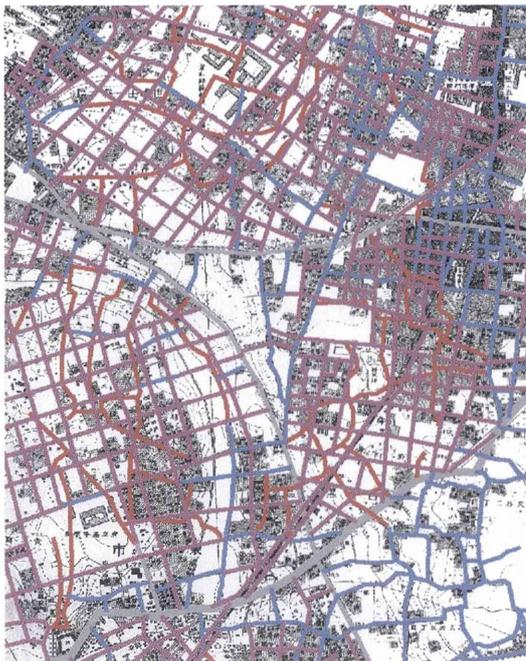
この成功例を見るや、他の場でも移転の斡旋を行ったのである。昭和12年(1937)の地形図の青山師範駅周辺と府立高等駅周辺を見ると、駅名の通り青山師範学校(のちの学芸大学)、府立高等学校(のちの都立大学)がある。昭和4年(1929)の地形図には学校の姿は見当たらない。では8年間に東京横浜電鉄(東横線)と学校間でどのようなやり取りが起こったのかを見てゆこう。

時系列から言うと、東京府立高等学校が赤坂山王から目黒区柿の木坂所在の現在地に移転することが決まったのは、昭和5年(1930)であった。この背景には東京横浜電鉄が会町

に同校の敷地 6 万 9300 m²の買収斡旋を変わりに行ったことによるものである。開校は昭和 7 年になる。



昭和 4 年東横線沿い耕地整理前
「昭和 4 年地形図」より



青山師範・府立高等学校移転後
「昭和 12 年地形図」より

昭和 7 年(1932)には、青山師範学校の移転が決まった。同校の敷地 6 万 6000 m²が駒沢

町下馬に選定されるに当たっては、目黒蒲田電鉄・東京横浜電鉄両社の専務だった五島慶太が、下馬土地区画整理組合代表者から土地を青山師範学校に売却するように斡旋依頼を受けたことによる。東京横浜電鉄も大岡山の東京工業大学の成功例があったために東横線沿線の発展に繋がるものとして、東京市長牛塚虎太郎に尽力を要請し、目的を達成したのである。牛塚虎太郎と五島慶太は 20 年来の親交があったため、このことが達成への力になった事は間違いないであろう。青山師範学校が開校したのは昭和 10 年(1935)のことであった。



府立高等学校鳥瞰図
「目黒区史」より

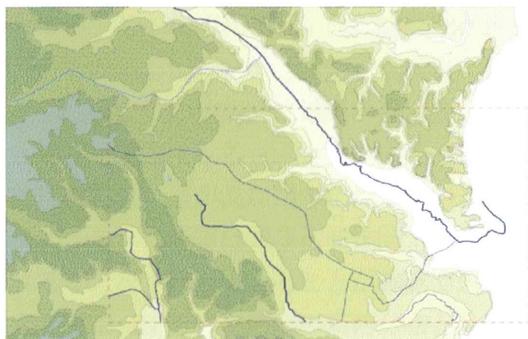
ほかにも日吉の慶應義塾大学、川崎市の法政大学予科(現在の法政大学第二高等学校)、上野毛の多摩美術大学などの誘致も行っている。このような誘致により、攻玉社、昭和大学、武蔵工業大学などは沿線の誘致はされなかったものの、誘発されて沿線へ移転してきたと考えられる。

こうした有名大学・有名高等学校の移転に伴い、沿線の宅地化は耕地整理と相まって急速に進んでいったのである。東横線の輸送量を見てみると、昭和 5 年(1930)下半期における輸送量は、550 万人であったのに対して、今までに上げた学校の移転がほぼ完了する昭和 10 年(1935)にはほぼ 2 倍の 1000 万人に増加していることから市街化の発展が伺える。

2. 時代背景が影響を与えた『場』

(1)品川用水の目的と変遷

第1章の地形において品川区域の地形は3つの台地と2つの川で形成されていることは上げた。3つの台地の中でも目黒川と立会川に挟まれている目黒台に流れているのが品川用水である。



品川区域5m等高線図

「地図資料集」トレースより

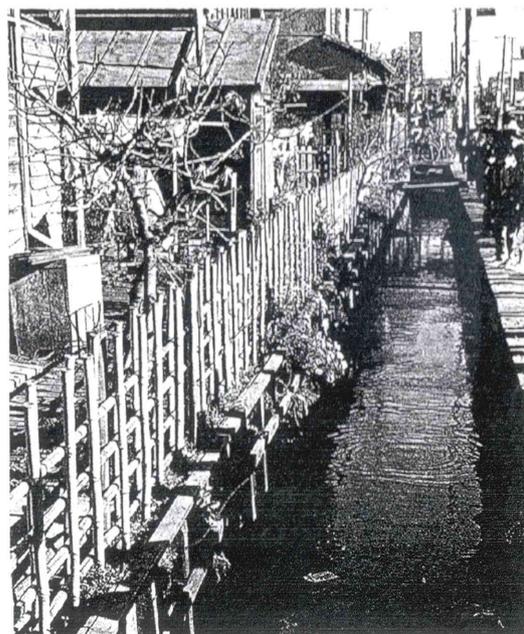
江戸時代の品川用水はほとんどが農耕地帯であったが、その多くは丘陵性の台地になっており、畑作が主体となっていた。明治16年(1883)の地形図からもそのことを知ることができよう。水田は主に河川流域で行われていたが、台地では自然の湧水や雨水を蓄えた溜池を利用して細々と耕作を行っていた。しかし一定に水の供給ができないためしばしば灌漑に悩まされていた。

そのため台地に住む農民は江戸幕府に対して、農業用水を引くことを嘆願し、寛文7年(1667)に用水が引かれるようになり寛文9年に完成したのである。この品川用水の通り道に現在の戸越公園となる熊本藩細川家の抱屋敷があった。抱屋敷まで延ばしたのは、小堀遠州が造った庭のためであろう。屋敷内には池があり湧水もあったが庭を維持する上で水は重要であったのだろう。品川用水の経路を見ても屋敷まで至ってから方向転換していることが分かる。

品川用水は品川の9村(大井・上蛇窪・下蛇窪・戸越・北品川・居木橋・二日五日市・南

品川・桐ヶ谷)の農業用水として開かれたためにそれ以外の村での使用を禁じられ、使用用途も農業に限られていたのである。理由として元禄年間になると肝心の水が品川まで届かなくなってしまったことが挙げられる。それでも十分な供給がかなわなかったので何回か補修工事を行って水を確保しようとした。補修工事費は幕府がほとんど負担したが、各村からもある程度は負担しないといけなかったため補修工事をするたびに村は貧困に飢えることとなった。

明治維新になると品川用水は東京府の管轄になり、9村に加え下大崎村(現・東五反田1~4丁目)と新井宿(現・大田区)に用水の許可が出されて、用水組合を設立した。江戸時代と異なり、自分たちで用水の管理運営をしないといけなくなった。明治末期になると運営費を賄うために、工業用水や消防用水にも利用されることとなった。近代化の波に乗ることで管理運営を行っていた。ちょうど品川用水の末端は現在の大井工場辺りまで延びていることが高低差を表した重ね図から明らかになるであろう。



暗渠化される品川用水

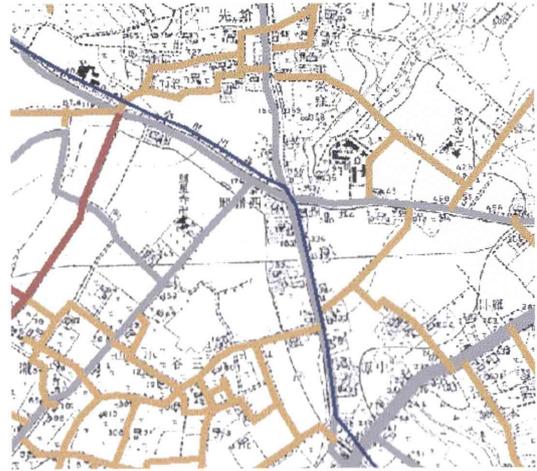
「品川用水溜池から用水へ」より

市街地形成が進むにつれて、新たな人々が住

むようになるが、そのような人々は用水に関する関心が薄く、水路にゴミや瓦礫が捨てられたり、下水を流したりした。昭和6年(1931)に行なわれた品川用水の現状視察では排水路としての役割しか果たしていなかった。この流れは無くなることなく品川用水は次第に下水化していくのである。太平洋戦争終結後の昭和22年(1947)に品川用水の管理は三鷹町に移り、品川区域における役目を終えることとなる。その後昭和30年代に暗渠化されることとなる。

明治42年の地形図に地形の高低差、川のデータを重ねてみると、古道や明治16年までに造られた道が品川用水に沿っていることがわかる。この道は戦争復興地図上でも途切れることなく残っていることが確認できる。また明治16年の地形図の集落分布と品川用水との関係についても面白いことが分かる。品川用水周辺にはほとんど集落が無いのである。用水周辺は水が1番豊富な場所であるので田畑以外を置くことを良しとしなかったのであろう。また農業用水以外で使用することを禁止していたので、集落を近くにおき生活用水に使うことができなかつたのであろう。しかし時代が変わり大正初期(大正5年の地

形図の品川用水沿い参照)になると、中原街道と品川用水の交差点から北側周辺に工場らしき建物が設立されてきていることが分かる。



品川用水附近の工場

「大正5年地形図」より

昭和に入ると用水に近接して建物が建てられて、市街地化したところではどこに用水が流れているか一目では分からなくなっている。しかし品川用水に沿って通っている道は、現在でも残っており、地名としても先ほど挙げた中原街道と品川用水の交差点は、平塚橋交差点と呼ばれている。かつて街道が用水を渡る橋が架けられていたことを現在に伝えているのである。

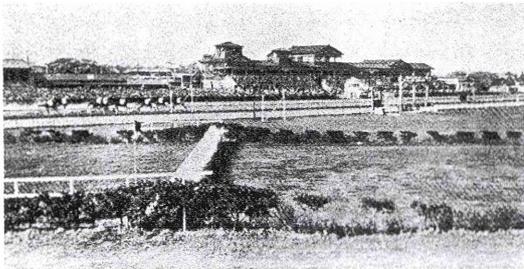


品川用水の主な水路

「品川用水溜池から用水へ」より

(2)庶民の娯楽 目黒競馬場

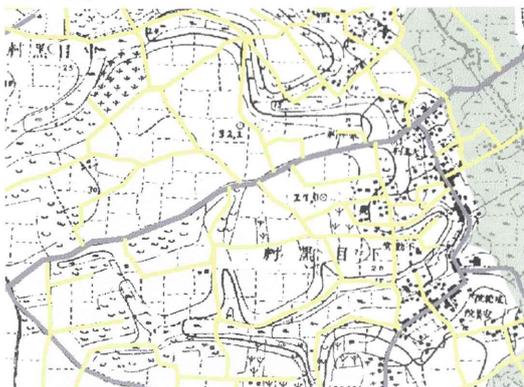
明治 42 年(1909)の地形図に明治 16 年(1883)にはなかった目黒競馬場がある。目黒競馬賞が設立されたのは、明治 40 年(1907)のことである。



目黒競馬場

「目黒区五十年史」より

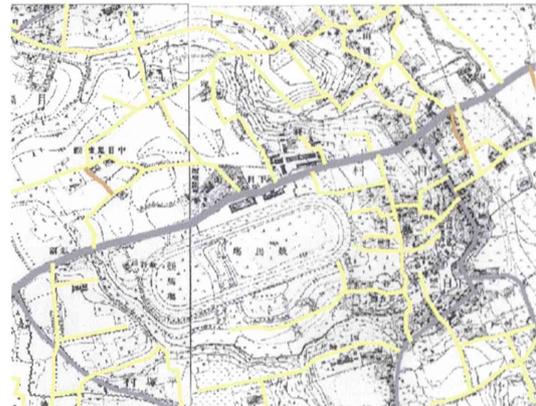
当時は日露戦争直後であり、実は戦争と目黒競馬場の設立が密接に関係しているのである。競馬開催の機運が急速に盛り上がったのは、明治 38 年(1905)12 月に農商務、陸軍、内務、司法の各大臣が合議し、馬券販売を黙許する方針を決めたのがきっかけであった。日露戦争でロシアの騎兵隊に対抗できず、弱点は乗馬だけでなく、大砲を引くこと、運搬するために馬までに及んだ。国家として戦争に役立つ馬を確保するために競馬というシステムはもってこいであったのである。明治 39 年(1906)に東京・池上競馬が大成功を収めたのをきっかけに主催団体である競馬会は各地に設立された。東京においては目黒になったのである。



目黒競馬場設立前

「明治 16 年地形図」より

この場所が選ばれたのは、明治 16 年の地形図から判断できる。集落分布と地形の高低差を重ねると、品川用水周辺は台地の尾根部のため比較的平地続きとなっている。そのため大規模な開発が可能である。しかし競馬場となると周辺から人が来なくてはならない。ではほかに集落が無く比較的平地で東京に近い場所はどこかと考えると下目黒村周辺となる。この辺は江戸時代から寺院が多く、庶民の娯楽の場として栄えており、集落も大きく人が多く、二子道が通っているため人の行き来が多い。また明治 42 年(1909)の地形図には目黒駅が旅客駅としてあるので遠くからの観光客を見込むことが可能である。



設立後の目黒競馬場

「明治 42 年地形図」より

結果この地が競馬場に選定されることができよう。この際に最初は現在の油面小学校の周辺(競馬場の北側)に計画されていたのだが、地元農民の反対で、現在の目黒通りの南側、傘谷戸などの低地を含む馬車に設置しなければならなかったのである。

当時の娯楽空間といえば、上野・浅草、特に浅草 6 区は映画と共に大正オペラ、レビュー、演劇などの様々な流行を生み出していた。そこに東京郊外に競馬場という新たな娯楽ができたことから、素人筋もなかなか多く来場し、かなりの盛況となった。しかし盛況もつかの間、熱中しすぎた結果の生活破綻などが各地で起こったため、馬券販売が禁じられたのである。そんななか 5 代目中村歌右衛門を襲名

する中村芝翫(なかむらしかん)が禁じられた馬券を販売していたことで捕まる事件が起こる。新橋界隈の料理店や待合をひそかに回り胴元が競馬好きの紳士や女将、芸者を競馬場を集めていたのである。実は競馬ファンにはそのような人々の系譜が存在していたのである。花柳界が娯楽空間を嗅ぎ付けて競馬を支配していたということになる。これは面白いことである。

馬券廃止は競馬の賭博製の批判をかわすために購買を1人1枚としたことで復活したが、競馬場の諸経費を賄う程度の売上しか得られず、徐々に衰退していくこととなる。また実は、目黒競馬場は借地であり地主から土地を借りていたのである。元々畑であったところを競馬場にしたので、そのような背景がある事は当然かもしれない。大正、昭和と経て周辺地域の市街化により地価は高騰し、競馬場の運営も困難になっていった。

この時期の地価や市街地形成を左右したのは1つに私鉄の交通網の整備である事は間違いない。この地域は昭和4年(1929)の地形図を見ていただくと、交通網があまり発達しておらず、耕地整理もろくにされていないことが分かるだろう。この頃の目黒競馬場は目黒町に属している。目黒町に隣接している荏原町の人口は大正14年(1925)の72256人が昭和5年(1930)に132108人に増えているが、目黒町は45268人から67236人と荏原町に比べて緩やかな伸びとなっている。交通網がまだ発達していない、人口の伸びから住宅地として発展してくることは十分に予測できる地域である。

そこで目黒競馬場は、借地であることを解消しようとしてより広大な郊外の所有地を求めて、昭和9年(1934)に今の府中競馬場へと移転していくのである。移転してしまった形跡は昭和12年(1937)の地形図にはっきりと残っている。移転後の場所には当初娯楽施設を継承して一大スポーツランド化する意見が上がったが実現せずに、地主たちが区画整理を行い

始めた。地形図にはちょうど始まったところが記されている。区画を決める際に昔の名残として、目黒競馬場の外周をそのまま残したカーブが残されている。現在も残っており昔競馬場があったことを甦らせる場となっている。



目黒競馬場外周の道



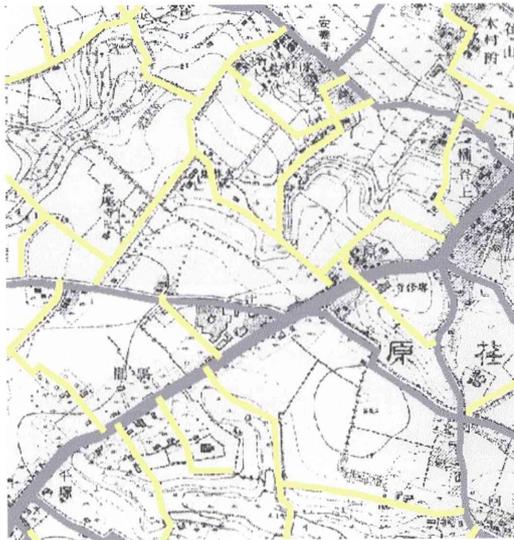
移転後の目黒競馬場跡地

「昭和12年地形図」より

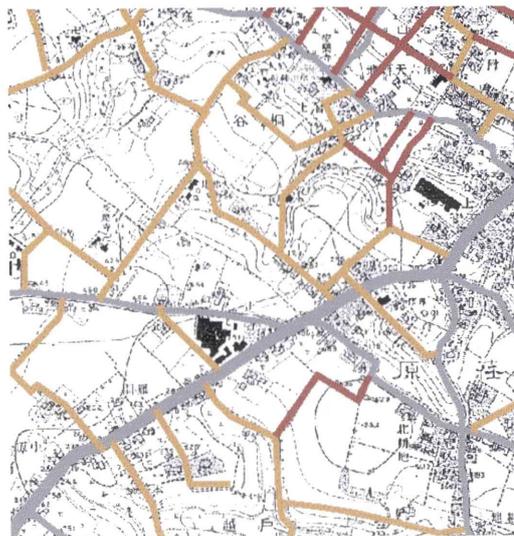
当時、鉄道によって学校が誘致され、周辺の市街化が活性化された裏で、地価が上がったことにより現状維持できなくなり衰退していく場も存在しているのである。

(3)星製薬工場の近隣に大学が設立

第3章の1916年大正5年の地形図の考察において星製薬工場が大崎町に移転してきた理由を述べた。



星製薬会社設立前
「明治42年地形図」より



星製薬株式会社設立後(東側の建物)
「大正5年地形図」より

ではそこから現在の星薬科大学の前身である星製薬商業学校が設立に至ったかをここでは述べていこう。設立の要因は2つある。

1つは、当時の社会情勢が関係している。当時の首相であった原敬は4大政策のうちの1つに「教育の改善」を挙げている。施策と

して高等教育機関の画期的な増設計画を実施しようとしていたのである。資本主義の躍進によって大量の知識人を要求されるものに応えるものであった。

また大正3年(1914)に始まった欧州大戦は瞬く間に世界に広がり第1次世界大戦となった。日本の工業国独立の基礎になった事は、今までに述べてきた。こと薬業界においては、大戦の影響で輸入薬品が途絶した。そのことがかえって国内の製薬工業および基礎的な研究を盛んにする原動力となった。

この情勢の中で注目すべき事は、軍薬学として薬剤師が軍の衛生管理に関与していたことであり、陸軍薬局方が定められ、陸軍衛生材料廠が設置されたことで、薬学の重要性が国民に知れ渡ったことであった。そのような社会情勢が相まって、各地で薬学教育機関の新設、改組が盛んに行われたのである。

2つ目に大正後期になると星製薬会社は、戦争特需により発展を遂げる。製品販売も組織化されて全国展開しようとしたのである。全国展開する際に、各町村1つ1つに特約店を置こうと試みたのである。今で言うチェーンストアの先駆けである。その特約店をただ置くだけではなく、教育においても意を注いだのである。



星製薬商業学校設立後
「昭和4年地形図」より

この2つの要因によって、星製薬株式会社は星製薬商業学校を大正11年(1922)に作り、全国から生徒を集めて養成し、その人材を再び全国に送り込んだのである。



星製薬商業学校の記念大講堂

「星製薬株式会社創立三十周年記念写真帖」より

前述に挙げた鉄道が誘致して移転してきた学校とは異なり、近代化による工場の設立が生み出した学校の例である。

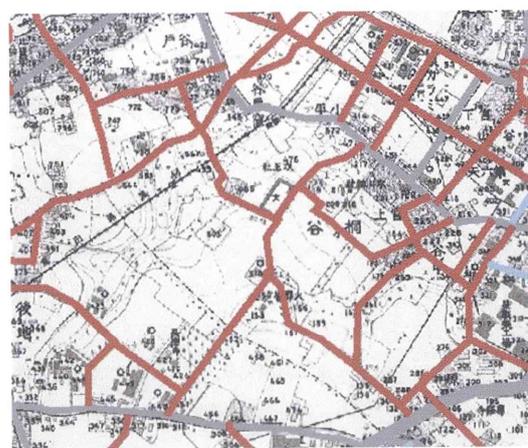
現在のこの場所にはもちろん星薬科大学があるのだが、工場である星製薬株式会社は見当たらない。第2次世界大戦により工場が全焼してしまい、その後の昭和26年(1951)に星一が死去する。その辺りから会社の経営は悪化してしまうのである。ここで大谷米太郎(ホテルニューオータニの創立者)が再建に乗り出し、会社を引き取り、工場の場所に現在の五反田TOC(卸売りセンター)を建てて、その一部門に星製薬株式会社を置き、工場は厚木に移転したのである。昔は星の薬と言ったら知らない人は居なかったほどであるのに、現在では大学のほうが有名となっている。なんとも悲しいことである。

(4)人の住み付かない桐ヶ谷斎場周辺の謎

現在の桐ヶ谷斎場周辺は、攻玉社などの学校や住宅地が密集しているが、大正時代から昭和初期にかけて、周りの近代化による発展に比べて、人が寄り付かない場所であった。



桐ヶ谷火葬場周辺
「明治42年地形図」より



桐ヶ谷火葬場周辺の空白
「大正10年地形図」より

大正10年(1921)の地形図を見ていただきたい。大崎・五反田駅周辺は、元々の集落と工場により集落の拡大が見られ、下目黒は、目黒不動尊の門前町として発展し、娯楽施設の目黒競馬場がある。その間をぬって大正12年(1923)には東急目蒲線が通って近くに目黒不動前駅(後に不動前駅)ができています。しかし、桐ヶ谷周辺には全く住宅地が立っていないのである。地形図上で見るとちょうど火葬場を

中心にぽっかりと空間ができています。人が集まらない土地と化しているのです。

そもそも近代に至るまで、日本の葬送儀礼として火葬は決して主流ではなかった。しかし、政府が埋葬地を限定し届け出制にしたことや、人口の密集した都市部で、公衆衛生上の問題から土葬が禁止されたことなどから、都市部を中心に火葬場が次々と建設され、火葬率は徐々に上昇して行くのである。そうはいっても日本において全国的に火葬が一般化したのは太平洋戦争後、特に生活の近代化が定着してからである。にもかかわらず桐ヶ谷の火葬場は、明治42年(1883)の地形図で既にこの地にある。

火葬場の歴史をたどってみると江戸時代まで遡る。江戸初期の火葬場は、深川、浅草、市ヶ谷、四ツ谷、芝、三田に位置した。江戸の整備発展により、砂村(江東区)、小塚原(荒川区)、上落合(新宿区)、代々木、今里、桐ヶ谷と周辺の村々に移設されるようになるが、寺院との結びつきが強く、火葬場はまだ寺院の境内の一角にあたり、火葬寺として専用の施設として扱われたりした。幕末における江戸の火葬場は7ヶ所でありその中に桐ヶ谷もあった。7ヶ所とも古くは都心に近い位置にあったものが江戸の拡張に伴って周辺部に移転したものと考えられる。



東京郊外の火葬場

「火葬場の立地」より

明治に入るとコレラの流行に伴い、火葬場

がコレラを媒介としているといううわさが流れたが、調査により火葬は伝染病対策に有効であるとされ、火葬が推奨されるようになった。ただし、明治13年(1854)に東京の火葬場を千住、砂村新田、桐ヶ谷、上落合、代々木の5ヶ所として、伝染病流行時を除いて火葬時間は午後8時から午前5時までとした。しかしこの制限も度重なるコレラの流行に明治20年(1861)に当時管轄だった警察庁は、火葬場を8ヶ所にして、火葬場の人家からの距離および火葬場の構造について具体的に定めた。その中で人家からの距離を120間(約218m)以上とすること、火葬場の周囲を塀柵または樹木等で境界をもつこと、火葬の時間は日没から日の出までとすることなどが義務付けられていた。また東京市区改正の時に敷地面積を2000坪以上とした。その時に今まで民営や周りの有志によって経営された火葬場を市営に移行しようという動きがあったが、実現せず現在まで民営で行われている。

このような歴史の中で桐ヶ谷村の火葬場はどのように建てられたのであろう。



霊源寺

「品川区史 通史編 上巻」より

桐ヶ谷の火葬場は、単独でできたわけではなく寺院と関連して建てられてのものである。寺院は葬儀と火葬とのつながりが関係している。霊源寺という寺が現在の桐ヶ谷斎場の前身にあたる。霊源寺は浄土宗の江戸三田長松寺の末寺である。将軍家光のころに三田豊岡町から移ったとされている。その時、茶毘所は境内奥にあったとされている。近村の寺院

での葬送の輩もここで茶毘されたようである。当時は石を並べてその上に棺をのせ火を加えるといった程度の簡素な設備であつたらしく昼夜の別なく火葬が行われていた。そのため規則に先駆けて明治初年に地元の有志が役所に願い出て、昼間の火葬を停止させたのである。明治18年(1885)に火葬場と寺は分離されて、有志による匿名組合の経営となった。その後の大正7年(1918)に現在まで続く博善株式会社の経営に移ったのである。



周辺の比べ発展が遅れる桐ヶ谷斎場附近

「昭和4年地形図」より

大正10年(1921)の地形図のことは初めに述べた。昭和4年(1929)の地形図を見てみると、住宅や近くに攻玉社ができていものの周辺に比べて発展していないことが分かる。この時期になると江戸・明治時代に比べて設備も整っているのに異臭騒ぎなどで近隣住民から抗議などくることは無いであろう。しかし場としての雰囲気、規則の120間(約218m)が発展させないのであろう。桐ヶ谷の火葬場周辺だけ区画割が広くされていることもそのせいかもしれない。戦後になると他の地域と同じように空白部分は無くなり発展を見せている。

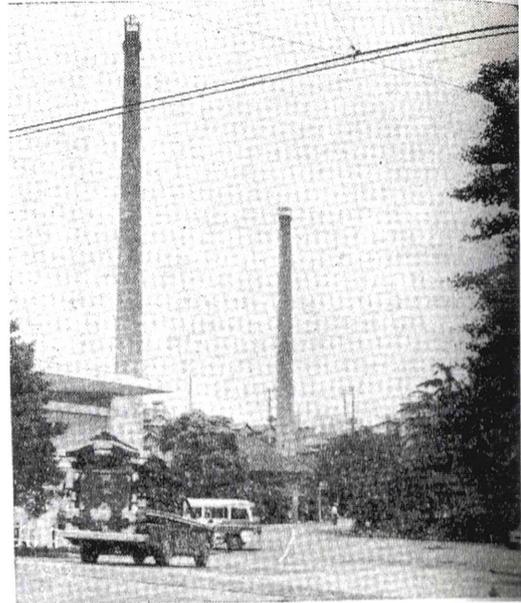
地形的にはこの場所は目黒川流域の低地から台地への変化する縁であり、高い位置にある。人の魂が天に召される点では適して場所と言えよう。この地を訪れると東急目黒線の不動前駅から少し急な坂道を登っていくので、

この高さがこの周辺に人を寄り付けさせなかったのかもしれない。品川区域において人がよりつきにくい場と言えよう。

余談であるが、桐ヶ谷斎場は黒川紀章氏、ジャイアント馬場、美空ひばりなど昭和・平成の著名人の葬儀・茶毘が行われた場所である。



平成 10 年改築・現在の桐ヶ谷斎場



昔の桐ヶ谷斎場

「品川区史 通史編 上巻」より

(5)財閥解体・個人の邸宅から公園へ

現在の東急大井町線の戸越公園駅を降りて東に300mほど歩いたところに戸越公園がある。地図上から見ると現在は不定形でいかにも住宅地化された後に公園ができたように見えるが、中に入ると一般的な公園ではなく庭園の地形をなしており、なにやら歴史があるように感じられる。



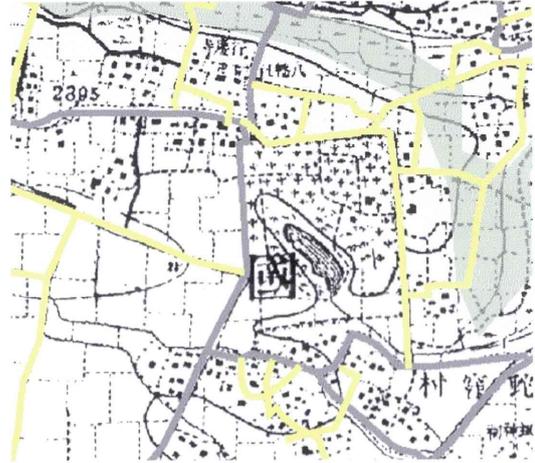
現在の戸越公園

まずは戸越公園がどのような歴史をたどり、現在の形に至ったかを見ていこう。

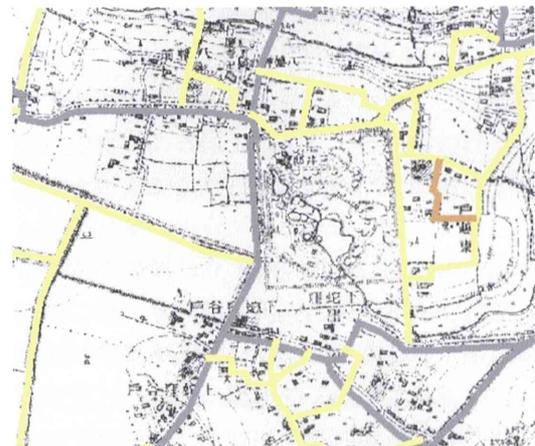
熊本藩の分家熊本新田藩が、細川利重が藩主であった寛文2年(1662)に戸越に22500坪(うち拝領は7200坪)の屋敷を得ることがこの始まりとなる。寛文6年(1666)に熊本藩が白金屋敷内の土地とこの場所を交換し所有することになった。このときの熊本藩主は利重の兄、綱重であった。交換から5年間経った寛文11年(1671)には周囲の土地も抱え、図のような庭園などを整備して広大な土地(10万坪近い)となったとされている。

しかし実はこれ以前にこの土地の所有者はいたのではないかと考えることができる。江戸時代の抱屋敷にしては、戸越公園が含まれる方形の地割りに違和感を覚え、中世の居城の名残なのではと考えることができる。実は中世にこの地域を支配していた大井氏と品川氏の居城がはっきりしておらず、特に品川氏の居城は現在の品川区広町2丁目の権現台という説があるのだが、権現台の地形は狭小な台

地であり中世の居城構成が適した土地とは思えないのである。



三井邸になる前の戸越公園周辺
「明治16年地形図」より



三井が保有しているころの戸越公園周辺
「明治42年地形図」より

また明治42年の戸越公園になる地域を地図で見ていただきたいのだが、東西2.5町、南北3.0町の正確な方形をなし、かつ土塁の後を確認できる。江戸時代の大名屋敷がこのような正確な方形、土塁を置く例はない。さらに戸越公園内には自然湧水がある。一般的に中世の在地領主は、本来律令国家の元にあった権限を分割継承して領主の権利としているが、それだけでは領民は支配できない。そのため農業に欠かすことのできない河川管理・池溝の造成・維持・保全などは領主が国家から受け継いだ重要な事柄であった。灌漑用水を握ることで農民を支配したのである。湧水

源を居城に取り込んでも不思議ではない。確かに私が前に調査した中世の世田谷城においても湧水を土豪に通して台地下の農村に流している形跡があった。以上の点から中世の居城跡を江戸の抱屋敷として転換したのではないかと考えることができる。確固たる証拠が残されているわけではないのでこれ以上述べる事はできないが、可能性の示唆はできるだろう。

熊本藩細川家の抱屋敷がどうなったか見ていこう。



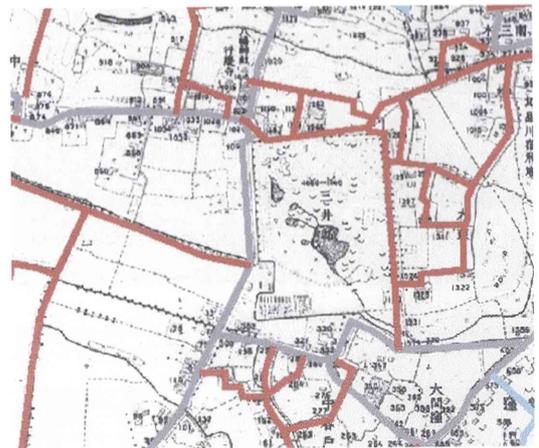
熊本藩細川家戸越下屋敷の絵図(右が北側)

「しながわの大名下屋敷」より

寛文 11 年(1671)には 10 万坪近い広さの土地を持っていた熊本藩細川家だが、天和 2 年(1682)頃までには方形以外の西側の土地を村々に返却し、坪数 33309 坪(うち拝領地 7200 坪)になったのである。その中に品川区

域の灌漑用水となる品川用水が引かれることとなる。仙川用水から分水したものだが、寛文 9 年(1669)に品川用水として灌漑用に使われるようになった。天和 2 年までに西側の土地を村々に返却していったのは、品川用水周辺が畑に適していたからと考えることができる。文化 3 年(1806)に熊本藩は財政難からか、戸越下屋敷の拝領部分を浜田藩松平周防守と相對替し、戸越の屋敷を手放したのである。さらに天保 13 年(1842)に松山藩松平隠岐守の屋敷となったのである。天保 13 年は天保の改革が行われていた時期なので、こちらも財政難で屋敷を手放したと考えられよう。浜田藩から松山藩へは同じ松平として近い大名へ渡したと考えられる。

その後の明治 23 年(1890)に三井家の手に渡ることになる。それ以前の明治 16 年(1883)の地形図の戸越公園を見ていただくと、敷地内に建物がある様子は無く、林で覆われていることが分かるだろう。これは松山藩松平家から三井家へ所有が移るときの間、放置されていたのであろう。明治 16 年(1883)の戸越公園周辺は、品川用水周辺に畑が並んでおり、南北に集落が近接している。昔から下屋敷附近で暮らしていた農民の子孫が住み着いているのであろう。北側にある戸越八幡神社は文禄元年(1592)に開かれているのでその年以前に集落が形成されていたということになる。

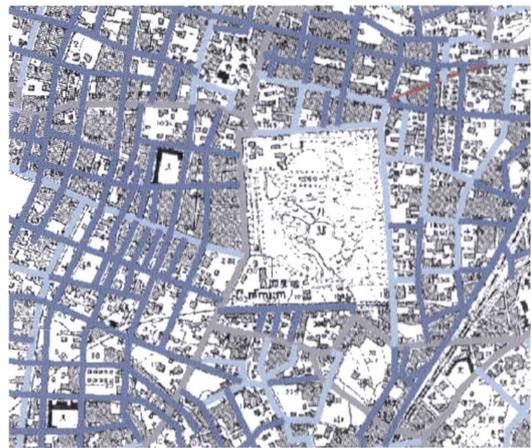


三井農園が造られた三井邸

「大正 10 年地形図」より

大正期に入ると三井家別邸以外に敷地の南側に三井農園が造られた。敷地内の変化と共に周辺住民の考えに変化が起こっていた。関東大震災などを経て品川区域には住民の多数が、職工・サラリーマンと農民・商人などで苦しい生活を強いられていた。対して三井家所有の三井別邸と三井農園は 36000 坪の広さで別世界であった。三井農園には世界各国の草花が多数集められていた。次第に社会問題として大きくなり、地域住民に開放せよという声が高まっていた。例えば、大正 13 年(1924)の『平塚タイムズ』というローカル紙に「砂漠のような平塚村に男爵三井家別邸解放は村民全体の希望である」と表されるほどであった。地域住民への開放が形となったのは、それから 8 年後の昭和 7 年(1932)のことであった。この頃は周辺で区画整理が行われ、住宅が密集し町民の憩いの場が全く無かった。また近くに東急大井町線の駅があったが駅名は蛇窪駅と地名が名付けられており、周辺に特徴ある寺院や建物がなかったことを意味していた。そのような周辺事情と昭和 7 年(1932)に起きた血盟団事件(右翼による財閥重鎮や特権階級へのテロ事件)、同年 3 月 5 日三井合名理事長団琢磨が殺されたことをきっかけに財閥批判の世論をかかわすために三井農園(戸越農園とも言う)の一部を荏原町に寄付したのである。8650 坪ほどが寄付され、そのうちの 5000 坪余りを戸越公園とする工事が昭和 9~10 年(1934~35)まで行われ、工事費の 17000 円も三井家から賄われた。昭和 4 年から昭和 12 年の地図の変化を見ていただきたい。昭和 12 年の地図では南側は戸越公園となっており、北側に現状のまま三井別邸が建っている。三井別邸敷地内だった方形に、区画整理の道路ができ、三井別邸以外にも建物がいくつか建ってきていることが確認できる。また公園に隣接して戸越小学校が建てられている。小学校が建てられたのは、荏原町(旧平塚村)の発展・市街地化が品川地域内で最も遅く、かつ人口増加のスピードが最も著

しかったため、学校敷地の獲得が非常に困難であり、古くから広い土地を所有していた富豪の別邸は格好の場所であったと考えられる。市街地化がほぼ完成に近いため、周辺環境は変わっていないが、大井町線蛇窪駅が昭和 11 年(1936)に現在の駅名である戸越公園駅、同時に戸越駅は下神明駅へと改称されている。三井別邸から戸越公園の変化は鉄道の駅名の変化をもたらし、駅名の変化は周辺住民だけではなく鉄道の沿線住民にも伝わっていたのである。



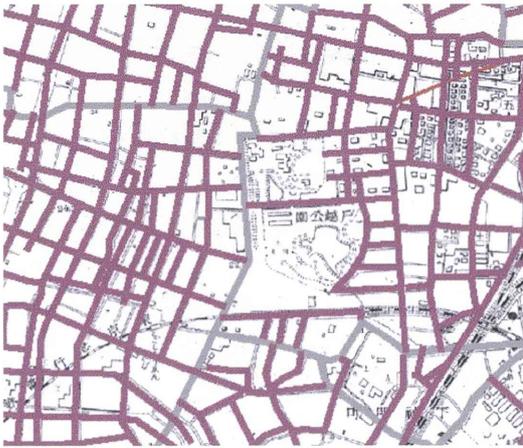
発展している戸越公園周辺
「昭和 4 年地形図」より



寄付された戸越公園
「昭和 12 年地形図」より

戦後になると、地図からは三井家の名前が消えてしまっていることに気づく。これは戦後、GHQ による財閥解体が行われたことにより、三井別邸の場所は国有地となったので

ある。



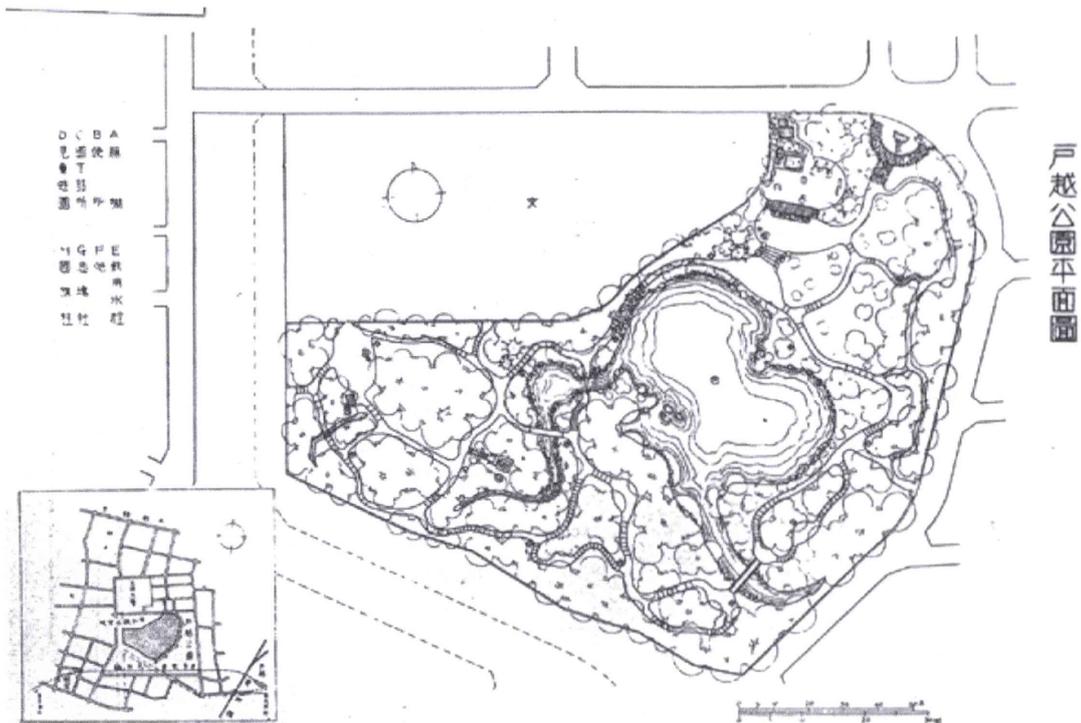
財閥解体後の戸越公園

「昭和20年地形図」より

その後東京都、品川区に移管され、三井別邸の場所には国文学資料館が置かれている。そ

の国文学資料館も平成20年2月に立川に移転するという。

中世からあるとされる戸越公園は、品川氏の居城による方形と台地の縁に存在することからのちに江戸時代の下屋敷としての立地に適した場所として選定された。明治時代に入ると財閥三井がこの場所を郊外の別邸とするが、関東大震災の周辺との格差や第1次世界大戦後の昭和恐慌が引き金となった財閥重鎮などを標的とした事件をかわすための道具として一般開放に至った。その結果、駅の名前が変更され、周辺的环境に影響を与えていたのである。



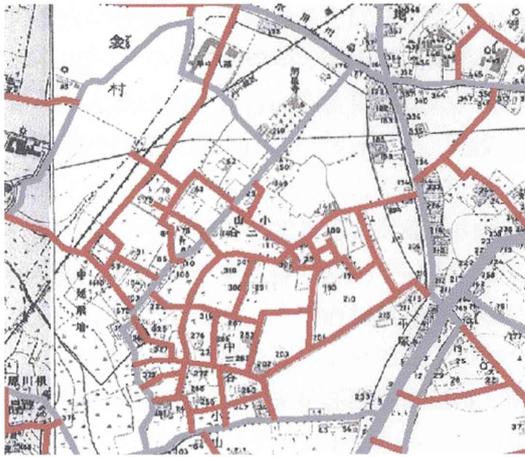
戸越公園平面図

「戸越公園案内」より

3. 生活に影響を与える『場』

(1)東洋一のアーケード 武蔵小山商店街

大正 10 年(1921)から昭和 4 年の地形図の変化を見ていこう。大正 12 年(1923)に東急目蒲線が開通し、同時に小山駅北側に府立第八中学校が設けられている。

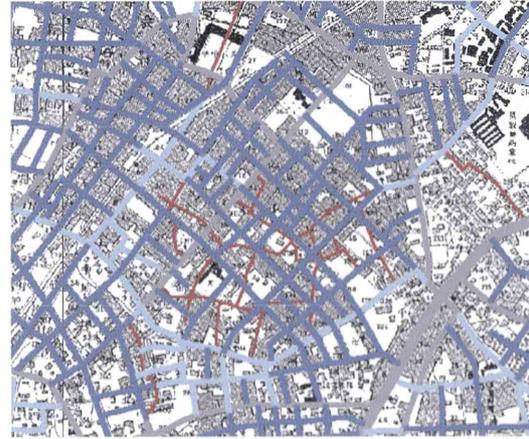


目蒲線北側に府立八中が創立
「大正 10 年地形図」より

同校がこの場所に設けられたのは、目黒蒲田電鉄が幹線したのではなく、府当局が今後この地域が住宅地として発展すると予想して建てたものと考えられる。目黒蒲田電鉄側も、この地に学校ができることを知っていたので、他から学校を移転させることを計画しなかったと述べている。この府立八中だが実は正門が北側についており、駅とは真逆方向に設置されている。当初目蒲線は、地形図にあるよりも北側を通ることとなっていたが、実際は南側を通ることとなり、小山駅(現在の武蔵小山駅)が裏門の直前になる結果になってしまったのである。

大正前期この場所は、ほとんど畑であり、大崎駅・大井町駅周辺に比べて人口もそれほど多くなかった。台地部で人口が多いところは中原街道沿いであり、朝方には神田・京橋の青物市場へと野菜を運び、午後には東京市内からの堆肥を持ち帰る馬車の往来が絶えない道路であった。大正 10 年の地形図に小山駅

から南に下り中原街道とぶつかるところに「小山六六軒」と呼ばれる小さな集落がある程度であった。



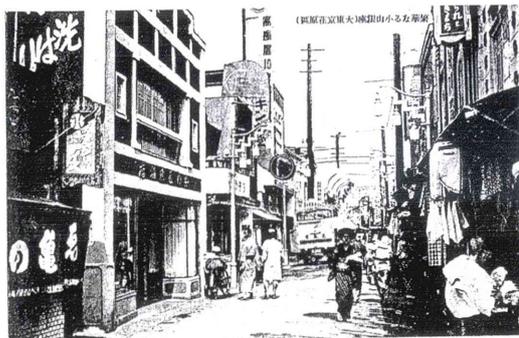
耕地整理後の武蔵小山周辺
「昭和 4 年地形図」より

これが昭和 4 年の地形図では、この地区を代表する繁華街を有する住宅地へと成長しているのである。これほどの発展を遂げたのにはいくつかの要素が 1 度に起こったからだと考えることができる。まずは下地において周辺農民の積極性が見られる。鉄道が通る前の大正 10 年(1921)に農民が田園都市電車小山停留所設置運動を行っていることが確認できる。そのために寄付金を集めているのである。大正 11 年には駅ができていないのに料理屋が 2, 3 軒建てられている。その後鉄道が通ってからも、商友会を創ったり、商業組合を市から購入したり、4 つの会(商友会・商業会・銀座通り・4 丁目会)が競って向上したりしている。そのようにやる気のある街であった場所に、大正 12 年(1923)の関東大震災による東京市の人口流出で郊外に来る人々が、市内通勤者の居住地として決めたのは当然なのかもしれない。また同時期の耕地整理において、平塚村の耕地整理は他の村より始まりが早かったために、当時この地域の土地を持っていた農家は、宅地地主への転進を考えていたので、耕地整理することの異論は無く変化は早かった。

耕地整理によって周辺環境がどのように変

わったかを、関東大震災前の大正10年(1921)の地形図と鉄道が通った後の昭和4年(1929)の地形図を見て比べてみよう。

基本的に古道や明治16年の道は、大正10年と昭和4年の道で重なるので残されていることが分かる。また昔の道で分けられた区画をどうにかして整形にしていることも気づくことができる。そのなかで駅周辺ごとに変化の度合いが異なっていることに気づく。現在の品川区内で小・中規模の商店街がある駅の近くはそれほど大きな区画変更がない。しかし武蔵小山駅・西小山駅、後述する戸越銀座駅周辺は、元の区画の跡がほとんどないくらい整形になっているのである。武蔵小山駅周辺は駅と中原街道を直線で結んでいることが大きな特徴であろう。その直線状道路を軸にして並行・直交道路を造っていることがわかる。現在駅と中原街道を結ぶ直線道路は、武蔵小山商店街のアーケードがかかっている場所である。



昭和7年の武蔵小山商店街

「むさしの国荏原 荏原と荏胡麻の歴史を探る」より



現在の武蔵小山商店街

詳しく区画のことは見るのであれば前述(第3章の昭和4年地形図の考察)の区画図を参考にしていきたい。

直線道路には、当時風呂屋をはじめとして、糸屋、ブラシ屋、漬物屋ができ、ついで各種商店が建ち並んだという。商店は東京市内の震災被害商店や、近隣の道路拡張工事により移転を余儀なくされた商店など、他からの来住者による商店が多く占められていた。中でも多かった商店が呉服店であり、今日の武蔵小山商店街の衣料品の強さは、商店街の草創期からの伝統であったといえよう。

その後は、商店街組合の店舗数も多くなり、4つあった会を統合し昭和12年(1937)に商店街の形態が整ったのである。しかし昭和18年(1943)に戦時体制に入り商店街組合は解散し、空襲で全壊となってしまふ。



空襲で全壊した武蔵小山周辺

「昭和20年地形図」より

戦後になると商店街発足の準備を行い、徐々にもとの形に戻っていった。戦後初の防犯灯を電柱に設置したり、福引大売出しなどのイベントを開催したり、組合が中心となり商店街の活性化を行っていった。そして昭和31年に武蔵小山の代名詞であるアーケードの設置に至るのである。

武蔵小山の発展はひとえに周辺住民の力だといえることができるだろう。そこに外的要因として関東大震災、耕地整理があったにせよ、サラリーマンではない多くの人が移住したこ

とで人情濃密な、下町情緒の多い街になり、そうした気風を中心に発展し続けたのである。これは同じ区域の各駅がサラリーマンの乗降する駅を中心とした町であったことに対してホワイトカラーではない階層の人々によって

形成された街との相違である。

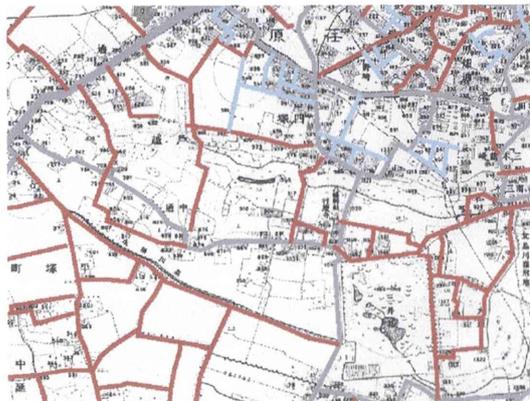
いわゆる‘文化的’階層のエネルギーと、自営業者・生産従事者層の多い町の持つエネルギーの差が、商店街形成の差に反映したものと考えることができる。

(2)銀座から名前をもらった戸越銀座商店街

まずは戸越がどのような場所であったかを地名から見ていくことにしよう。戸越の地名の由来は二説ある。一説は、戸越八幡神社の碑にあるもので、「江戸越えて清水の丘の成就庵願の糸のとけぬ日はなし」という古歌があるように、つまり江戸を越えたところに成就庵(戸越八幡神社の隣にある行慶寺のこと)という意味の「江戸越」説である。

もう一説は、「谷戸越」説である。戸越あたりは谷が多いことから谷戸越「やとごえ」が「とごえ」になったという説である。どちらが正しいのかはいまだ分からないが、この2つの説の寺院と谷というキーワードが戸越にとって重要であることは確かである。

まずは地形図で戸越銀座周辺がどのように変遷したかを確認していこう。



耕地整理前の戸越銀座周辺
「大正10年地形図」より

寺院は大正10年(1921)の地形図を見ていただくと分かるが、三井邸(現在の戸越公園)の北側に位置する。行慶寺と戸越八幡神社がある。行慶寺は、もともと旧中原街道沿いにあった成就庵が始まりであり約470年前に建てられたものである。その頃はこの地域に水源が豊富な池があったという。中原街道沿いの構えたのは、街道を行き来する旅人に白湯を渡したり、村人に念仏を行ったりしたからである。現在の場所に構えたのは、江戸時代になってからである事は江戸名所図会から判

断できる。戸越八幡神社の建立が文禄元年(1592)というからその後成就庵が行慶寺と変更され今の地に来たのだろう。



戸越八幡神社



行慶寺

地形図では行慶寺と八幡神社の周辺には幾つかの集落があることが分かる。近くに三井邸もあるので栄えていたといえよう。また、行慶寺と八幡神社の北側は谷地であったことが確認できる。高低差を重ねると分かるだろう。しかしまだ戸越銀座商店街の形は全く見当たらない。

昭和4年(1929)の地形図を見ると、行慶寺周辺が耕地整理されており、北側の谷地に直線状に現在の戸越銀座となる道が出来上がっている。地形で見ると戸越銀座商店街は谷地に存在していることが分かる。これは、戸越銀座という名前の由来とも関係が深い。全国に〇〇銀座という商店街は数多くあるが、戸越銀座は〇〇銀座を名乗った日本で最初の商店街である。そのいわれは、大正12年(1923)

の関東大震災後、戸越の商店街附近の水はけが悪くなって困っていたところ、本家の銀座通りが震災による舗装替工事のために煉瓦を撤去することになり、その煉瓦をもらい道路の排水のために使用した。その縁から戸越銀座という名前がついたのである。ここで水はけが悪くなった事は、戸越銀座商店街が谷地に存在したからである。仮に台地にあったならば、戸越銀座という名前も付かなかつたし、東急池上線の駅名も同様に違っていただろう。



戸越銀座商店街から坂道を撮影、谷地と分かる

その煉瓦が製造されたのが、実は明治初期に設立された品川白煉瓦製造所(大崎駅の東・現在の北品川4丁目)であった。品川で製造されたものが戻ってきたことになる。

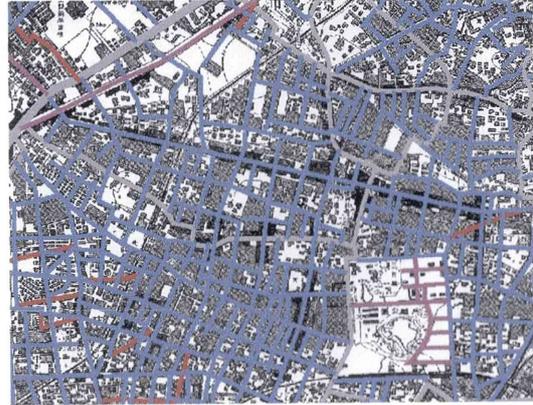


現在の戸越銀座の原形

「昭和4年地形図」より

戸越銀座商店街の発展についてだが、昭和4年(1929)の地形図を見る限りだとどのように広がったかを考えることはできないが、大正10年(1921)の地形図と現在の地形図を照

らし合わせると三井邸(現在の戸越公園)の東に位置する集落と行慶寺・八幡神社下の谷地、戸越銀座駅の3点から発展したと推測できる。



直線状の戸越銀座商店街

「昭和12年地形図」より

東側に位置する集落については、現在の地形図で児童センターから下に伸びる商店街がある。名前を平和坂からとって平和商店街と呼ばれているところである。駅が近くにあるわけでもなく、戸越銀座の直線道路からも外れていることから後からできたとは考えにくい。行慶寺・八幡神社下の谷地は、現在銀六商店街と呼ばれており関東大震災の際に浅草や神田で被災した商業者が疎開し、国鉄大崎駅近くに点在した工場の職工が重要な顧客であった。このような事から下町情緒を感じる商店街と言われることもある。1960年代までは最も賑やかな商店街の1つであったことから関東大震災直後は、中心であったと考えられるだろう。駅の近くは言わずともであるが、利便性の良さから駅から徐々に商店街が広がっていったと考えられる。

このように発展した経緯が幾つも存在したから全長1.6kmの日本一長い商店街が形成されたという事ができるのではないであろうか。

4. 人の移動を促す『場』

(1)品川区域の主要道—中原街道—

古道として明治16年(1883)から昭和30年(1955)までの地形図上で品川区域の重要な交通路であった中原街道の周辺は如何に変遷していったかを見ていこう。

中原街道という名称だが終点の中原(現在の平塚市中原)からつけられたもので、江戸初期の役割は、宿泊施設と防衛的役割を果たす拠点を兼ねたと考えられる「御殿」が小杉と中原に設けられるなど重要な役割を果たした道である。しかし東海道が官道として整備されるとその役割も脇往還(五街道以外の主要な道)になってゆく。中原街道は東海道よりも短い距離で江戸まで行くことができたので、緊急の旅や参勤交代などで東海道が交通渋滞をしたときに盛んに利用された。江戸中期以降は沿道の産物を江戸に輸送するために用いられ、重要な役割を担っていた。その頃の街道筋の人々がどのように中原街道と係わっていたかを見ると、三田から高輪にかけては江戸の朱引き内なので道の両側には大名屋敷や寺院が立並び、白金台町から品川台町にはいと町屋が並び、宝塔寺の前は門前町屋になっていた。目黒道と交差する附近には水茶屋が2軒あり、戸越村にかかる道の左右の林の間にところどころ民家があったという。

明治時代に入っても周辺集落の産物を東京へ運ぶ道としての役割は変わらなかった。そのため集落は街道沿い周辺か、もしくは水田の近くの台地に集落を構えていた。明治時代は、主に馬車などが通っていたので道の形状は地形に依存していた。

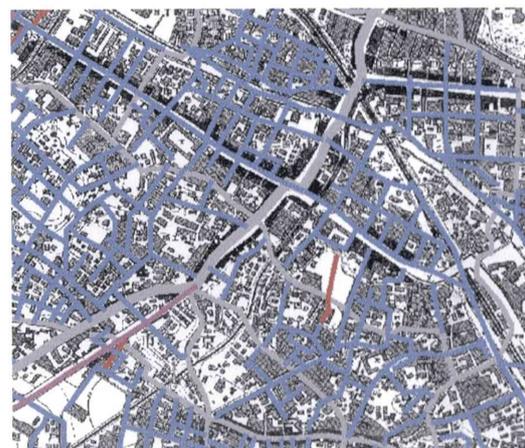
大正後期から乗合自動車などが始まり、道路整備が始まったことにより中原街道にも形状の変化が現れてきた。大きな変化は昭和4年(1929)から昭和12年(1937)に見られる。2つほど挙げよう。まずは現在の中原街道と山手通りの交差点から目黒川が流れるところま

での間の幅員が拡張されて元々明治以前に集落があった関係で折れ曲がっていた道が直線になっていることに気づく。



中原街道と山手通りの交差点

「昭和4年地形図」より



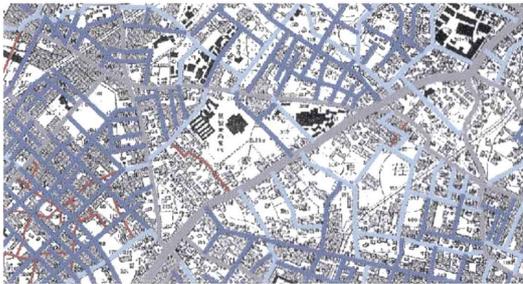
幅員拡張の中原街道

「昭和4年地形図」より

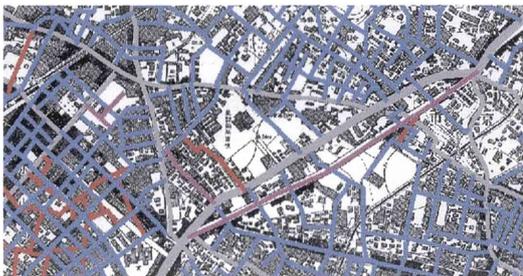
次に大きな変化として、旧中原街道が出来たことである。現在の西五反田6丁目から荏原2丁目までの間に新しく直線道路を造り、車が通りやすい幅員の広い道を通したのである。恐らく旧中原街道の周辺には品川区の「子別れ地藏」や「旧中原街道供養塔群」、昔からの商店が建ち並んでいた為に幅員を広くできずに新たな道を造ったと考えられる。明治16年(1883)の地形図でこの地域がどのようなになっていたかを確認すると、中原街道に沿って集落があった場所である。農村部でも歴史があった場所である事は間違いない。

このように中原街道は元々江戸への産物を運

ぶための道として使われ、周辺に農村集落、街道を使う人々のための商店があり、街道に人が依存していた、街道>人の関係があったが、近代化が進み自動車が道路を通り始めると、人の手によって形状を変えるようになっていった。まさに人>街道と立場が変わった。人が通らなくなった旧中原街道は徐々に廃れて活気がなくなってしまったのである。



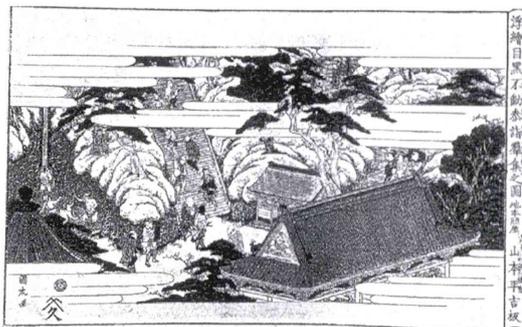
星薬科大学附近の中原街道
「昭和4年地形図」より



直線状の中原街道
「昭和12年地形図」より

(2)参拝・娯楽の道—目黒道—

目黒道とは、目黒不動を中心とした『江戸名所図会』に紹介されている寺院名所の周辺地域へ向かう道であった。目黒道は、参詣あるいは、行楽の場が道周辺に複数集中していることが、他の道と違う点としてあげることができる。目的は3つに大別され、信仰として目黒不動尊や周辺寺院への参詣、名所見物の行楽、不動周辺にあった茶屋を目標とするものであった。



浮絵目黒不動参詣群集の図
「品川の古道」より

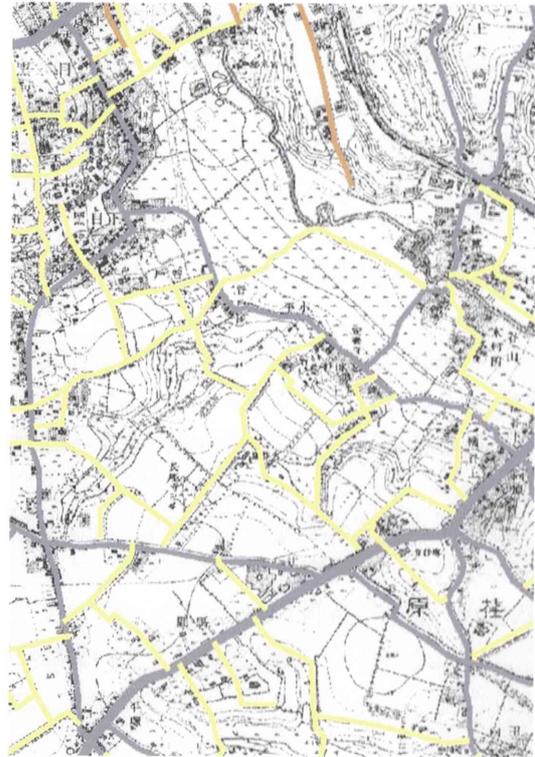
目黒不動は泰叡山瀧泉寺といい、大同3年(808)に慈覚大師が開創、寛永11年(1634)3代将軍家光の意向により再建されたとされている。境内には不動行者の水垢離の道場となっていた『独鈷の滝』や3代将軍の鷹狩りにまつわる『鷹居の松』があり、信仰の霊場として即効的な現世利益を幅広く約束する守護神だけでなく、江戸庶民の娯楽地として圧倒的な人気があった。

江戸時代は都心からの行人坂と目黒不動の境内までの間にはかなりの数の茶屋があったことが確認されている。このような場があったため明治16年(1883)の地形図の集落分布で大きな集落となっていたのだろう。

目黒道には諸説あるが、地形図と照らし合わせると、江戸町中から行人坂を下り二子道を通り、目黒不動に至る道と中原街道から安楽寺・氷川神社を経て目黒不動へ至る道、現在の平塚橋から目黒不動へ至る道が有力なのではと考えることができる。有名な場所だっ

たために広範な地域から目黒不動周辺に人々が訪れる様子が窺い知れる。

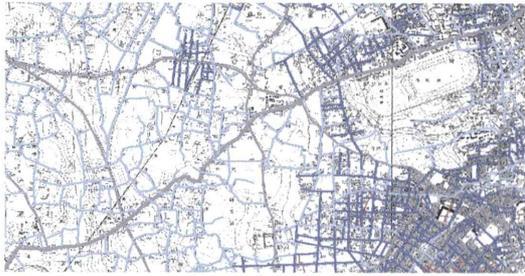
そのように考えると、この地に目黒競馬場ができたのもそのような娯楽の場としての様相を呈していたからなのかもしれない。門前町としての雰囲気がこの周辺の発展を近代化からある程度遮断して人口増加などを他の地域に比べて緩やかにしたことと関係している可能性も考えられる。



目黒道であると思われる道(灰色)
「明治42年地形図」より

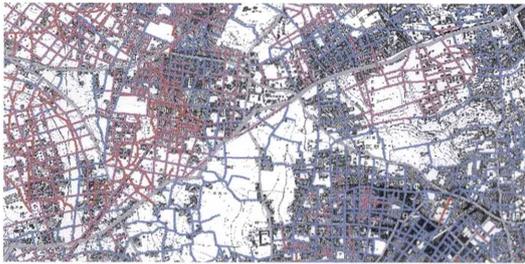
(3)オリンピックの道—二子道—

二子道(現在の目黒通り)に関しては詳しい文献を見つけることが困難だったため深く歴史を語ることができない。しかし近代化によって面白い変化を遂げているのでそのことについて地形図を見ながら述べていこう。



幅員拡張前の二子道(目黒通り)

「昭和4年地形図」より



拡張後の二子道(目黒通り)

「昭和12年地形図」より

明治16年(1883)から古道として今の溝の口の方角へ通っている。大きな変化が現れるのは、昭和4年(1929)から昭和12年(1937)

の間で起こっている。幅員が大きくなり、より直線状になっていることが確認できる。これ何による影響なのであろうか。

これは、昭和15年(1940)に行われるはずであった幻の東京オリンピックの為に改修された跡である。皆さんがご存知の開催された東京オリンピックは戦後の昭和39年(1964)のことである。幻で終わってしまった理由は、日中戦争に突入してしまったことにある。元々、神宮外苑球場を主会場にしようとしていたが、大会を行うには大きさが合わないことから駒沢ゴルフ場の土地を駒沢オリンピック公園へと変えようとした。公園までの道を拡張目的で二子道を改修しようとしたのである。

この当時の二子道は『幹線放射三号線』であり、改修計画では目黒区下目黒から碑衾町碑文谷まで『延長3860m、幅員25m』というものであった。確かに碑文谷の辺りまでは幅員が大きくなっていることが分かるが、東急線と交差する辺りからはなっていない。オリンピックの中止が発表されたからである。車のあまり通らない広い道が残ったので、そこではキャッチボールや縄跳びなど、町会の運動場のような風景が続いたという。

5. 第4章のまとめ

明治16年から昭和30年にかけての約70年間で起こった出来事は前述したように時代背景、鉄道網の発展、戦争・震災などの要素が相互的に絡み合っただけでなく、市街地変遷をもたらしてきた。マクロ視点からの読み取りで出てきたキーワードを元に、実際どのように要素が作用したのかを考察していった。ここでは鉄道、時代背景、生活、道という4つの視点からまずは切り込み、場所の歴史、違う視点があるのかを見ていった。

妙華園・目黒競馬場・戸越公園の公共空間化は、共通して地形の土台があったといえよう。3つの場所は台地の縁に近かった。妙華園は縁と品川用水が近くに流れていたため植物園として近隣住民だけではなく年間数万人のひとが来場していた。目黒競馬場が台地の縁に近いのは江戸時代に庶民の娯楽の場として栄えた目黒不動などの寺院が縁にあり、歴史性を継承し、近辺に設立されたと考えられる。戸越公園は中世の品川氏の居城であった可能性があり、その歴史を継承して熊本藩細川家の抱屋敷・三井邸を経て公園として開かれた。妙華園・目黒競馬場は鉄道、時代背景により衰退し現在に残っていない。戸越公園は現在まで残っているが、三井邸がこの土地を手放したのも時代背景といえよう。

大井工場・星製薬会社の工場化は、背景に東京市内から移転して工場の街として当時発展していた大井町や大崎町周辺に工場を設立した経緯を持つことがわかった。お大井工場は使用する場所が大きかったため、地形を切

り崩すように掘り、平地にした後に工場を設置した。当時としては自然を廃し建物を置くことは珍しい。建物>地形の先駆けともいえよう。逆に星製薬会社は薬作りのため、郊外の環境の良さを求めた。工場といえども造る物が異なると場も異なるということである。

有名校の移転・武蔵小山・戸越銀座の求心性は、鉄道による発展が目覚しかったといえる。武蔵小山・戸越銀座などの商店街のきっかけとなったのは大正12年の東急目蒲線開業の少し前から周辺農民の鉄道の敷設を働きかけたことによる。有名校の移転については関東大震災により東京市内に学校を構えられなくなったことにより鉄道会社が郊外に移転誘致したことがきっかけとなった。

桐ヶ谷斎場周辺・品川用水のケの場所(穢れのケと日常のケ)は、元々江戸時代に造られた歴史が共通である。1つは人の死を司る場、他方は人の生活を補助する場として造られた。この2つの共通点は住宅が周辺に存在しにくかったことである。理由は各々異なっている。2つの場所に住宅地の波が押し寄せたのは昭和初期になってからである。その後、品川用水は暗渠化されてしまい現在その姿をみることができない。桐ヶ谷斎場は周辺への配慮の為に斎場と見せないような佇まいをしている。

このように細かく場所を考察すると地形図だけでは読み取ることでできなかった変遷のポイントを掴むことができた。特徴的な場を考察することによって結論で述べる約70年間の中間指標に気づくことができた。

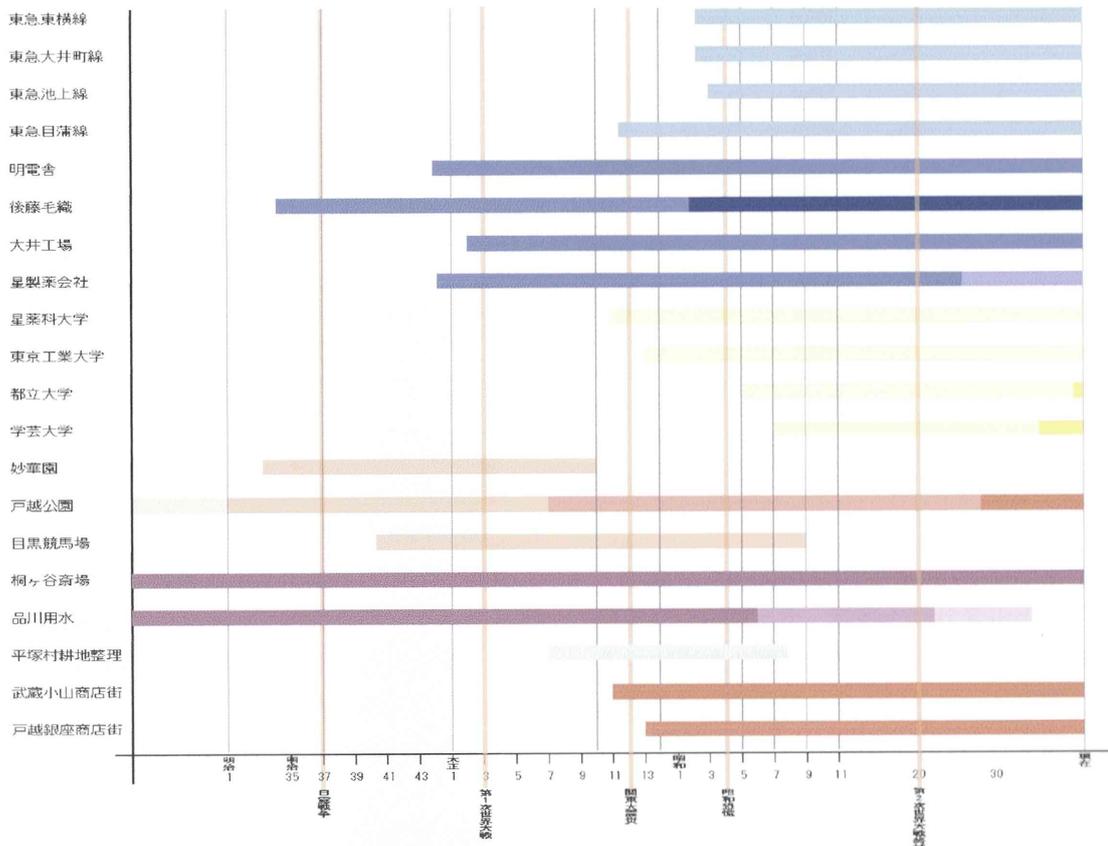
第5章 結論・東京西南部の

市街地変遷の中間指標

第5章 結論・東京西南部の市街地変遷の中間指標

本研究では東京西南部の近代から現代にかけて約 70 年間の様子を地形図から比較し、東京西南部で周辺に影響を与えた建物・出来

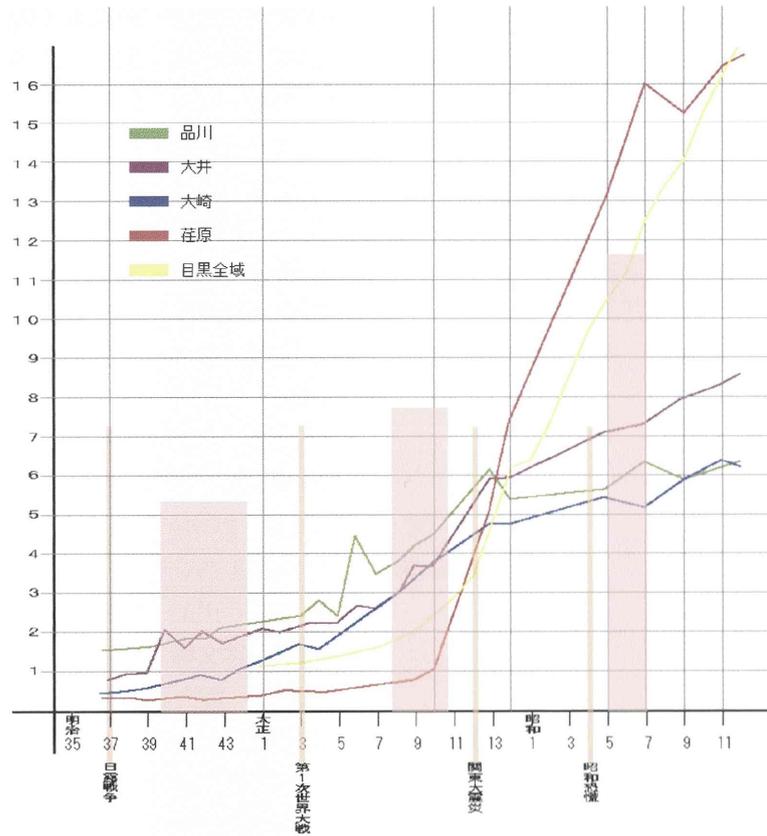
事に着目した。その結果をまとめた表が以下のものになる。



品川区域に影響を与えた建物・出来事の発生と変遷をグラフ化したものである。このように見るとある一定の時期に発生と衰退が集中していることが分かる。1つは明治後期の工場群の発生である。日露戦争によって発生したと考えていたが、移転してきた工場が多いことからタイムラグがある。次に関東大震災直前の時期である。農村部の都市化に大きな貢献をした東急目蒲線の開通、耕地整理、武蔵小山商店街、星薬科大学の設立がある。逆に衰退したものとして妙華園がある。妙華

園の衰退は工場群の発展が影響した。最後に昭和 5~9 年にかけてである。立会川以西の都市化に貢献した学校の移転である。この時期に衰退したものとして目黒競馬場、荏原町の耕地整理の終了がある。考察前は世の中の大きな出来事(戦争・震災)に影響を受けて発展し始めたと考えていたが、実は出来事と発生との時期はそれほど関係していないことが分かった。

このように市街地変遷の中間指標が明治後期、関東大震災直前、昭和5～9年に起こっていることを明らかにした。以下の表を見ていただきたい。



表は明治後期から昭和初期にかけての品川区域の人口推移と主な出来事、中間指標をまとめたものである。このようにしてみると出来事の前に中間指標を確認できる。また人口と中間指標を見ると、中間指標後に人口の変化が見られる。これはその地域の発生と見て取ることができる。

以上のように東京西南部の市街地変遷は、一見出来事の変化があったように見えるが、変遷の兆しは以前に起こっていたのであ

る。

本論文では明治16年から昭和30年までの研究を主に行った。激動の時代変化の中で大きな市街地の変遷が起きた。昭和30年以降は大きな変遷が無いかもしれないが重要である。今回の研究が今後の品川区域の研究の礎になってくれることを期待したい。

■参考文献

1. 1万分の1地形図 品川 明治16年
2. 1万分の1地形図 碑文谷 明治16年
3. 1万分の1地形図 品川 明治42年
4. 1万分の1地形図 碑文谷 明治42年
5. 1万分の1地形図 品川 大正5年
6. 1万分の1地形図 碑文谷 大正5年
7. 1万分の1地形図 品川 大正10年
8. 1万分の1地形図 碑文谷 大正10年
9. 1万分の1地形図 品川 昭和4年
10. 1万分の1地形図 碑文谷 昭和4年
11. 1万分の1地形図 品川 昭和12年
12. 1万分の1地形図 碑文谷 昭和12年
13. 戦災復興地図 1万分の1 品川 昭和20年
14. 戦災復興地図 1万分の1 碑文谷 昭和20年
15. 1万分の1地形図 品川 昭和30年
16. 1万分の1地形図 碑文谷 昭和30年
17. 荏原郡全図 丸善好文館 1926.7
18. 東京府下平塚村全図 文化地図普及会 大正14年
19. 平塚村耕地整理組合地区確定図 平塚耕地整理組合 昭和8年
20. 平塚下蛇窪戸越耕地整理組合地区確定図 下蛇窪戸越耕地整理組合 昭和9年
21. 品川区史 通史編上巻 品川区 1973
22. 品川区史 通史編下巻 品川区 1974
23. 目黒区史 通史編 東京都立大学学術研究会 1970
24. 目黒区五十年史 東京都目黒区 1985
25. 品川の古道 品川区教育委員会 1998.3
26. 火葬場の立地 日本経済評論社 2004.12
27. めぐろの昔を語る 目黒区郷土研究会 1995.3
28. 目黒区史跡散歩 山本和夫 1992.10
29. 品川区史跡散歩 平野栄次 1993.7
30. 星薬科大学八十年史 星薬科大学史編纂委員会 1991.5
31. 星製薬株式会社創立三十周年記念写真帖 星製薬株式会社 1940.11
32. 戸越公園案内 東京市役所 1935.3
33. 東京府荏原郡大井町平塚村 東京通信局 1922.8
34. 大井工場90年史 大井工場90年史編纂委員会 1963.3
35. 品川用水沿革史 倉本彦五郎 1943
36. 駅名で読む江戸東京 大石学 2003.1
37. 東京工業大学百年史 通史 東京工業大学 1985.5
38. あゆみ 武蔵小山商店街協同組合15年史 武蔵小山商店街協同組合15周年記念編纂委員会 1962

39. 東京急行電鉄 50 年史 東京急行電鉄株式会社社史編纂事務局 1973
40. 品川区の歴史 品川区文化財研究会 1979
41. 品川区史 資料編 地図統計集 品川区 1972.1
42. しながわの大名下屋敷—お殿さまの別邸生活を探る— 品川区立品川歴史館
2003.10
43. ふるさと小山の村から街へ 名倉俊衛
44. 品川の人物史

謝辞

修士論文を書き上げるにあたり多くの人に助けいただきました。毎回のゼミにて指導教授である大江先生には多くのアドバイスを頂きました。また途中で行き詰った時に方向転換をして新たな道を示していただきました。副査の陣内先生、高村先生には歴史研究の観点から違う視点を考えさせられ、重要な意見をいただきました。論文は1人での戦いであったため、リズムや波があり持続させるうえで友達との会話が気分転換になったと思います。後輩である斉藤くんには色々お世話になりました。今まで出会ってきた人との関係によってこの論文は完成することができました。

2008年2月13日 土井康太

P377.5
M35-2
2007-2

